
深谷市

沢口遺跡

令和2年度

ボトルネック解消推進（改築）工事

主要地方道深谷嵐山線／深谷市田中地内

埋蔵文化財発掘調査報告

2021

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、埼玉県5か年計画において、「埼玉の活力を高める社会基盤をつくる」という目標を掲げ、関越道、圏央道などの広域的な幹線道路だけではなく、地域の生活を支える身近な道路の整備を進めています。主要地方道深谷嵐山線が国道140号と交差する武川交差点付近は、クランク状になっており、踏切も近接していることから、朝夕の通勤通学時間帯を中心に交通渋滞を発生させるボトルネックとなっています。これを解消するため、国道140号バイパスから武川交差点までの区間について、秩父鉄道との立体交差を含むバイパスを整備する事業を進めています。

事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である沢口遺跡があることから、同事業に伴う事前調査として、埼玉県の委託を受け、当事業団が発掘調査を実施しました。発掘調査を実施した深谷市田中・上原周辺は、鎌倉幕府の御家人である畠山重忠の本拠地として知られています。また、本遺跡の荒川を挟んだ対岸には、畠山氏や家臣の本田氏の館跡も存在しています。

発掘調査の結果、縄文時代の集落跡をはじめ、中世の大型の掘立柱建物跡や井戸跡からなる南北約80mにおよぶ可能性がある屋敷跡が発見されました。この屋敷跡は、この地域を所領とする畠山氏に関連する武士の屋敷跡と考えられ、地域の歴史を考えるうえで貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県熊谷県土整備事務所、深谷市教育委員会、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例　言

1 本書は深谷市に所在する沢口遺跡（第2次、第4・5次調査）の発掘調査報告書である。

2 遺跡名と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

沢口遺跡（Na67-170）

第2次調査（調査当時：A地点第2次調査）

埼玉県深谷市上原431-2他

平成26年5月1日付け 教文資第2-2号

第4次調査

埼玉県深谷市上原字沢口411

平成31年1月9日付け 教文資第2-47号

第5次調査

埼玉県深谷市上原字沢口411

平成31年4月1日付け 教文資第2-3号

3 発掘調査は、主要地方道深谷嵐山線ボトルネット解消推進事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成26年度 第2次）

「道路改築工事（深谷嵐山線埋蔵文化財発掘調査業務委託）001における埋蔵文化財発掘調査」

発掘調査事業（平成30・31年度 第4・5次）

「社会资本整備総合交付金（改築）工事（沢口遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託）163に伴う埋蔵文化財発掘調査」

整理・報告書作成事業（令和2年度）

「ボトルネット（公共）工事（埋文整理報告書刊行業務委託）074主要地方道深谷嵐山線／深谷市田中地内」

5 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、第2次調査を平成26年5月1日から平成26年6月30日まで実施し、岩瀬謙、砂生智江が担当した。第4次調査を平成31年2月1日から平成31年3月31日まで実施し、加藤隆則、赤熊浩一が、第5次調査を平成31年4月1日から平成31年4月30日まで実施し、渡邊理伊知、赤熊が担当した。

整理・報告書作成事業は、令和2年12月1日から令和3年3月31日まで実施し、大谷徹、栗岡潤が担当した。報告書は令和3年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第469集として印刷、刊行した。

6 発掘調査における基準点測量は、第2次調査は株式会社ソレイユに、第4・5次調査は有限会社ジオプランニングに委託した。

7 発掘調査における空中写真は、第2次調査は中央航業株式会社に、第4・5次調査は株式会社三和航測に委託した。

8 発掘調査・整理作業における写真撮影は各担当者が行った。

9 出土品の整理と図版作成は大谷、栗岡が行い、縄文時代については上野真由美、中・近世については赤熊、村山卓の協力を得た。

12 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、I-2・3、IIを栗岡、IV-1の遺物を上野、IV-2の一部を赤熊、その他を大谷が行った。

13 本書の編集は大谷が行った。

14 本書にかかる諸資料は令和3年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

15 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の関係機関及び方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。

深谷市教育委員会

幾島 審 知久裕昭 平野哲也 村松 篤

凡 例

1 遺跡全体におけるX・Y座標の値は、世界測地系による国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値であり、Z座標の値は標高を示す。また、各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。ただし、第2次調査におけるX・Y座標の値は、日本測地系に基づく値を示している。

第2次調査

第2次調査区のH-4グリッド北西杭の座標は、日本測地系におけるX=15828.268m、Y=-49837.413m、Z=65.848m、北緯 $36^{\circ} 08' 29''$ 、東経 $139^{\circ} 16' 46''$ である。

世界測地系に変換した同杭の座標数値は、X=16182.7744m、Y=-50129.8860m、北緯 $36^{\circ} 08' 40''$ 、東経 $139^{\circ} 16' 34''$ である。

第4・5次調査

第4・5次調査区のE-3グリッド北西杭の座標は、世界測地系におけるX=16130.000m、Y=-50120.000m、Z=65.500m、北緯 $36^{\circ} 08' 38''$ 、東経 $139^{\circ} 12' 34''$ である。

2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標IX系に基づく 10×10 mの範囲を1グリッドとし、調査区全体の方眼網を組んだ。

3 グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。

なお、第2次調査では1グリッドの中を、さらに1mの小グリッドに区分して、1~100まで分割した。

4 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡

S E…井戸跡 S D…溝跡 S C…集石土壙
S K…土壤 P…ピット・柱穴

5 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全測図 1:400 1:700

遺構図 1:30 1:60 1:80

遺物実測図・拓影図 1:2 2:3 1:3 1:4

6 遺構断面図に表記した水準数値は標高（m）で示した。

7 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・遺物の計測値は原則cm、g単位で示した。

・（ ）は推定値、〔 〕は残存値を示す。

・胎土は土器中に含まれる飼料等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石

E:石英 F:蛭石 G:砂粒子 H:赤色粒子

I:白色粒子 J:針状物質 K:黒色粒子

L:その他

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・焼成は良好・普通・不良の3段階で示した。

・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。

・備考には、出土位置、注記番号、諸特徴等を記した。

8 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:50,000地形図（「深谷」・「熊谷」）、深谷市発行の1:2,500都市計画基本図を編集して使用した。

9 遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。変更結果は本文中に示した。

10 文中の引用文献は、（著者（組織名）発行年）の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(4) グリッドピット	18
1	発掘調査に至る経過	1	(5) 遺物包含層	21
2	発掘調査・報告書作成の経過	2	(6) グリッド出土遺物	37
(1)	発掘調査	2	2 中・近世の遺構と遺物	39
(2)	整理・報告書の作成	2	(1) 掘立柱建物跡	39
3	発掘調査・報告書作成の組織	3	(2) 井戸跡	46
II	遺跡の立地と環境	4	(3) 土壌	49
1	地理的環境	4	(4) 溝跡	51
2	歴史的環境	5	(5) ピット	53
III	遺跡の概要	8	(6) グリッド出土遺物	63
IV	遺構と遺物	13	V 調査のまとめ	64
1	縄文時代の遺構と遺物	13	1 縄文時代の様相について	64
(1)	住居跡	13	2 中世の様相について	65
(2)	集石土壌	13	3 近世の様相について	66
(3)	土壌	15	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第26図 遺物包含層出土石器（2）	32
第2図 周辺の遺跡	6	第27図 遺物包含層出土石器（3）	33
第3図 基本土層	8	第28図 遺物包含層出土石器（4）	34
第4図 調査区位置図	9	第29図 遺物包含層出土石器（5）	35
第5図 昔往調査区全体図	10	第30図 グリッド出土土器	37
第6図 全体図	11	第31図 グリッド出土石器	38
第7図 区割り図	12	第32図 中・近世の遺構分布図	39
第8図 第1号住居跡出土遺物	13	第33図 第1号掘立柱建物跡（1）	40
第9図 第1号住居跡	14	第34図 第1号掘立柱建物跡（2）	41
第10図 第1号集石土壙	15	第35図 第1号掘立柱建物跡模式図	42
第11図 第1号集石土壙出土遺物	16	第36図 第2号掘立柱建物跡	43
第12図 土壙	17	第37図 第2号掘立柱建物跡模式図	44
第13図 土壙出土遺物	18	第38図 第3号掘立柱建物跡	45
第14図 グリッドピット	19	第39図 第4号掘立柱建物跡	46
第15図 グリッドピット出土遺物	20	第40図 井戸跡	47
第16図 遺物包含層遺物分布図（1）	22	第41図 井戸跡出土遺物	48
第17図 遺物包含層遺物分布図（2）	23	第42図 土壙	50
第18図 遺物包含層出土土器（1）	24	第43図 溝跡・出土遺物	52
第19図 遺物包含層出土土器（2）	25	第44図 ピット分布図	54
第20図 遺物包含層出土土器（3）	26	第45図 ピット（1）	55
第21図 遺物包含層出土土器（4）	27	第46図 ピット（2）	56
第22図 遺物包含層出土土器（5）	28	第47図 ピット（3）・出土遺物	63
第23図 遺物包含層出土土器（6）	29	第48図 グリッド出土遺物	63
第24図 遺物包含層出土土器（7）	30	第49図 屋敷跡想定図	65
第25図 遺物包含層出土石器（1）	31		

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第10表	第3号掘立柱建物跡ピット一覧表	45
第2表	沢口遺跡の調査履歴	10	第11表	第4号掘立柱建物跡ピット一覧表	46
第3表	第1号集石土壙出土石器観察表	15	第12表	第1号井戸跡出土石製品観察表	48
第4表	グリッドピット出土石器観察表	20	第13表	第2号井戸跡出土遺物観察表	48
第5表	グリッドピット一覧表	20	第14表	土壙一覧表	51
第6表	遺物包含層出土石器観察表	36	第15表	第3号溝跡出土遺物観察表	53
第7表	グリッド出土石器観察表	38	第16表	ピット一覧表	57
第8表	第1号掘立柱建物跡ピット一覧表	44	第17表	ピット出土遺物観察表	63
第9表	第2号掘立柱建物跡ピット一覧表	44	第18表	グリッド出土遺物観察表	63

写真図版

図版 1	1 調査区全景（合成）	8 南側遺物包含層遺物出土状況（2）
図版 2	1 遺跡遠景（第2次調査）	図版 7 1 南側遺物包含層遺物出土状況（3）
	2 遺跡遠景（第4・5次調査）	2 グリッドピット（縄文時代）
図版 3	1 第2次調査区全景	3 基本土層（トレンチ1）
	2 第4・5次調査区全景	4 基本土層（トレンチ3）
図版 4	1・2 第2次調査区全景	5 第1号掘立柱建物跡
	3・4 第2次南側調査区全景	6 第2号掘立柱建物跡
	5・6 第4・5次調査区全景	7 第3号掘立柱建物跡
図版 5	1 第1号住居跡跡跡	図版 8 1 第4号掘立柱建物跡
	2 第1号住居跡跡跡土壙断面	2 第1号井戸跡検出状況
	3 第1号集石土壙遺物出土状況	3 第1号井戸跡
	4 第1号集石土壙	4 第1号井戸跡土壙断面
	5 第1号土壙	5 第2号井戸跡検出状況
	6 第7号土壙	6 第2号井戸跡
	7 第9号土壙	7 第2号井戸跡土壙断面
	8 第12号土壙	8 第2号井戸跡遺物出土状況
図版 6	1 第17号土壙	図版 9 1 第1・2号井戸跡
	2 第18・19号土壙	2 第2号土壙
	3 第20号土壙	3 第3号土壙
	4 第21号土壙	4 第11号土壙
	5 北側遺物包含層遺物出土状況（1）	5 第14・15号土壙
	6 北側遺物包含層遺物出土状況（2）	6 第23号土壙
	7 南側遺物包含層遺物出土状況（1）	7 第24号土壙

	8 第25号土壤	(1) ~ (3)
図版10	1 第1号溝跡	図版13 1~3 遺物包含層出土土器
	2 第1号溝跡	(4) ~ (6)
	3 第2号溝跡	図版14 1~3 遺物包含層出土土器
	4 第2号溝跡土層断面	(7) ~ (9)
	5 第3号溝跡	図版15 1~3 遺物包含層出土土器
	6 第3号溝跡土層断面	(10) ~ (12)
	7 B-2グリッド ピット11 疊検出状況	図版16 1~3 遺物包含層出土石器 (1) ~ (3)
	8 第1号掘立柱建物跡 ピット9 疊検出状況	図版17 1 遺物包含層出土土器 (13) 2・3 遺物包含層出土石器 (4)・(5)
図版11	1 第1号住居跡出土遺物	4 グリッド出土石器 (1)
	2 第1号集石土壤	5 グリッド出土土器
	3・4 第1号集石土壤出土遺物 (1)・(2)	図版18 1・2 グリッド出土石器 (2)・(3)
	5 土壙出土遺物	3 第1号井戸跡出土石製品
	6 グリッドピット出土遺物	4 第2号井戸跡出土擂鉢
	7 第1号集石土壤・グリッドピット 出土石器	5 中世陶器
図版12	1~3 遺物包含層出土土器	

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画 一希望・活躍・うるおいの埼玉ー』を策定し、各分野での施策を取り組んでいる。このうち成長の活力をつくる分野では、「埼玉の活力を高める社会基盤をつくる」という基本目標を掲げ、埼玉の活力を高める道路ネットワーク整備として幹線道路の未接続区間の解消を進めている。

こうした中で埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部署と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道深谷嵐山線事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成26年1月30日付け熊整第1203号で生涯学習文化財課長（当時）宛て照会があった。事業予定地については、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「沢口遺跡A地点」（№67-170）に該当し、平成2年に隣接地を川本町教育委員会（当時）が発掘調査を実施していたことから（第1次調査）、平成26年12月25日に確認調査を実施したところ、西側で遺構が確認された。そのため、平成26年2月14日付けで範囲拡大の変更増補を行った。埋蔵文化財の所在が明確になったことから、当該箇所の埋蔵文化財を工事の計画上やむを得ず現状を変更する場合は記録保存のための発掘調査が必要である旨を平成26年2月17日付け教文第2231-1号で熊谷県土整備事務所長宛てに回答した。その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、発掘調査の措置を講ずることとした（第2次調査：調査時はA地点第2次調査と呼称）。

用地取得の進捗に伴い、平成26年11月6日付け熊整第653-1号で熊谷県土整備事務所長から生

涯学習文化財課長（当時）宛て埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。平成26年12月25日、確認調査を実施し、遺跡が南側に広がることが明らかになったため、平成26年12月25日付けで変更増補を行った。また、平成27年3月17日付け教文第2620-1号で記録保存のための発掘調査が必要である旨回答した。協議の結果、当該箇所についても発掘調査の措置となつた。発掘調査は事業予定地内全域の埋蔵文化財の取扱いが定まった上で着手することとしたため、平成30年度、平成31年度に実施することとなつた（第4・5次調査）。

なお、事業予定地東側の宅地造成事業に伴う深谷市教育委員会の試掘調査の結果、範囲の拡大が認められたため、平成29年4月21日付けで「沢口南遺跡」（№67-171）と統合し、名称を「沢口遺跡A地点」から「沢口遺跡」（№67-170）に変更増補した。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成26年2月27日付け教文資第4-1633号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

第2次 平成26年5月1日付け教文資第2-2号

第4次 平成31年1月9日付け教文資第2-47号

第5次 平成31年4月1日付け教文資第2-3号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

第2次調査（平成26年度）

第2次調査（調査当時はA地点第2次調査と呼称）は、主要地方道深谷嵐山線の道路改築工事に伴い、平成26年5月1日から平成26年6月30日にかけて実施した。調査面積は1,320m²である。

平成26年4月4日に埋蔵文化財発掘届等を深谷市教育委員会に提出し、事務手続きを行った。5月に事務所を設置し、重機による表土掘削を行った。表土掘削後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の住居跡、集石土壙、土壙、遺物包含層、中・近世の土壙、溝跡などの遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。遺構の調査を終了した後、6月19日に空中写真撮影を実施した。

6月23日から重機による調査区の埋め戻し作業を行い、6月25日に事務所を撤去し、すべての調査を終了した。

なお、6月27日に発見届と保管証を提出した。

第4・5次調査（平成30・31年度）

第4次調査は、平成31年2月1日から平成31年3月31日まで実施し、引き続き、第5次調査を平成31年4月1日から平成31年4月30日まで実施した。調査面積は963.8m²である。

平成31年2月1日から4日にかけて調査区に開柵を設置し、2月5日に発掘調査事務所の設置を行った。重機による表土除去作業を2月7日から2月13日にかけて実施した。2月12日からは補助員による作業を開始し、遺構確認作業を行った。2月中旬に遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。

遺構確認作業の結果、縄文時代のピット、遺物包含層、中・近世の掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、

溝跡などの遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。遺構の調査を終了した後、3月26日に空中写真撮影を実施した。なお、3月28日に発見届と保管証を提出した。

4月4日から補助員作業を再開し、掘立柱建物跡の精査を行い、4月9日に高所作業車を使用して、調査区全体の写真撮影を行った。

その後、4月22日から重機による調査区内の危険箇所の埋め戻し、器材の撤収、4月25日に事務所の撤去を行い、すべての調査を終了した。

なお、4月24日に発見届と保管証を提出した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は、令和2年12月1日から令和3年3月31日まで実施した。

12月から出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。復元を終えた掲載遺物は、実測とトレース、必要に応じて採拓を行った。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。トレース図と拓本は、スキャナでデータ化し、印刷用の版下を作成した。1月には図版用の遺物写真を撮影し、遺構写真と合わせて、写真図版用の版下データを作成した。

発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は、照合・修正を加え、挿図編集システムを用いてトレースした。これに土層説明等を組み込み、印刷用の版下データを作成した。

1月から原稿の執筆と報告書の割付・編集を行った。その後、印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、令和3年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第469集『沢口遺跡』を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、3月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理事長	樋田 明男	調査部	
常務理事兼総務部長	大嶋 錦一郎	調査部 長	昼間 孝志
総務部		調査部 副部長	富田 和夫
総務部副部長	瀧瀬 芳之	調査監兼調査第一課長	赤熊 浩一
総務課長	藤倉 英明	主 査	岩瀬 譲
		主 事	砂生 智江

平成30年度（発掘調査）

理事長	藤田 栄二	調査部	
常務理事兼総務部長	川目 晴久	調査部 長	瀧瀬 芳之
総務部		調査部 副部長	吉田 稔
総務部副部長	田中 広明	主幹兼調査第二課長	上野 真由美
総務課長	新井 了悟	主 任	加藤 隆則
		主 任 専門員	赤熊 浩一

平成31年度（発掘調査）

理事長	藤田 栄二	調査部	
常務理事兼総務部長	高津 導	調査部 長	黒坂 穎二
総務部		調査部 副部長	吉田 稔
総務部副部長	山本 靖	主幹兼調査第二課長	大谷 徹
総務課長	新井 了悟	主 任	渡邊理伊知
		主 任 専門員	赤熊 浩一

令和2年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田 栄二	調査部	
常務理事兼総務部長	福沢 景	調査部 長	吉田 稔
総務部		調査部 副部長兼整理第一課長	上野 真由美
総務部副部長	山本 靖	主幹兼調査第一課長	栗岡 潤
総務課長	鈴木 裕一	主幹兼整理第二課長	大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

沢口遺跡は、深谷市南部の川本地域（旧川本町）に所在する縄文時代中期後半の集落跡である。市域の南を東流する荒川の北岸に広がる櫛挽台地南縁、荒川との崖線から約500m内側に入った標高66m付近に位置する。遺跡周辺には沢口や沢口前的小字が残っていることから、湧水地として古くから認識されていたのであろう。

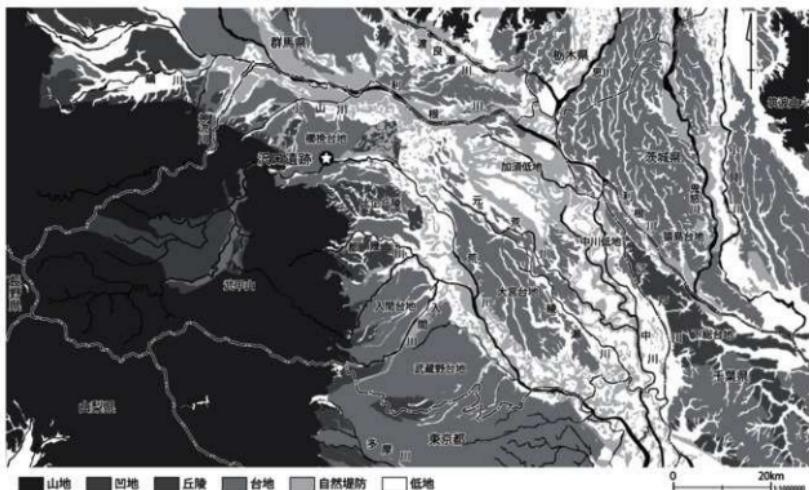
埼玉、長野、山梨の県境にある甲武信ヶ岳（標高2,475m）に源を発した荒川は、狭隘な山地を抜けて関東平野に流れ出し、扇状地と河岸段丘を形成する。荒川の南岸（右岸）側には比金丘陵に続く江南台地が東西に細長くのび、北岸（左岸）側には「荒川扇状地」とも称される櫛挽台地が広がっている。さらに、荒川に沿って広がる低地には、熊谷市との境に近い深谷市明戸付近を扇頂とする新荒川扇状地が形成され、旧流路や自然堤防、

後背湿地が複雑に発達している。

沢口遺跡の立地する櫛挽台地は、荒川の浸食作用によって2～3面の段丘面が形成されている。大きく武藏野期の櫛挽面（中位面）と立川期の寄居面（低位面）の二つに分けられる。このうち櫛挽面は関東ローム層に覆われているが、寄居面は薄く関東ローム層に覆われている地域（寄居面Ⅰ・Ⅱ）と関東ローム層に覆われない地域（寄居面Ⅲ）に細分されている。

地形的には河岸段丘上の寄居面Ⅰに本遺跡は立地している。基盤層は疊混じりの関東ローム層であるが、不規則に疊層が露出する部分も多く、安定した関東ローム層の発達は認められない。

現在、本遺跡周辺は圃場整備や宅地化が進み、平坦な地形に見えるが、かつては東西方向の小規模な浸食谷（流路跡）の発達した起伏に富んだ微



第1図 埼玉県の地形

地形を呈していたことが、発掘調査などで見つかった埋没谷によって裏づけられている。こうした微地形が、縄文時代以降における遺跡分布に大

きな影響を与えていたことが、埋没谷の堆積土壤の自然科学分析による古環境の復元によって明らかにされつつある（村松1999）。

2 歴史的環境

櫛挽台地における遺跡の分布は、中央部ほど少なく、縁辺部に集中する傾向が窺われる。また、荒川の左岸と右岸では遺跡の分布に大きな差がみられ、江南台地を控えた右岸は遺跡の密集度が高く、水利に乏しい左岸とは様相が大きく異なる。

旧石器時代

後期旧石器時代前半期の遺跡は、荒川左岸では局部磨製石斧を出土した寄居町末野遺跡をはじめ、美里町安光寺遺跡、如来堂遺跡、普門寺西山遺跡、深谷市北坂遺跡など、寄居町域以外では荒川から離れた松久丘陵周辺にまとまっている。

後半期の遺跡は、荒川右岸では吉野川流域の寄居町赤浜牛無具利遺跡（43）で黒曜石製のナイフ形石器や搔器など、砂川期の良好な資料が出土している。深谷市白草遺跡（63）では、頁岩製の細石刃や荒屋型彫器を中心とする良好な石器群が出土しているほか、寄居町鶴巣遺跡（44）でもチャート製の細石刃核が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、湧水の豊富な寄居間に多く営まれ、櫛挽台地上には草創期から中期の遺跡が点在している。草創期の遺跡として知られる深谷市宮林遺跡（14）では、草創期の住居跡から爪形文土器や多縄文土器などの土器群と、矢柄研磨器などを含む石器群が出土している。沢口遺跡（1）でも厚手の爪形文土器が第1次調査で検出されている。前期の遺跡は、熊谷市三ヶ尻林遺跡（39）で黒浜式期の集落が、深谷市上南原遺跡（15）や寄居町塚屋遺跡で諸磯式期の集落跡が調査されている。中期には遺跡数が増え、深谷市台耕地遺跡（16）や寄居町北塚屋遺跡で大規模な集落が調査されている。また、沢口遺跡の東約500mに所在

する亥ノ堀遺跡（2）では住居跡1軒のほか、屋外埋甕炉や配石遺構、集石土壙が調査されている。後・晚期になると遺跡数は減少し、深谷市塚屋遺跡、宮台遺跡、橋屋遺跡、大林I遺跡（3）などがあるにすぎない。

一方、対岸の江南台地上では、草創期では熊谷市原谷遺跡（73）から多縄文系土器、深谷市四反歩遺跡（65）からは表裏縄文土器や石槍、尖頭器などの石器が出土している。早期では四反歩遺跡で撫糸文期の住居跡が7軒調査されている。前期では深谷市竹之花遺跡（62）、円阿弥遺跡（66）、権現堂遺跡（69）で、黒浜式期から諸磯a式期にかけての小規模集落が調査されている。中期では、深谷市舟山遺跡（59）で勝坂式から加曾利E II式期の集落が、深谷市上本田遺跡（53）では加曾利E III式期の住居跡50軒、熊谷市上前原遺跡（76）では勝坂式から加曾利E式期の集落が調査されている。後期になると遺跡数は減少し、深谷市山ノ腰遺跡（60）、荷鞍ヶ谷戸遺跡（79）、四反歩遺跡で堀之内式期の小規模集落が知られる。

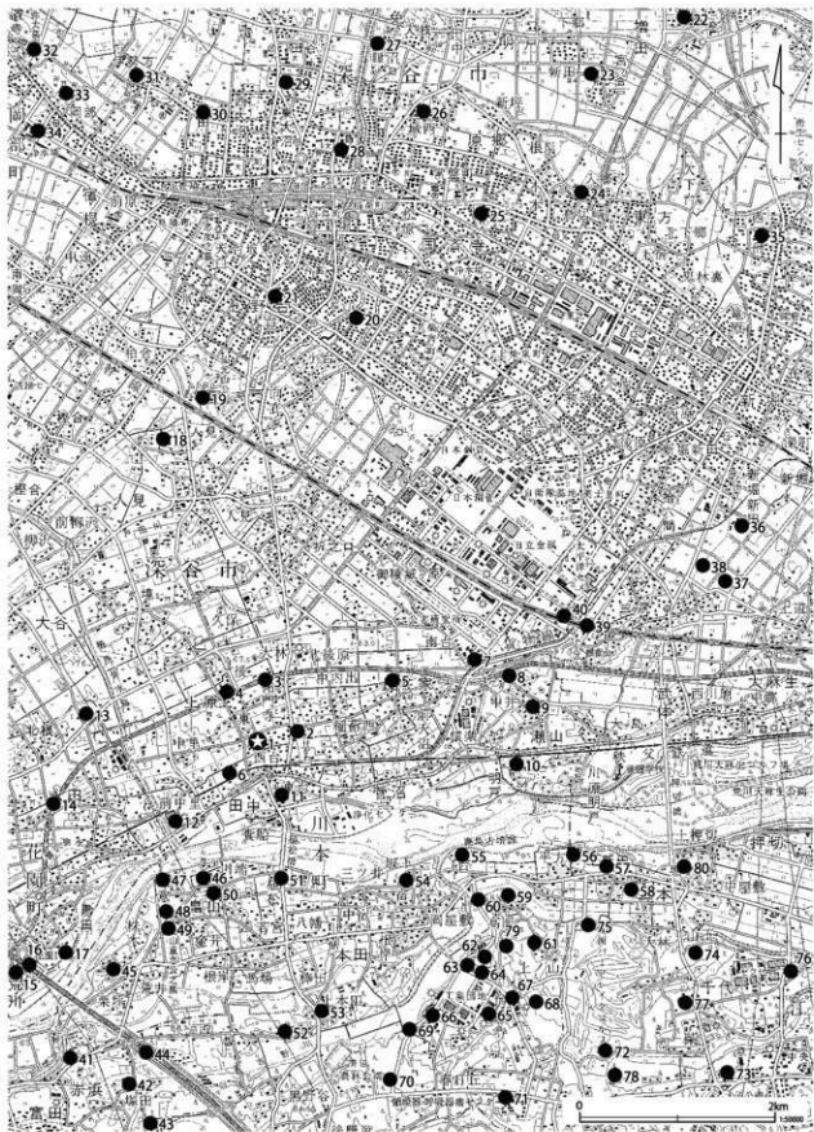
弥生時代

弥生時代の遺跡は、櫛挽台地南縁ではほとんど発見されていないが、対岸の畠山館跡（49）で前期に遡る再葬墓が単独で発見されている。

後期でも櫛挽台地南縁には遺跡の分布はほとんどなく、対岸の江南台地の支谷に面して立地する吉ヶ谷式期の遺跡が、深谷市焼谷遺跡（70）、白草遺跡、四反歩遺跡などで調査されている。

古墳時代

古墳時代に入っても遺跡数は少ない。台耕地遺跡で前期の住居跡が、宮林遺跡では中期の遺物が検出されたほか、7世紀代の住居跡が調査されて



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第2図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	沢口遺跡	17	黒田古墳群	33	源原館跡	49	島山館跡
2	亥ノ堀遺跡	18	人見氏館跡	34	安部折津守跡	50	島山古墳出土地
3	大林I遺跡	19	押切遺跡	35	西別府館跡	51	塙原古墳群
4	大林II遺跡	20	秋元氏館跡	36	樋之上遺跡	52	本田館跡
5	長在家上遺跡	21	割山遺跡	37	黒瀬館跡	53	上本田遺跡
6	上原跡塚	22	増田四郎重富館跡	38	若松遺跡	54	坂下古の内
7	長在家古墳群	23	官ヶ谷戸塚の内	39	三ヶ尻林遺跡	55	鹿島古墳群
8	大門遺跡	24	東方城跡	40	三ヶ尻古墳群	56	鹿島平方裏遺跡
9	五輪塔（瀬山塔）	25	疔城跡	41	赤浜天沢遺跡	57	鹿島中世墳墓
10	明戸塚の内	26	伝幡羅太郎館跡	42	塙田遺跡	58	上新田遺跡
11	田中堀の内	27	皿沼城跡	43	赤浜牛無具利遺跡	59	舟山遺跡
12	見目古墳群	28	深谷城跡	44	鶴巣遺跡	60	山ノ原遺跡
13	東原遺跡	29	大沼弾正忠館跡	45	箱崎古墳群	61	清水山古墳群
14	宮林遺跡	30	桜田馬場	46	川端遺跡	62	竹之花遺跡
15	上南原遺跡	31	曲田城跡	47	如意遺跡	63	白草遺跡
16	台跡地遺跡	32	岡部六弥太忠澄館跡	48	如意南遺跡	64	諦光寺廃寺
						80	三本塚の内

いるにすぎない。

荒川に面した台地縁辺には、寄居町から深谷市にかけて分布する小前田古墳群をはじめ、深谷市黒田古墳群（17）、見目古墳群（12）、長在家古墳群（7）、熊谷市三ヶ尻古墳群（40）などの後期群集墳が所在する。

荒川右岸の和田吉野川流域の寄居町東伴場地遺跡や赤浜宮前遺跡、伊勢原遺跡周辺では、小規模な前・中期古墳や方形周溝墓、住居跡などが調査されている。中期の集落は、円阿弥遺跡、白草遺跡など小規模なものが多いに対し、後期には深谷市如意遺跡（47）や如意南遺跡（48）で大規模な集落跡が営まれるとともに、遺跡数が増加する。

古墳群は、黒田古墳群の対岸にある深谷市箱崎古墳群（45）をはじめ、塙原古墳群（51）や鹿島古墳群（55）などが荒川に沿って分布する。

奈良・平安時代

荒川左岸の台耕地遺跡では、平安時代の住居跡が59軒調査されているほか、鉄生産に関わる精錬炉や工房跡が検出されている。

一方、荒川右岸の河岸段丘上には深谷市川端遺跡（46）、如意遺跡のほか、江南台地に熊谷市寺内庵寺（72）や、豪族居宅と想定される深谷市百濟木遺跡（68）などが所在する。

中世

中世になると、武藏七党や在地武士団の館跡が散在するようになるが、実態については不明なものが多い。周辺には、深谷市東原遺跡（13）や明戸塚の内（10）、田中堀の内（11）などがある。沢口遺跡でも中世前半期の溝跡で区画された掘立柱建物跡や井戸跡が検出されている。

対岸の河岸段丘には畠山館跡があり、畠山重忠と所縁のある満福寺、井椋神社などがある。畠山館跡の南東1.5kmには重忠家臣の本田親常のものと伝えられる本田館跡（52）があり、方形区画の空堀が良く残る。百济木遺跡では、14~15世紀の寺院跡が検出され、古名に残る万願寺と想定されている。寄居町赤浜地区には、伝鎌倉街道上道に比定される掘削状遺構が現存し、寄居町赤浜天沢遺跡（41）では道路状遺構が検出されている。この地は文献にみえる「塙田宿」に比定されており、塙田遺跡（42）からは「塙田鈎物師」に関わる遺構、遺物が検出されている。

このほかに沢口遺跡の南西約400mには室町末期の享禄三年（1530）銘をもつ八角宝幢形筒を出土した上原經塚（6）、対岸には2,626枚を数える埋蔵錢が出土した畠山古錢出土地（50）が知られている。

III 遺跡の概要

沢口遺跡は、秩父鉄道「武川駅」の北西約600mの深谷市上原に所在し、遺跡の南約1.2kmを現在の荒川がほぼ東西に流れている。遺跡周辺にはわずかな地形の起伏がみられ、東西方向に発達する微高地の南斜面に位置している。遺跡の南側には比高差3~4mの崖線に沿って、江戸時代の秩父往還が東西にのびている。

沢口遺跡は、平成2年の川本町遺跡調査会による第1次調査を端緒に、これまでに5次にわたる発掘調査が実施されている（第5図、第2表）。

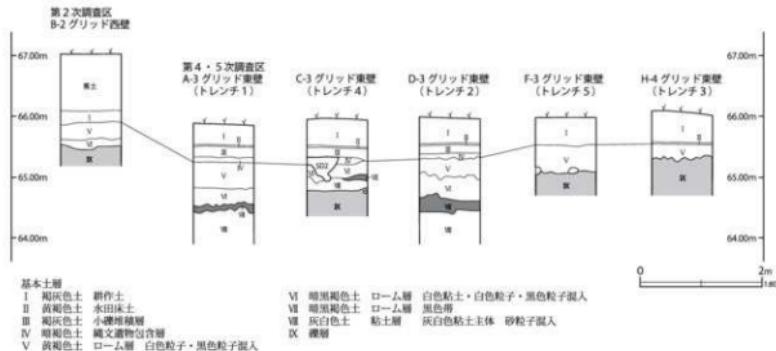
第1次調査では、縄文時代中期後半を中心とする集落跡が発見された。調査区は約60mの距離（中間地区）において多くの遺構が検出された a 地点北地区と、埋没谷に堆積した包含層が中心の b 地点南地区に分けられる。a 地点北地区からは22軒の住居跡と土壌が微高地に沿って帯状に検出された。中期以外では、前期黒浜式期の隅丸方形の住居跡が、調査区北東寄りから1軒みつかっている。中期後半の住居跡は円形を呈するものが主体を占め、径10mほどの大型住居も西端から検出されている。出土土器は、加曾利E II~III式土器が主体で、底面に網代痕を残す深鉢形土器や土壌からは

大型の深鉢形土器が出土している。

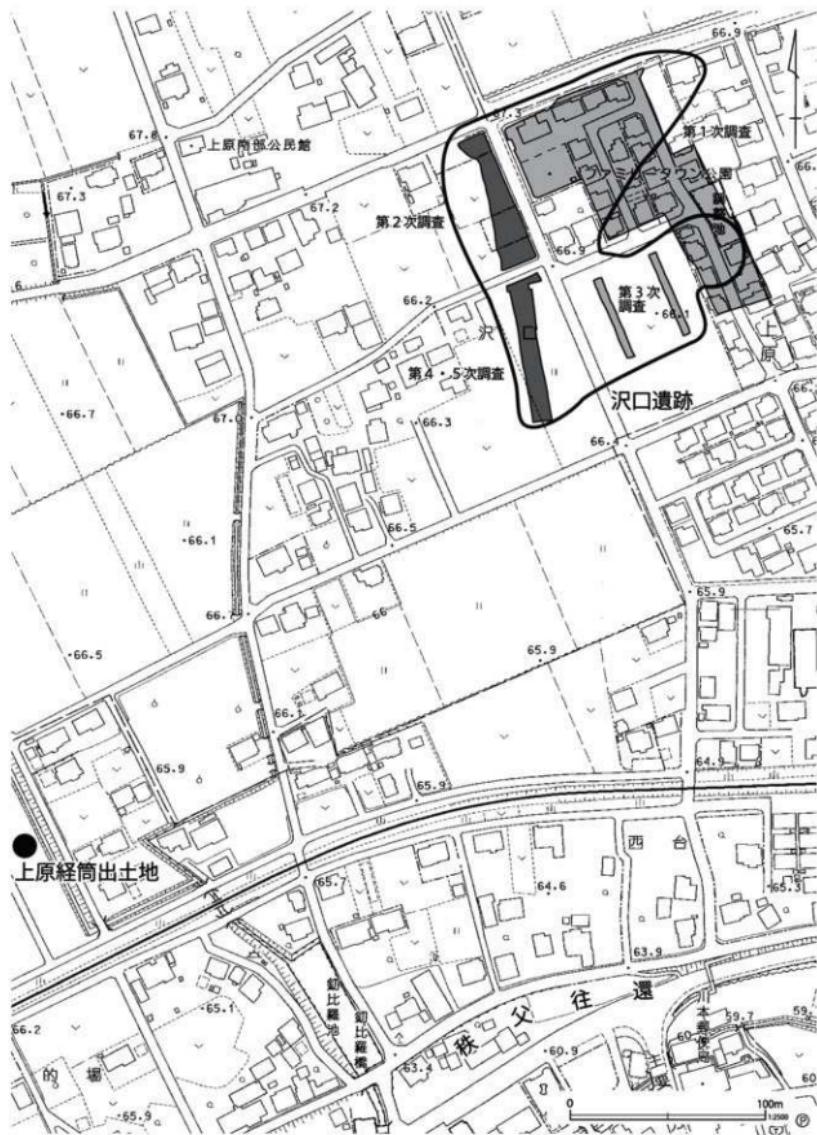
b 地点南地区では、微高地上から中期の住居跡3軒のほか、土壌と微高地際の埋没谷が検出された。住居跡からは加曾利E II式土器が出土している。なお、包含層からは草創期の爪形文土器の大型破片が出土し注目される。埋没谷は幅約15m、深さ約1.0mを測り、北側は微高地と約1.0mの段差を有し、南側は0.2mの段差で一段低くなっている。底面は西から東に向かって傾斜している。谷の底面のやや高まった部分から集石遺構1基が検出され、加曾利E II式の深鉢形土器が出土している。谷の下層は無遺物層で、上層からは土器片や石鏃、剥片類が多量に出土し、土器は加曾利E I式からE IV式までの土器が出土している。

平成26年には、第1次調査の西側隣接地を当事業団が、A地点第2次調査（以下、第2次調査）として調査を実施した。なお、便宜的に市道を境に、北側調査区と南側調査区に分けた。

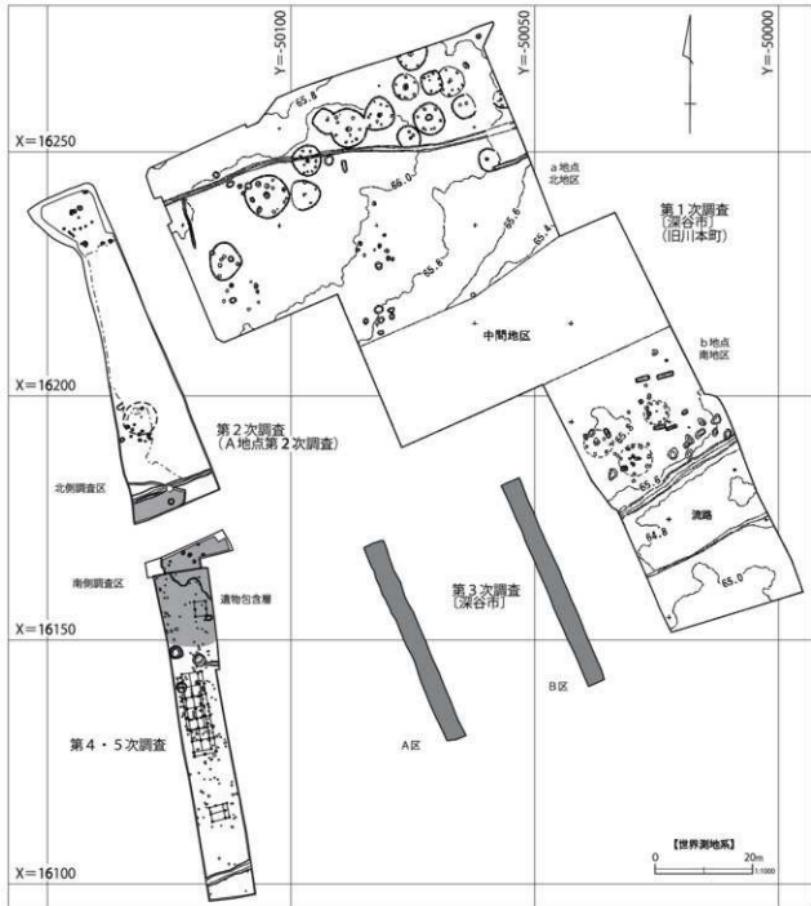
北側調査区は土取りと思われる大きな搅乱によって遺構が大きく削平されていたが、縄文時代中期の住居跡1軒、集石土壌1基、土壌9基、ピット6基、遺物包含層1箇所、中・近世の溝跡1条、



第3図 基本土層



第4図 調査区位置図



第5図 既往調査区全体図

第2表 沢口遺跡の調査履歴（第5図）

調査次数	所在地	調査年月日	調査原因	発掘面積	発掘主体者
第1次	a地点 北地区 b地点 南地区	川本町大字上原433-2 平成2(1990)年5月23日～10月24日	住宅造成	6,600m ²	川本町遺跡調査会
第2次	A地点 第2次	深谷市上原431-2他 平成26(2014)年5月1日～6月30日	道路	1,320m ²	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
第3次		深谷市上原440他 平成29(2017)年6月7日～8月31日	道路 住宅造成	450m ²	深谷市教育委員会
第4次 第5次		深谷市上原440他 平成31(2019)年2月1日～3月31日 平成31(2019)年4月1日～4月30日	道路	963.8m ²	埼玉県埋蔵文化財調査事業団

土壌9基、ピット10基が検出された。

平成29年には深谷市教育委員会による第3次調査が、第1次調査におけるb地点南地区の西側隣接地でトレーニング状に2箇所実施されている。西側のA区では土壌2基、ピット1基、自然流路跡2条、東側のB区では溝跡1条、ピット2基、自然流路跡1条が検出された。

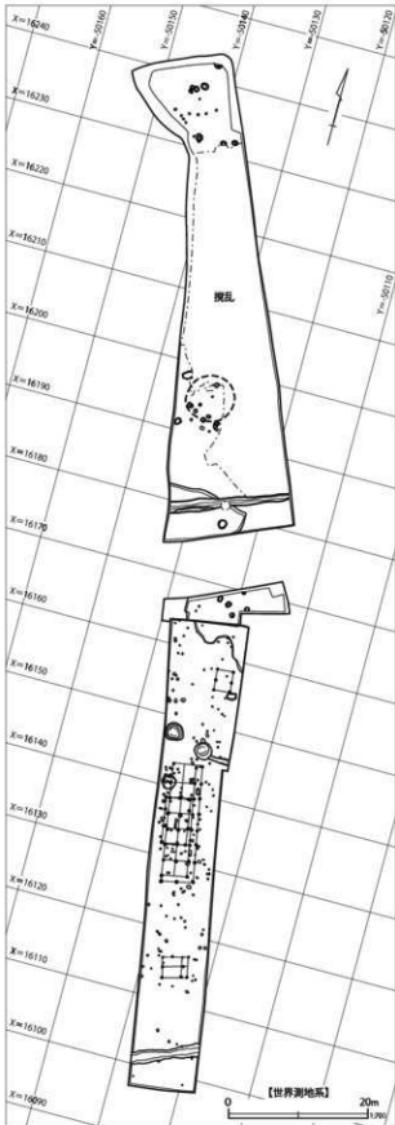
平成31年には当事業団による第4・5次調査が実施された。第2次調査区の南側に続く部分で、遺物包含層が検出されたほか、縄文時代のピット27基、中・近世の掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、土壌3基、溝跡1条、ピット160基が検出された。

調査区は南北方向に長く、北側から南側に向かってわずかに傾斜する。調査区北側には、縄文時代中期末葉を主体とする遺物包含層が検出された。その範囲は南北約32mである。また、遺物包含層下面からは縄文時代のピットが検出された。

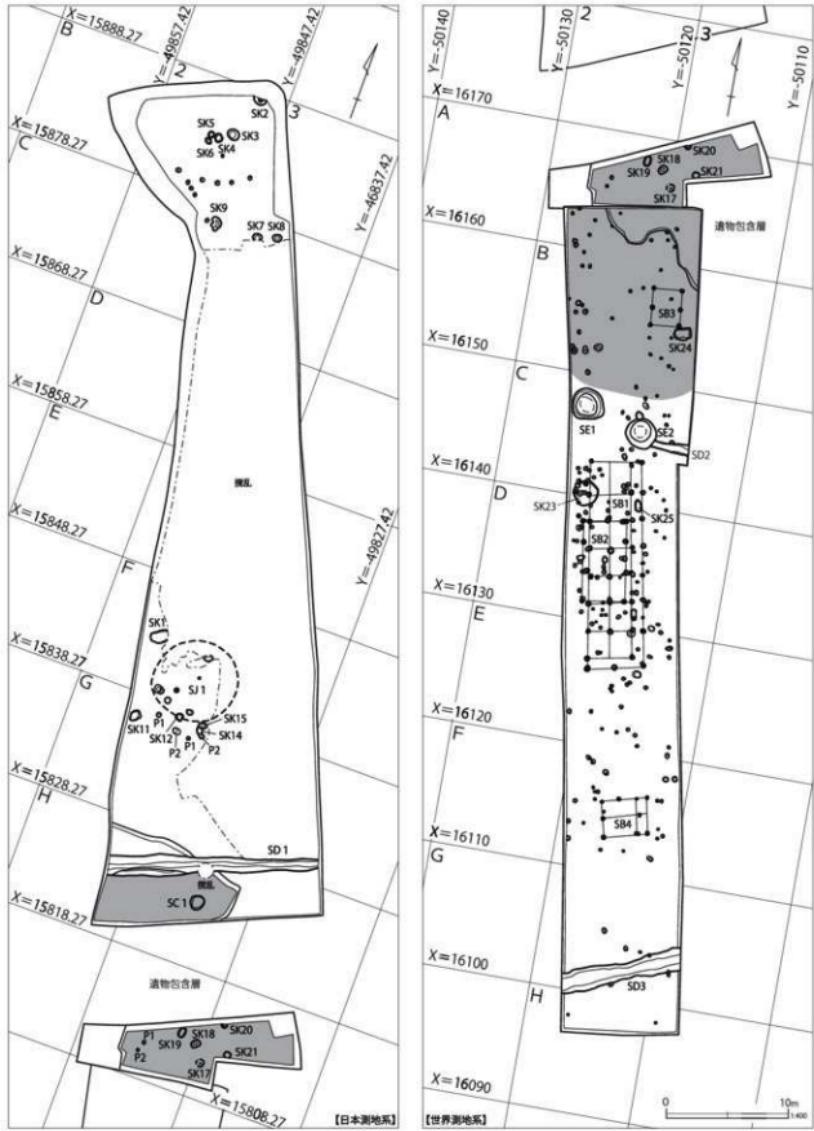
調査区の中央には、掘立柱建物跡や井戸跡などを主体とする中世の遺構が集中していた。このうち第1号掘立柱建物跡は2間×7間の身舎の南側と東側に廂をもつ長大な建物である。排水溝を伴う第2号井戸跡からは13世紀後半の常滑焼の片口鉢片が出土した。調査区の南端からは、東西方向にのびる第3号溝跡が検出されている。

基本土層は、調査区北側ではローム土が約1m、下層に砂質灰白色粘土層を確認した。南側はローム土が0.2mと薄く、下層に礫層が検出された。

沢口遺跡の調査成果としては、調査区北側で縄文時代中期末葉の土器、石器を伴う遺物包含層が検出されている。この時期の集落は北側の台地上に存在しており、集落南縁の浅い谷部に遺物包含層が形成されていたと考えられる。今回の調査で、中世の掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡が発見されたことで、この場所が中世において屋敷跡であることが明らかとなった。南側で検出された第3号溝跡と北側に存在する第1号溝跡に囲まれた南北約80mの規模と推定される。



第6図 全体図



第7図 断面図

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、中期の住居跡1軒、集石土壙1基、土壙9基、ピット33基、遺物包含層1箇所が検出された。

(1) 住居跡

第1号住居跡（第8、9図）

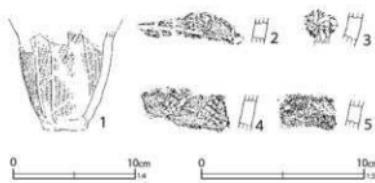
第2次調査の北側調査区中央南寄り、F・G－3・4グリッドに位置する。北側調査区は、調査以前に住宅地であったため、面積約6割が搅乱を受け、かなり深くまで土取りされ、ローム層の下の礫層が顔をのぞかせていた。ほぼ床面まで削平されており、掘り込みのない住居跡である。かろうじて被熱により赤色化した炉跡及び柱穴が確認されただけであった。

住居跡は、炉跡を中心とする直径約7mの円形プランと推定される。

炉跡は、径0.20mほどの円形で、深さ0.08mほどの浅い掘り込みが検出された。炉には炉体土器を埋設していたようであるが、削平され弧状に炉体土器の破片が残されていたにすぎない。炉体土器の周辺は被熱により径0.37m×0.3mの範囲が赤色化していた。覆土はごく薄く残されていた。

住居跡に伴うピットは6基検出された。いずれも上部が削平のため失われている。P1は炉跡の北側に位置し、規模は長径0.78m、短径0.51mで、深さ0.22mである。P2は、P1の炉跡を挟んだ反対側に位置し、規模は長径0.58m、短径0.44mで、深さ0.22mである。P3～6は炉跡の南西側にまとまって位置している。P4～6は推定される壁際に沿って並んでいた可能性が高い。

各ピットの規模は、P3は長径0.40m、短径0.38m、深さ0.15m、P4は長径0.66m、短径0.54m、深さ0.15m、P5は長径0.59m、短径0.27m、深さ0.26m、P6は長径0.52m、短径0.50m、深さ0.23mである。



第8図 第1号住居跡出土遺物

第8図は出土した土器である。1はP5内から出土した、器形を復元できた小型のキャリバー形深鉢形土器である。胴部中央のくびれ部から底部の破片である。2～5は炉体土器の破片で、連弧文系の深鉢形土器の胴部破片である。施文される文様がやや崩れている。

住居跡の時期は、出土土器から中期後葉加曾利EII式期と考えられる。

(2) 集石土壙

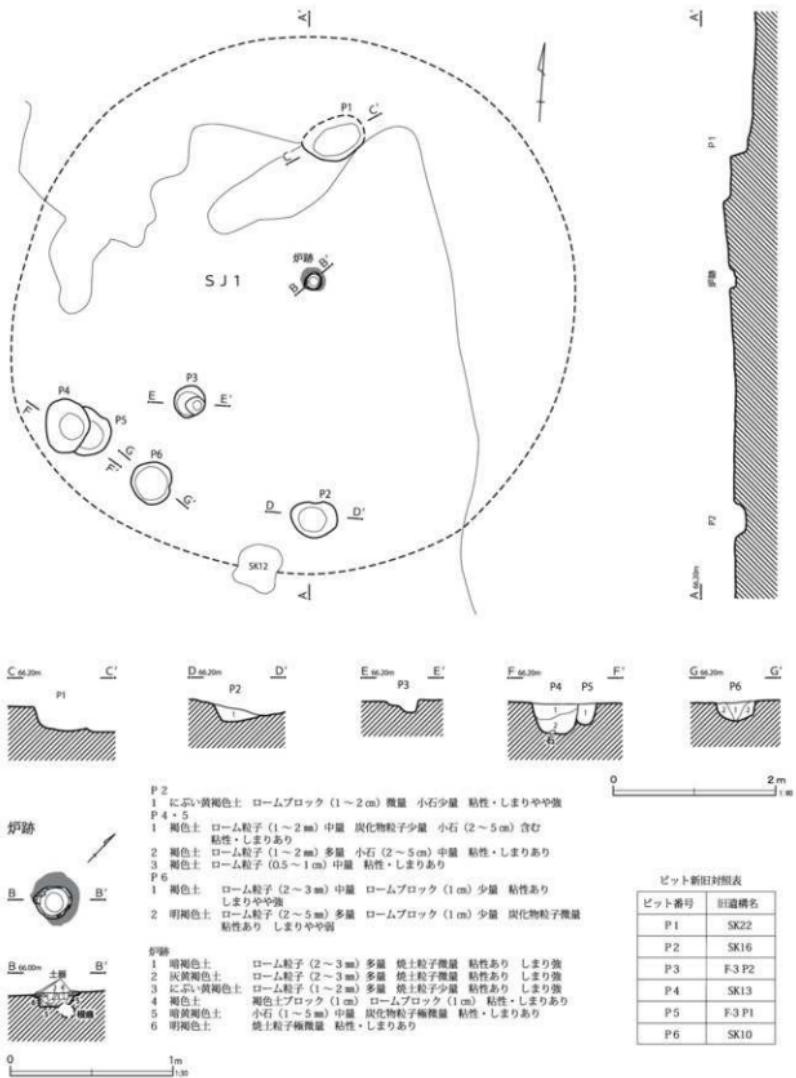
集石土壙は、1基検出された。

第1号集石土壙（第10、11図）

第2次調査の北側調査区の南端、H-4グリッドに位置する。集石土壙の周辺は遺物包含層で、多くの焼礫とともに、土器片も多量に出土している。それらを取り上げた後に検出されたのが、第1号集石土壙である。遺構内からは、焼礫とともに土器片が多く出土し、第11図1のように器形復元が可能な深鉢形土器も検出された。遺物の出土状況からは、集石土壙として調査されているが土壙である可能性もある。

平面形は円形で、長軸方位はN-7°-Eを指す。規模は長径1.21m、短径1.04m、深さ0.21mである。

第11図1～19は検出された遺物である。1～18は出土した土器である。



第9図 第1号住居跡

2~11は、キャリバー形の深鉢形土器の破片である。2・3は口縁部で、沈線による文様が施されている。10、11は頸部の破片である。無文の頸部と胴部とは平行沈線文で区画し、沈線間に列点を施している。4~9は胴部の破片で、4は縦帶で他は沈線で懸垂文が施される。1、12~15は地文が沈線となる曾利系深鉢形土器である。1は、器形復元できたキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部は欠損している。胴部には磨消懸垂文が8単位と、磨消蛇行文が1単位施される。地文は櫛齒状の沈線が縱方向に施される。残存する器高30.3cm、底径6.2cmである。底部から約5cm上に、1cm幅の黒色帯が半周しており、そこから下には黒色部は観察されない。16は鉢形土器と考えられる。9、18は加曾利E IV式土器で、18は口縁と胴部を微隆起線文で区画している。

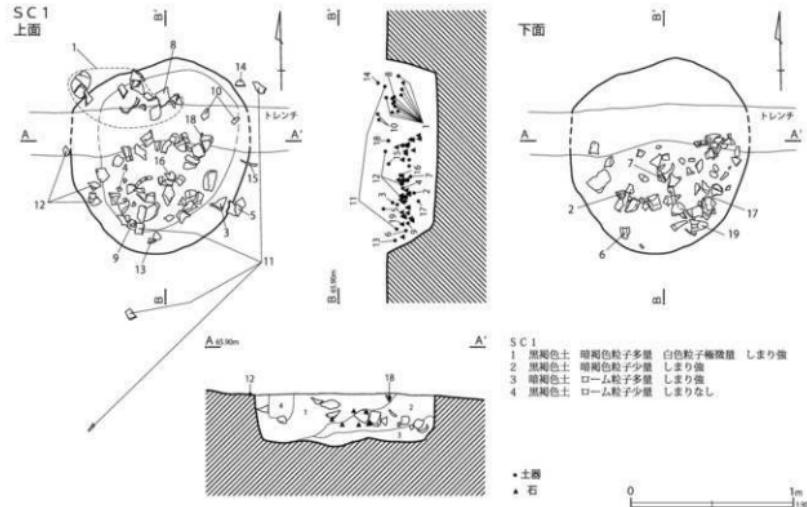
19は磨石類で、被熱により表面がひび割れる。時期は、中期末葉加曾利E III式期である。

(3) 土壌

縄文時代の土壌は、第2次調査区において9基検出された。北側調査区の北端に第7、9号土壌、第1号住居跡周辺の中央部に第1、12号土壌、そして南側調査区の遺物包含層下から、第17~21号土壌の5基がまとまって見つかった。

第1号土壌(第12、13図)

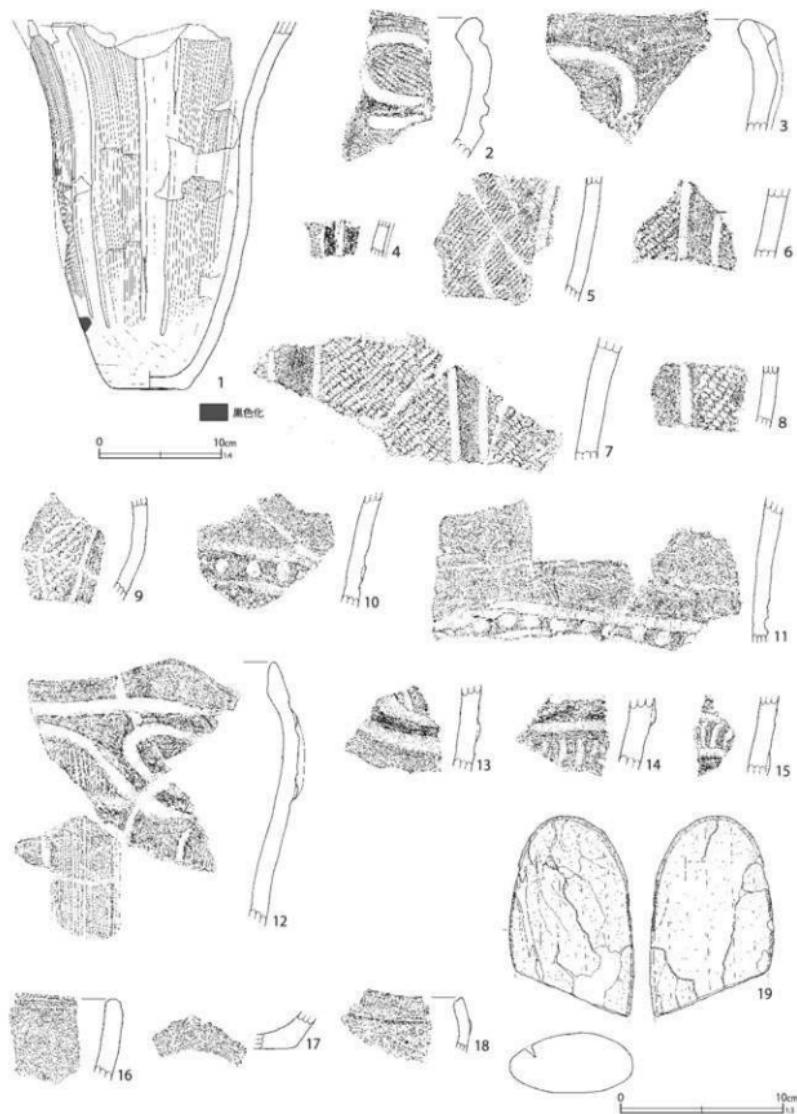
第2次調査北側調査区の中央西寄り、F-3グリッドに位置する。平面形は不整形形を呈する。第1号住居跡の西側に隣接し、北東端部を擾乱によって壊されている。長軸方位はN-61°-Eを指し、規模は一部削平を受けているが、長軸1.46m以上、短軸0.94m、深さ0.21mである。



第10図 第1号集石土壌

第3表 第1号集石土壌出土石器観察表(第11図)

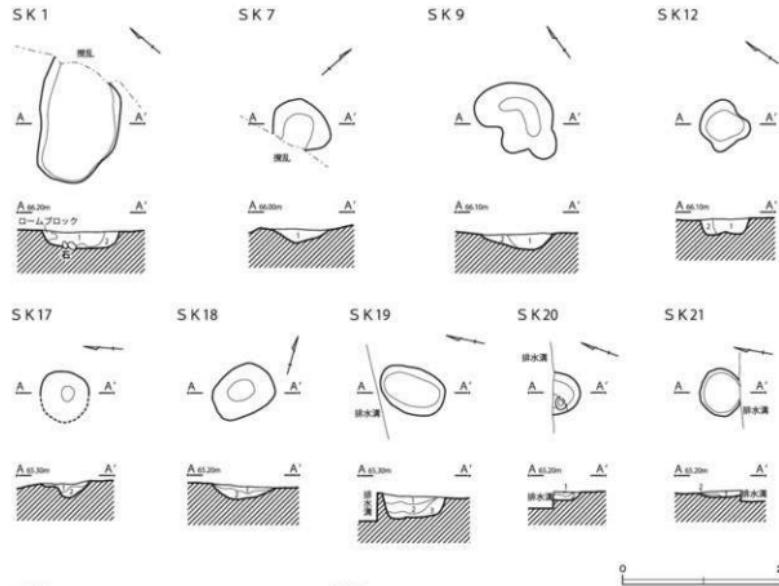
番号	出土位置	器種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版
19	SC 1	磨石	砂岩	[12.3]	7.7	3.7	457.4	No.103 被熱あり	11-7



第11図 第1号集石土壤出土遺物

第13図1～7は出土した土器である。1～3はキヤリバー形深鉢形土器で、1、2は口縁部文様帶を持つもので、口縁部と胴部は隆帯によって区画している。2の胴部には、沈線で磨消懸垂文を垂下させる。3は口縁部文様帶をもたないもので、口縁部には狭い無文部を沈線で区画している。2、3の地文は単節RLの繩文である。4は連弧文系の深鉢形土器で、胴上部の破片である。5、6は地文が条線を施す曾利系の深鉢形土器である。7は浅鉢形土器である。

時期は、出土土器から中期末葉加曾利E III式期である。



- | | |
|------|---|
| SK 1 | 1 黒褐色土 ローム粒子多量 硬くしまる
2 褐色土 ローム粒子主体 黒褐色粒子少量 しまりあり |
| SK 7 | 1 黒褐色土 ローム粒子多量 |
| SK 9 | 1 暗褐色土 ローム粒子少量 しまりあり
2 褐色土 ローム粒子主体 褐色粒子多量 しまり強 |

- | | |
|----------|---|
| SK 12 | 1 暗褐色土 ローム粒子 (2 mm) 間隔 粘性・しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子 (2 mm) 多量 粘性・しまりあり |
| SK 17～21 | 1 暗褐色土 ローム粒子多量 固化物微量 粘性極めて強い しまり強
2 暗褐色土 ローム粒子極多量 黑褐色粒子多量 粘性極めて強い しまり強
3 暗褐色土 ローム粒子極多量 (2 刻より多い) 黑褐色粒子多量 粘性極めて強い しまり強 |

第7号土壌 (第12、13図)

第2次調査北側調査区の北端、C-3グリッドに位置する。平面形は不整円形で、西側には第9号土壌が隣接する。南端部を搅乱によって壞される。規模は一部削平を受けているが、残存する長径0.76m、短径0.54mで、深さ0.16mである。

第13図8は出土した、深鉢形土器の胴部破片である。単節RLの繩文が縦方向に施されられる。

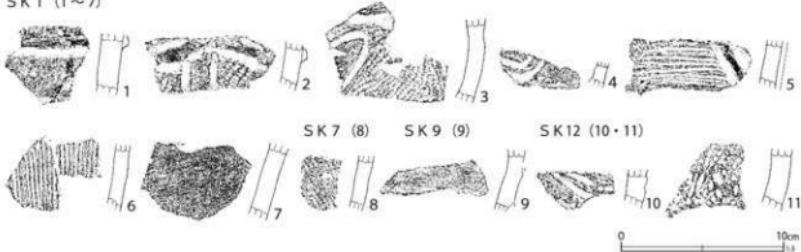
時期は、中期後半加曾利E式期と考えられる。

第9号土壌 (第12、13図)

第2次調査北側調査区の北端、C-2グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、第7号土

第12図 土壌

SK 1 (1~7)



第13図 土壌出土遺物

境が東側に隣接する。規模は長径1.13m、短径0.83m、深さ0.22mである。

第13図9は出土した浅鉢形土器の無文の胴部小破片である。

時期は、中期後半加曾利E式期と考えられる。

第12号土壤 (第12、13図)

第2次調査北側調査区の中央南寄り、G-3グリッドに位置し、第1号住居跡の南に接する。平面形はアーメバ状の不整形で、規模は長径0.65m、短径0.62m、深さ0.20mである。

第13図10、11は出土した深鉢形土器の胴部破片である。10は連弧文系である。

時期は、中期末葉加曾利E III式期と考えられる。

第17号土壤 (第12図)

第2次調査の南側調査区、I-4・5グリッドに位置する。遺物包含層下面の黒褐色土を掘り込むため、西側の掘り込みは明確でなかった。平面形は円形と推定される。残存する規模は長径0.58m、短径0.27m、深さ0.18mである。

遺物は出土していないが、遺物包含層の時期から中期後半加曾利E式期と考えられる。

第18号土壤 (第12図)

第2次調査の南側調査区、I-4グリッドに位置する。南側に第17号土壤、西側に第19号土壤が隣接し、平面形は不整円形である。規模は長径0.76m、短径0.59m、深さ0.19mである。

遺物は出土していないが、遺物包含層の時期か

ら中期後半加曾利E式期と考えられる。

第19号土壤 (第12図)

第2次調査の南側調査区、I-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.82m、短径0.56m、深さ0.30mである。

遺物は出土していないが、遺物包含層の時期から中期後半加曾利E式期と考えられる。

第20号土壤 (第12図)

第2次調査の南側調査区、I-5グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかるため全容は不明である。平面形は円形と推定され、残存する規模は長径0.53m、短径0.34m、深さ0.11mである。

遺物は出土していないが、遺物包含層の時期から中期後半加曾利E式期と考えられる。

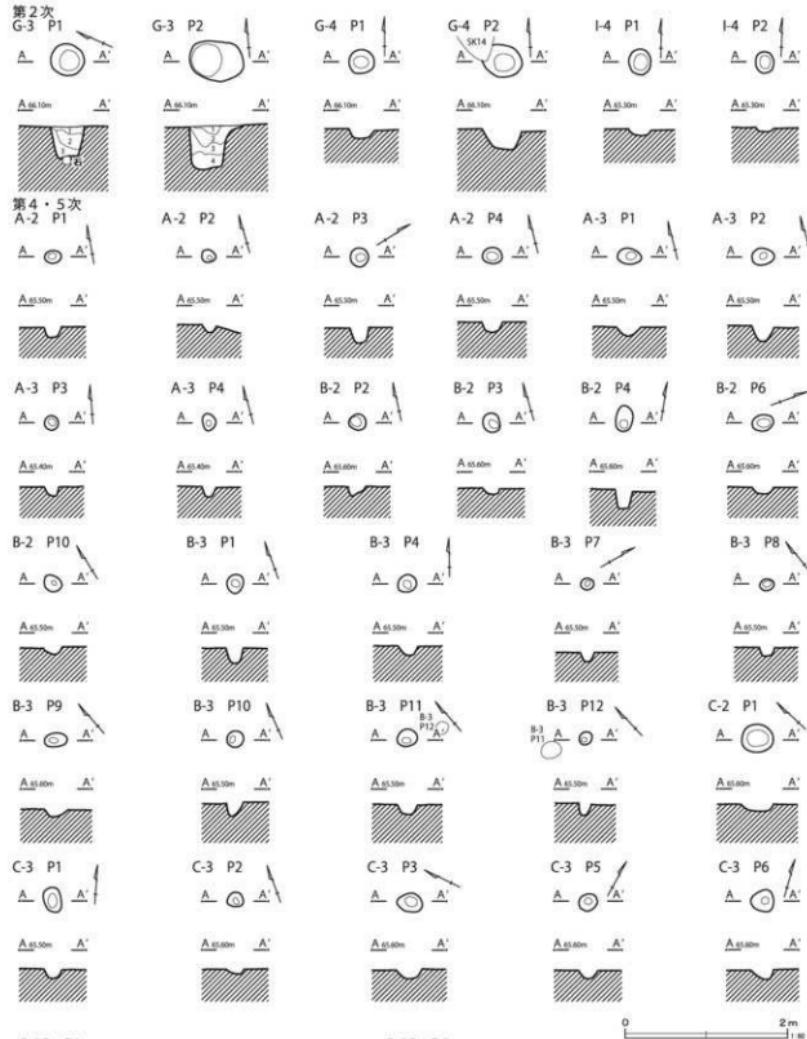
第21号土壤 (第12図)

第2次調査の南側調査区、I-5グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長径0.59m、残存する短径0.50m、深さ0.08mである。

遺物は出土していないが、遺物包含層の時期から中期後半加曾利E式期と考えられる。

(4) グリッドピット

縄文時代のピットは、33基が検出された。第2次調査区では、北側調査区で4基(G-3グリッドP1、2、G-4グリッドP1、2)、南側調査区で2基(I-4グリッドP1、2)の6基が、残りは第4・5次調査区北側のA-C列に27基



G-3 Gr P1
 1 明褐色土 ローム粒子 (1~2 mm) 多量 粘性あり しまり強
 2 褐色土 ローム粒子 (1~2 mm) 少量 粘性・しまりあり
 3 明褐色土 ローム粒子 (1~2 mm) 小石 (0.5~1 cm) 中量
 黏性や少強 しまりあり

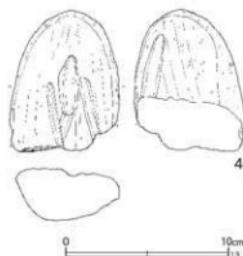
G-3 Gr P2
 1 褐色土 ローム粒子 (1~3 mm) 少量 灰化物微量 粘性・しまりあり
 2 褐色土 ローム粒子 (1~2 mm) 少量 粘性・しまりあり
 3 褐色土 ローム粒子 (2~5 mm) 多量 ロームブロック (1~2 cm) 少量
 粘性や少強 しまりあり ブロック状の土が押し固められたように堆積する
 4 褐色土 ローム粒子 (1~2 mm) 微量 小石 (1~3 cm) 少量 黏性・しまりあり

第14図 グリッドピット

G-3 P1



G-4 P2



第15図 グリッドピット出土遺物

が分布し、遺物包含層とした中期の土器の分布範囲に概ね重なっている。第1号住居跡の南側に位置するG-3グリッドP1、2は、深さ、規模とともに住居跡の柱穴の可能性が高いが、他に同様のピットではなく、伴う炉跡も検出されなかつた。

第15図は出土した遺物である。掘り込みがほとんど失われているピットが多いため、図示できるものは少なかつた。

1～3は出土した土器である。いずれも深鉢形土器の胴部小破片である。時期は中期後半加曾利E式期である。4は出土した砥石である。砂岩製で、表面中央には複数の使用による溝状の凹みが、裏面にも溝跡が残されている。

第4表 グリッドピット出土石器観察表（第15図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版
4	G-4 P.2	砥石	砂岩	[8.7]	[6.8]	[3.5]	172.0	被熱あり	11-7

第5表 グリッドピット一覧表（第14図）

位置	番号	傾き時期	大きさ(cm)		色調	土層説明			備考
			長径	短径		混入物	粘性	しまり	
G-3	P1	縦文	41	39	43	第14図			第15図 1
	P2	縦文	56	49	56	第14図			
G-4	P1	縦文	30	29	11	褐色土	ローム粒多量	あり	やや強 第15図 2～4 第4表
	P2	縦文	54	40	22	明褐色土	ローム粒少量・炭化物粒微量	あり	
I-4	P1	縦文	33	27	7	灰褐色土	マンガン斑多量・ローム粒微量	強い	強い 第15図 2～4 第4表
	P2	縦文	26	23	5	褐色土	マンガン斑多量・ローム粒中量	強い	
A-2	P1	縦文	21	16	13	黒褐色土	混入物なし	あり	あり 第15図 1
	P2	縦文	18	15	11	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	
A-3	P3	縦文	23	22	17	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり 包含層下面から検出
	P4	縦文	24	20	13	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	
A-3	P1	縦文	30	19	10	黒褐色土	ローム粒多量	あり	あり 包含層下面から検出
	P2	縦文	27	21	18	黒褐色土	ローム粒少量	あり	
B-2	P3	縦文	18	18	13	暗褐色土	混入物なし	あり	あり 包含層下面から検出
	P4	縦文	21	16	12	暗褐色土	混入物なし	あり	
B-2	P2	縦文	21	20	11	にぶい黄褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	なし 第15図 1
	P3	縦文	24	22	8	黒褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	
B-3	P4	縦文	32	21	23	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり 第15図 1
	P6	縦文	27	20	7	暗褐色土	ローム粒多量	あり	
B-3	P10	縦文	24	19	9	暗褐色土	黒褐色土・ブロック少量	あり	あり 第15図 1
	P1	縦文	24	20	20	暗褐色土	混入物なし	あり	
B-3	P4	縦文	24	20	11	暗褐色土	混入物なし	あり	あり 第15図 1
	P7	縦文	17	14	11	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	
B-3	P8	縦文	18	14	13	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	あり 第15図 1
	P9	縦文	28	17	9	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	
C-3	P10	縦文	21	21	18	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	あり 第15図 1
	P11	縦文	25	21	13	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	
C-2	P12	縦文	17	15	13	暗褐色土	ローム粒・ブロック少量	あり	あり 第15図 1
	P1	縦文	39	35	8	暗褐色土	ロームブロック多量	あり	
C-3	P1	縦文	31	21	13	暗褐色土	灰黄色土・ブロック多量	あり	あり 第15図 1
	P2	縦文	20	18	7	暗褐色土	ローム粒微量	あり	
C-3	P3	縦文	31	24	8	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり 第15図 1
	P5	縦文	23	20	10	暗褐色土	混入物なし	あり	
C-3	P6	縦文	27	26	12	暗褐色土	混入物なし	あり	あり 第15図 1

(5) 遺物包含層

縄文時代中期末葉加曾利E III式期を中心とする遺物包含層1箇所を検出した。

第2次調査では、市道を挟んだ北側調査区南端から、南側調査区の凹地を中心に広がっていることが確認された。その後、第4・5次調査によつて遺物包含層の南端が確認された。

規模は南北約32mである。しかし、調査区が部分的であるため、遺物包含層の東西方向の広がりは把握できなかつた。地形的には東に広がる浅い埋没谷であり、谷に堆積した厚さ20cmほどの暗褐色シルト土層中に遺物が分布していた。

遺物は、第1次調査で検出された集落跡の時期と一致しており、そこで使用され廃棄された土器や石器と考えられる。

出土土器

遺物包含層から出土した土器を一括した。集落跡に関連する時期の土器が主体を占めるが、少量だが他の時期の土器も出土した。土器の表面は荒れており、器面が剥落しているものも多い。

第I群土器（第18図1～3）

前期後葉諸磯式土器を一括する。1～3は、諸磯b式土器で、半裁竹管による文様が施文される。

第II群土器

縄文時代中期の土器群を一括する。

第1類土器（第30図1）

中期中葉勝坂式期の土器群を一括する。グリッドから出土している。

第2類土器

中期後葉から末葉の土器群を一括する。遺物包含層を形成する主体となる土器群である。北側に位置する集落の時期に相当する土器群である。中期末葉加曾利E III式土器が主体となり、中期後葉加曾利E II式土器が一定量含まれる。

第1種（第18図4～29、第19図30～55、第20図56～91、第22図155～157）

加曾利E式系の深鉢形土器を一括する。

4はバケツ状の器形で、口縁部文様帯を隆帶で施文され、隆帶の一部に押圧状の刻みが施される。

5～81は、口縁部に文様をもつキャリバー形の深鉢形土器である。5～29は口縁の破片である。隆帶で渦巻文などが施文される。5は波状口縁で波頂部から隆帶を垂らして渦巻文が施される。6～8は口唇直下に沈線を巡らす。30～34は頸部から胴部の破片で、30～32、34は頸部に無文帯を持つ。32、34は頸部と胴部を隆帶で区画し、そこから2本1組の隆帶を垂下させている。35～37は口縁部文様帯から胴部の破片で、胴部には2本1組の沈線による磨消懸垂文を垂下させている。

38～55は、胴部に隆帶で文様が施されるもので、蛇行懸垂文や垂下する懸垂文が施される。38～53、55は胴部、54は底部の破片である。

56～81は胴部文様を沈線で施文されるもので、蛇行懸垂文や垂下させる懸垂文が施される。56～80は胴部、81は底部の破片である。56は4本1組の沈線で懸垂文や渦巻文が施されるもので、大木系の文様をもつものである。62～79は、懸垂文間に磨り消す磨消懸垂文が施される。

82～91は、口縁部文様をもたない土器である。82～88は、加曾利E III式の新段階に相当する。89～91は、底部から口縁部に向かって直線的に開く器形で、89、91は胴部に隆帶で文様が施文される。

155～157は口縁部が無文となるもので、口縁がやや内湾し、頸部で括れる器形である。

第2種（第21図92～110）

連弧文系の深鉢形土器を一括した。

口唇部直下に沈線文や列点文を巡らし胴部と区画するもので、胴部の括れ部も沈線文を巡らし上部と下部と区画する。胴上部と下部のそれぞれに連弧文などが施文される。

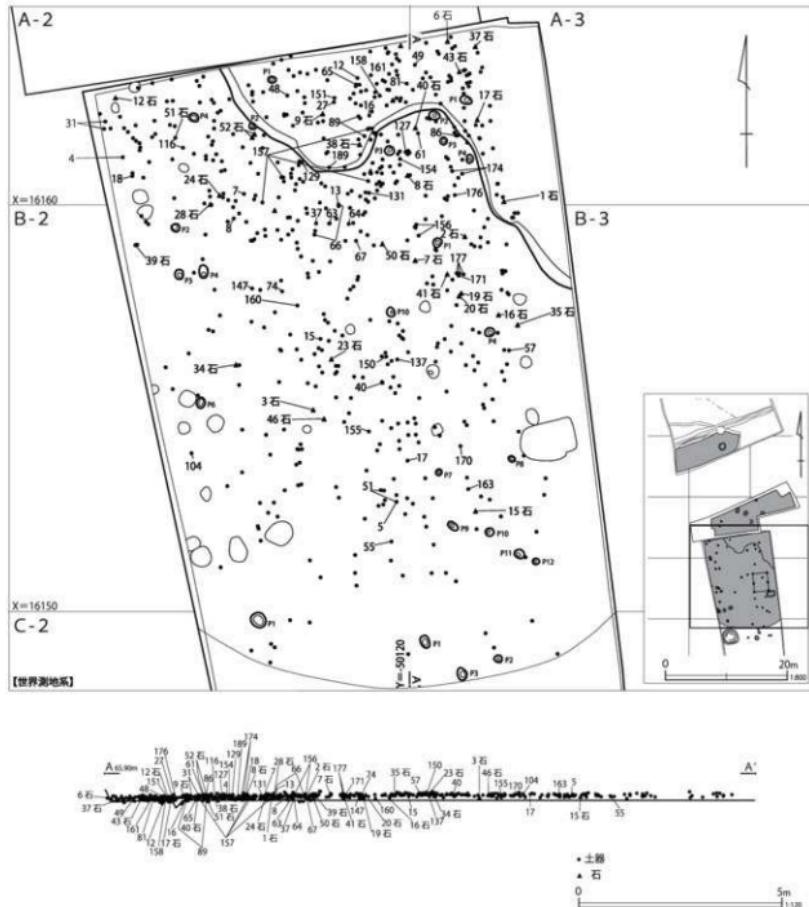
第3種（第21図111～125、第22図126～154）

曾利系の深鉢形土器を一括した。

地文として、条線や短沈線を施文する土器である。126、149～152は、単沈線が綾杉状に施される。



第16図 遺物包含層遺物分布図（1）



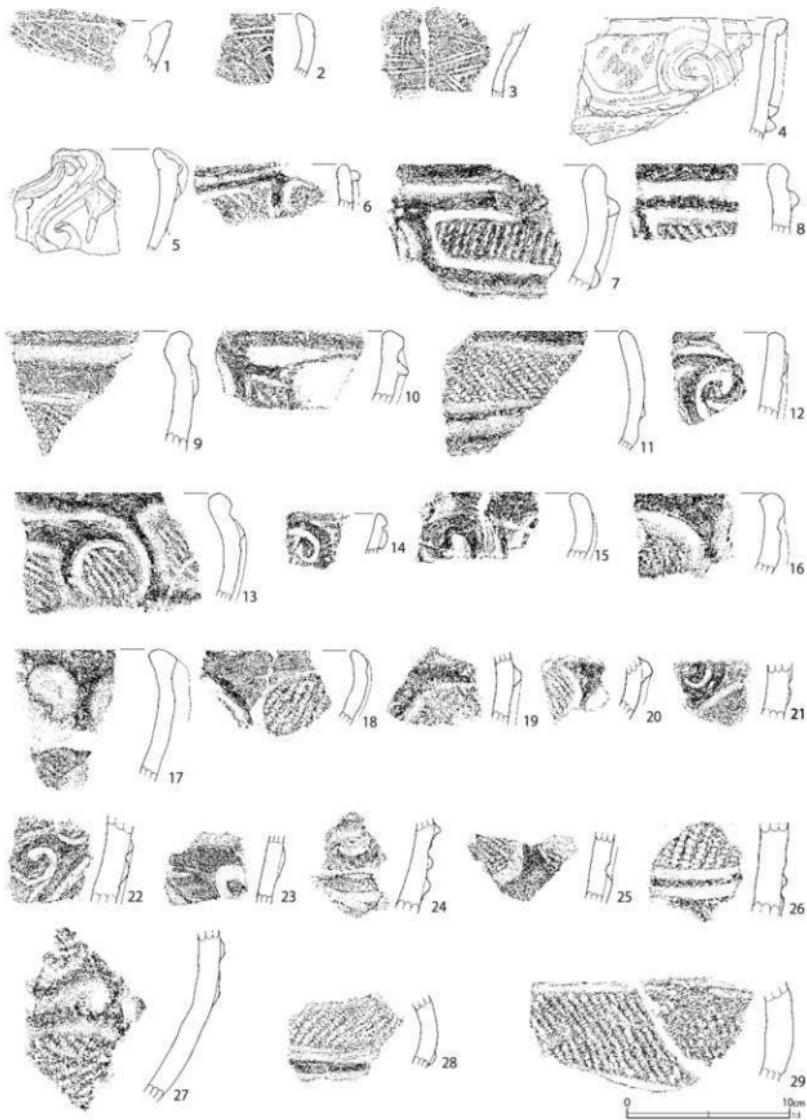
第17図 遺物包含層遺物分布図（2）

127～129は、胴部の括れ部に巡らしたS線文内に列点文が施文される。132、154は胴部文様の隆帶内に列点文を施文している。143は地文として、胴上部は条線、下部は単節LRの繩文が施される。

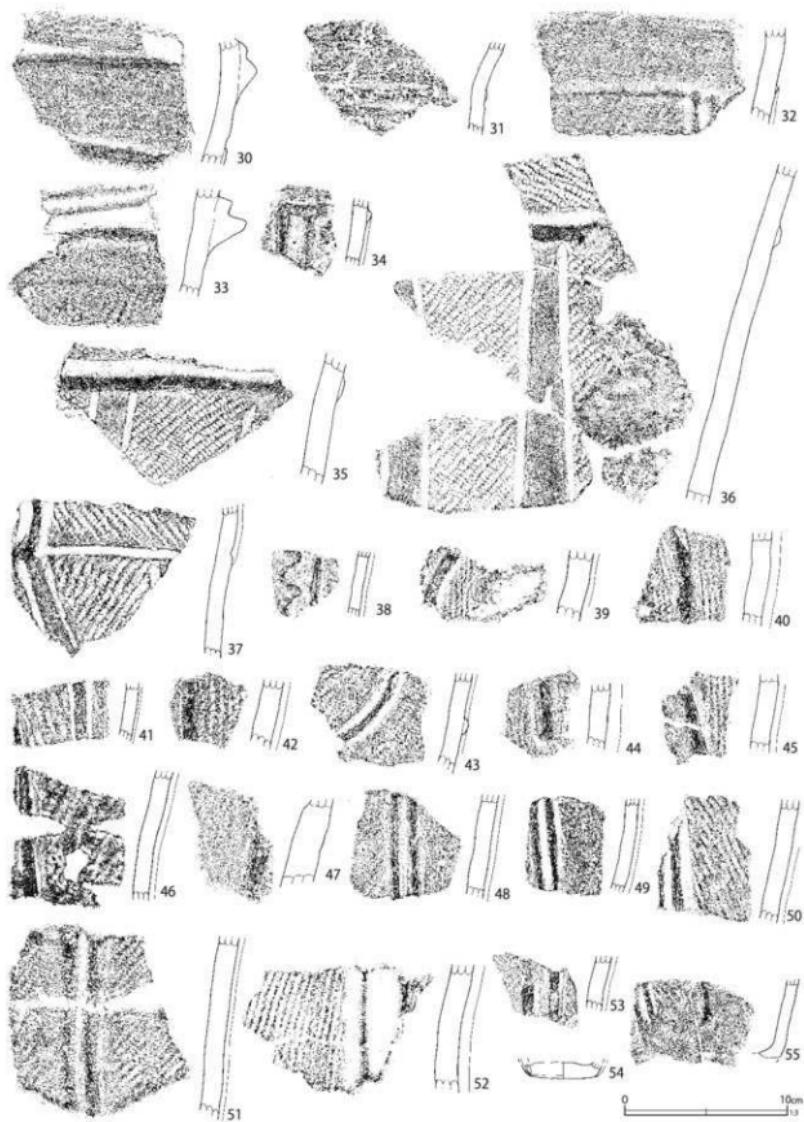
第4種（第23図158～188）

深鉢形以外の器形の土器を一括した。

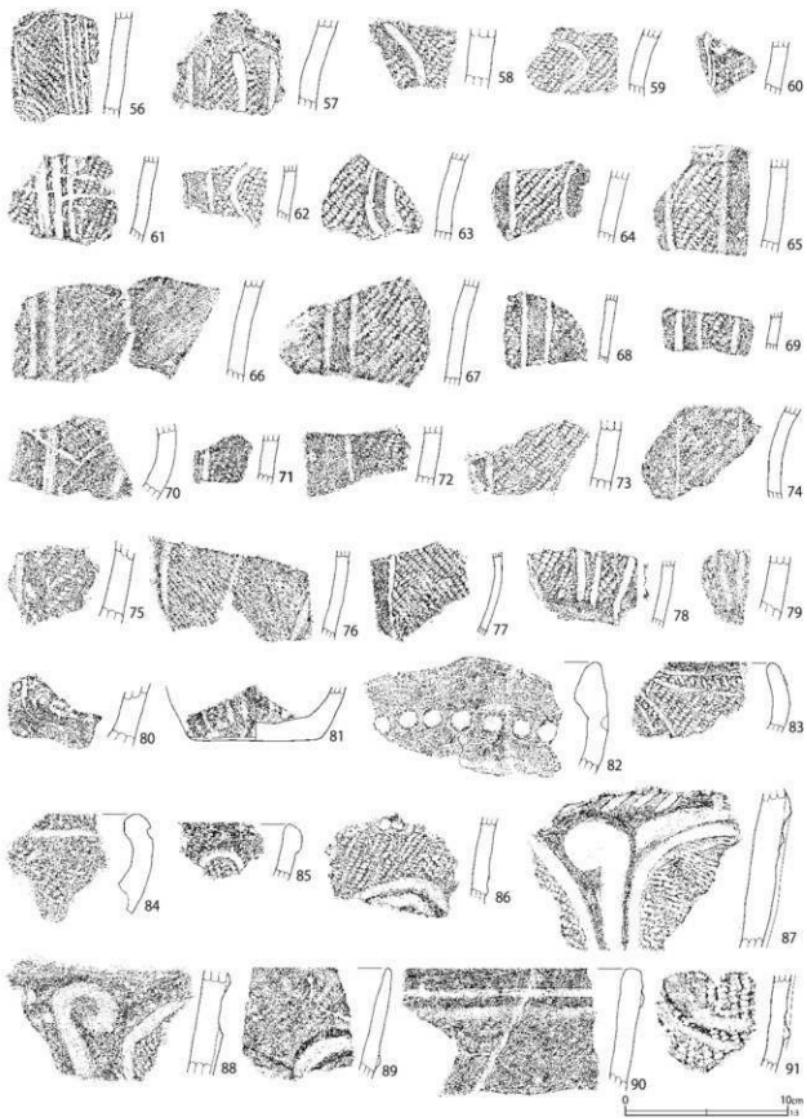
158～185は、浅鉢または鉢形土器である。158、159は丸く内湾する口縁部に文様が施文される。160～166は肩部がエラ状に張る器形で、160～164は肩部に文様が施文される。167は条線を地文として施文されている。168～170は口縁部に浮彫状に文様が施文されている。171は口縁部に狭い無



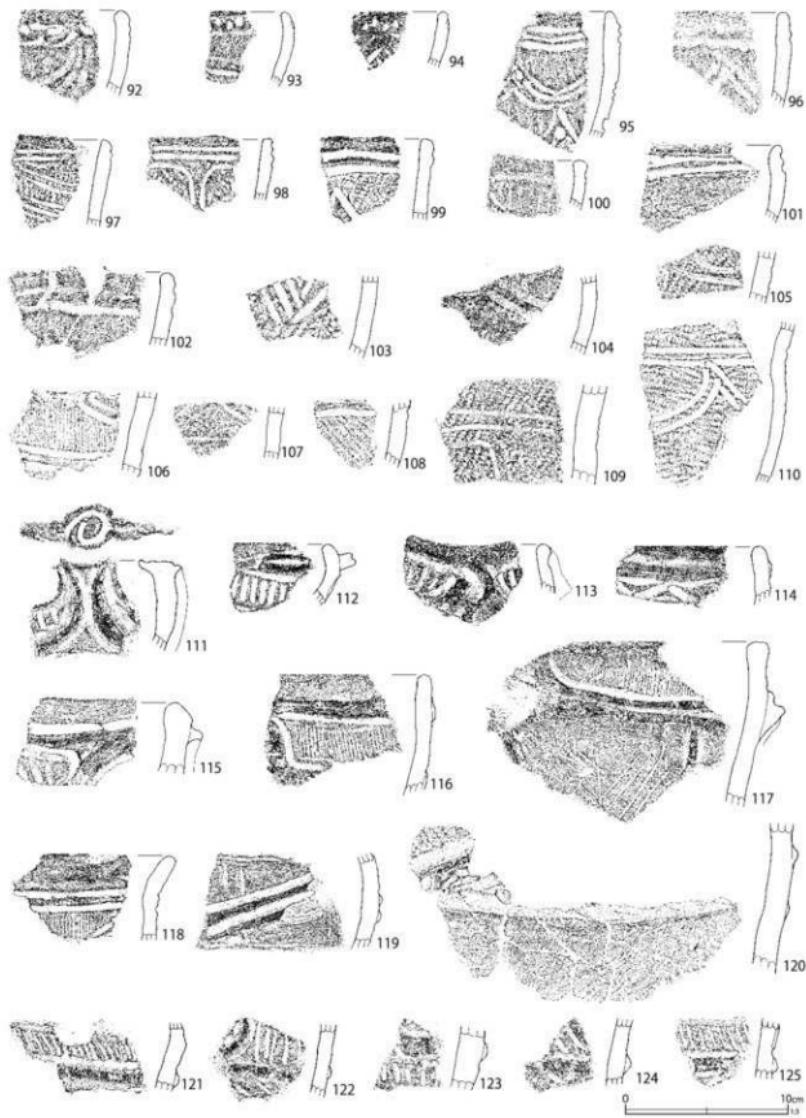
第18図 遺物包含層出土土器（1）



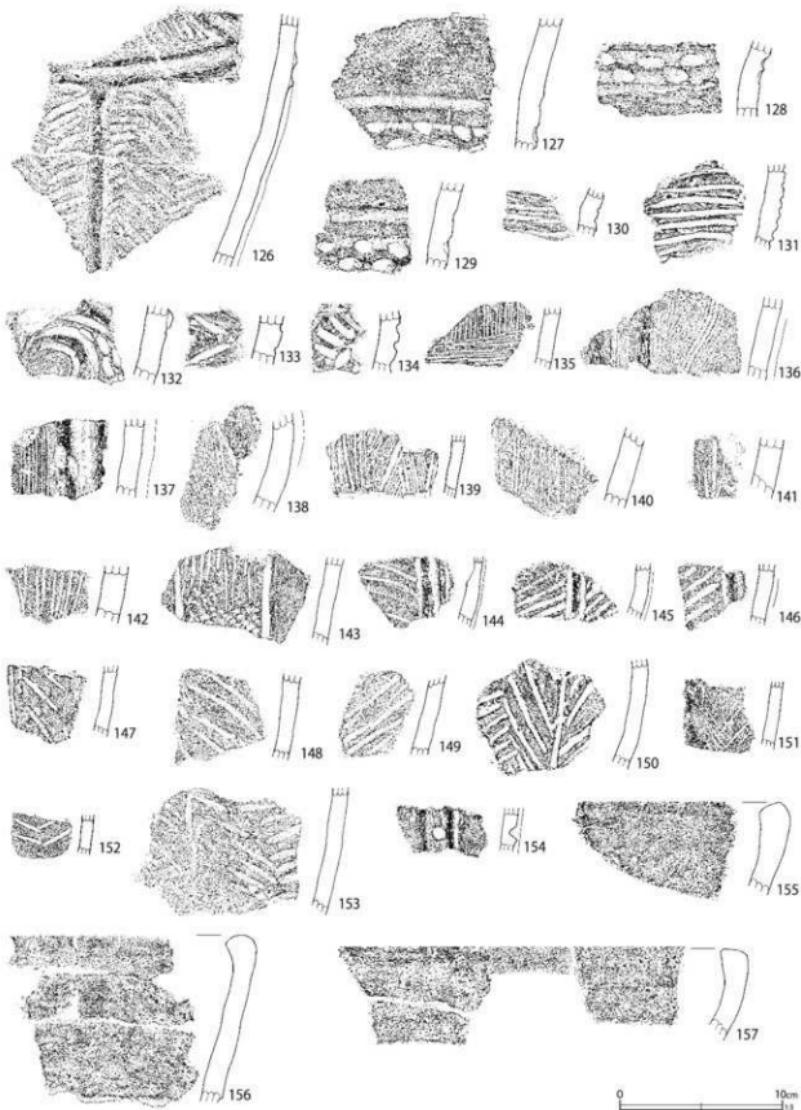
第19図 遺物包含層出土土器（2）



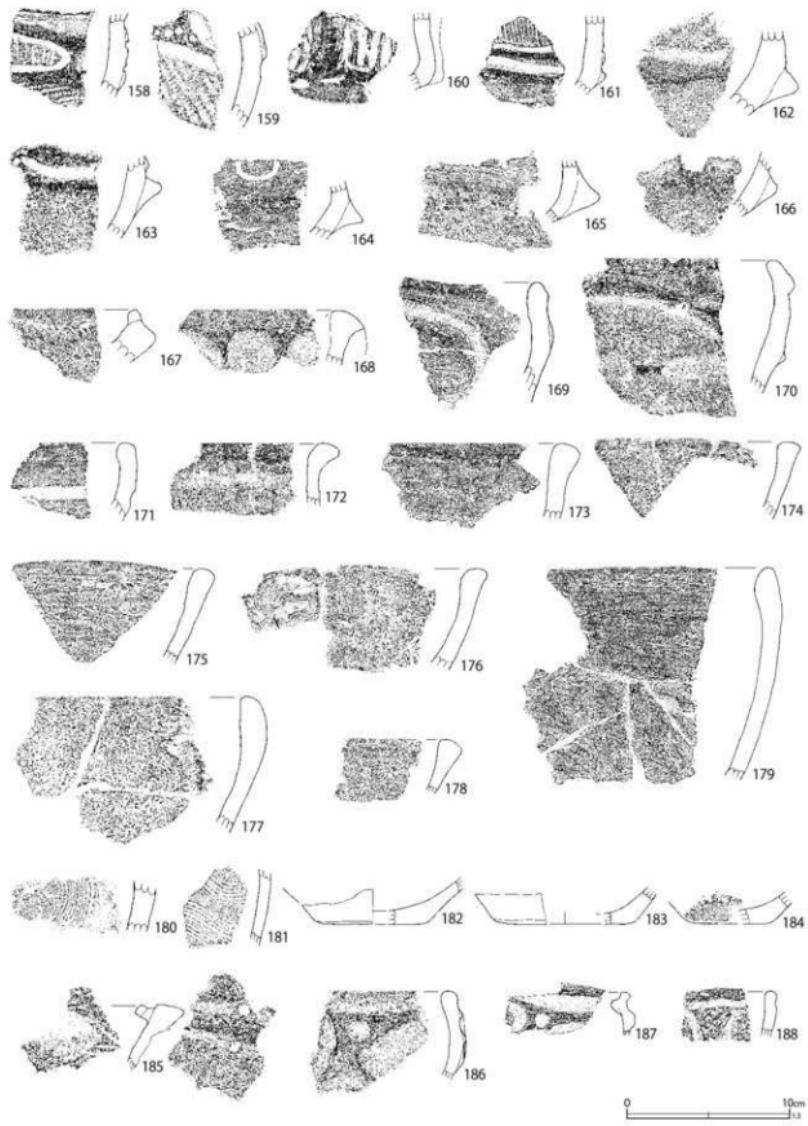
第20図 遺物包含層出土土器（3）



第21図 遺物包含層出土土器（4）



第22図 遺物包含層出土土器（5）



第23図 遺物包含層出土土器（6）



第24図 遺物包含層出土土器（7）

文帯をもつもので、沈線文を巡らし胴部と区画している。172～179は無文である。180、181は櫛歯状の地文が施文される。182～184は無文の底部である。185は口縁内面に巡らした隆帶に、円孔を貫通させている。186、187は壺形土器で、186は風化が著しいが、187は精緻に作られている。

188はミニチュア土器の口縁部破片である。

第三群土器（第24図189～191）

中期末葉から後期初頭の土器群を一括した。加曾利E IV式土器である。189、190は口縁部、191は胴部破片である。いずれも微隆起状の隆帶で文様が施文される。

第四群土器（第24図192～194）

後期の土器群を一括した。

192は後期初頭の称名寺I式土器の胴部破片で、沈線文内に列点文が施文される。

193、194は後期前葉の堀之内I式土器の胴部破片である。

出土石器

第25～29図は出土した石器である。

磨製石斧（第25図1、2）

1は小型磨製石斧で、基部を欠損する。2は剥落した器面の一部である。

スクレイバー（第25図3）

3はつまみ部を有するものである。つまみ部以外は、素材である剥片の形状をそのまま生かし、刃部はほとんど調整が施されていない。

打製石斧（第25図4～18、第26図19～25）

打製石斧は、刃部が最大幅となる楔形の形状のものが主体を占め、厳密に両側縁が刃部に向けて

開かない短冊形のものはなかった。また、大きさが、4～6の大型のものと、7～22の小型に近い中型のものに分けられる。

礫器（第26図26、27）

剥片素材ではなく、自然礫を利用して加工するものである。

スタンプ形石器（第26図28）

28の1点のみが出土した。下端部の縁辺に使用による細かい剥離が認められる。

砥石（第26図29、30）

つくりの薄い小型の砥石で、29は緑色岩製、30は砂岩製である。29の裏面中央は、使用により浅く窪む。

磨石類（第26図31～34、第27図35～46、第28図47）

磨面、凹部、敲打痕のいずれかを有するものを一括して磨石類とした。それぞれ、複数の使用痕を有するものが多く、磨面のみという磨石類は少なく、41、44、45、47の4点であった。器面の中央付近に認められた凹部は、敲打によって浅く凹むもので、石皿にあるような漏斗状のものは認められなかった。形状については、棒状、円形、橢円形状のものがみられた。

石皿（第28図48、49）

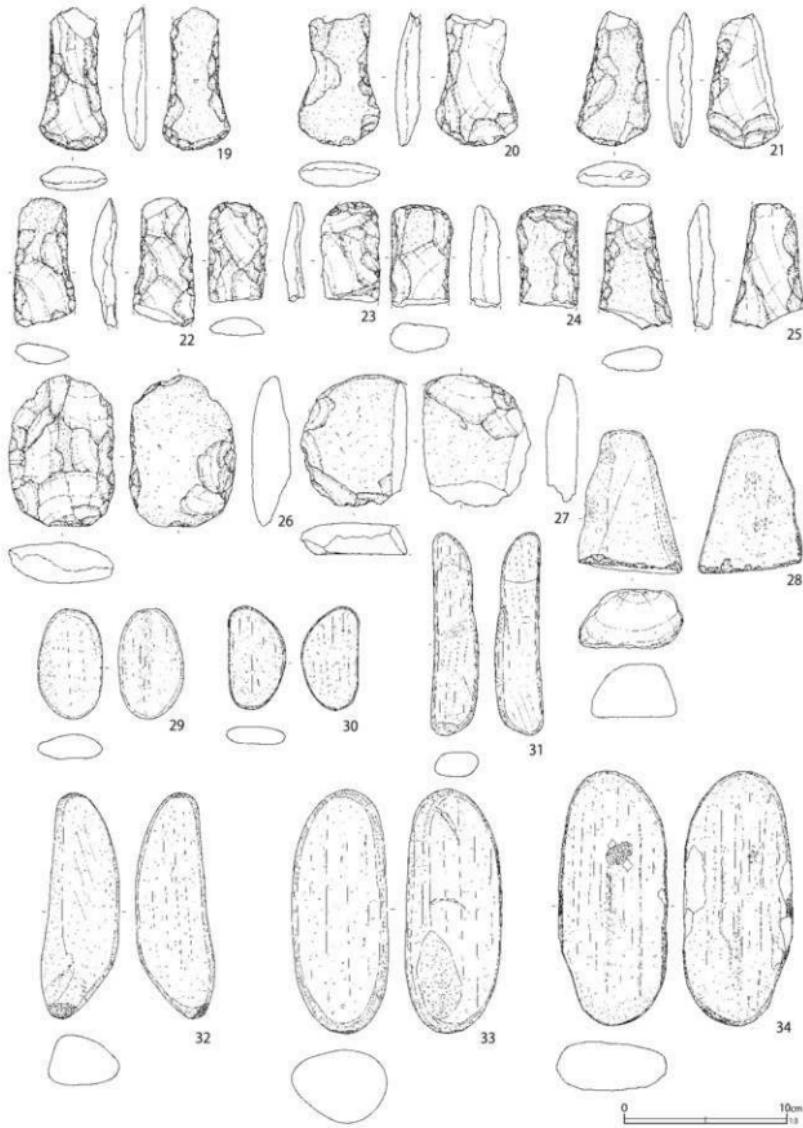
中央を凹ませて加工したものや、使用により凹むものを石皿とした。いずれも破片である。48は縁部分に平坦面を作り出している。平坦な縁部分には漏斗状の凹部が認められる。

台石（第28図50、第29図51、52）

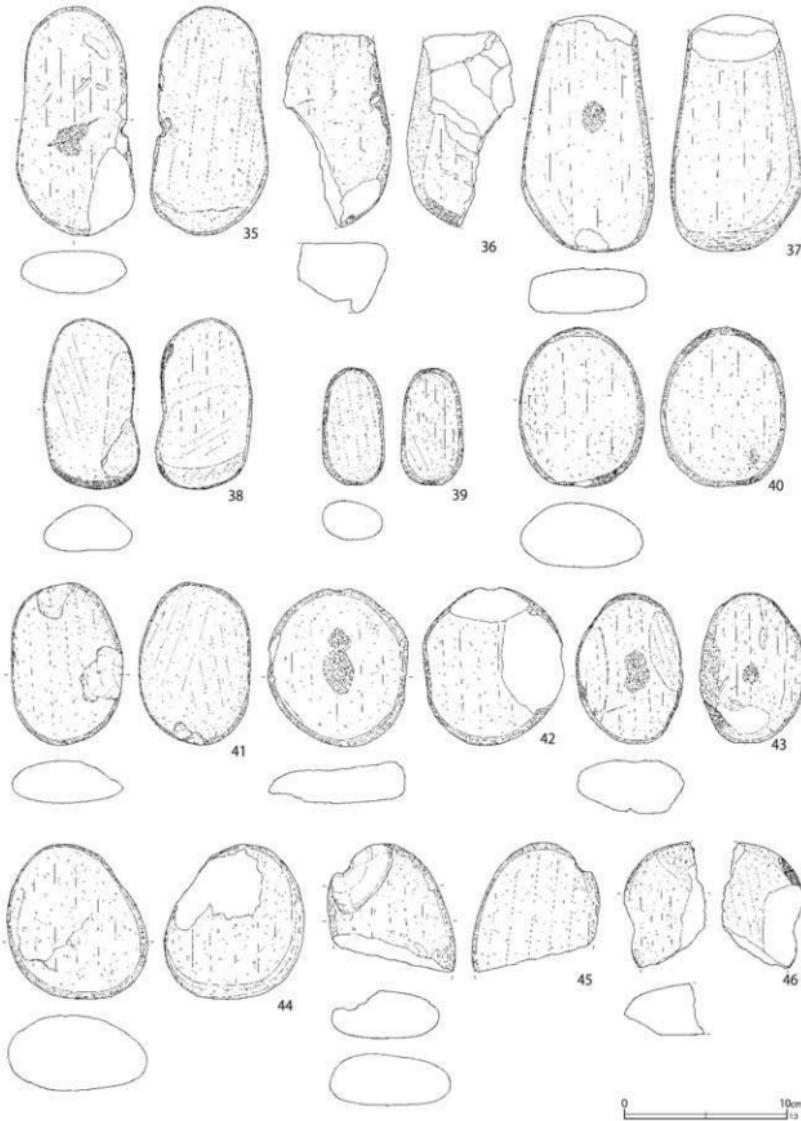
大型で、容易に可動できないものを台石とした。磨面や敲打痕が残されている。



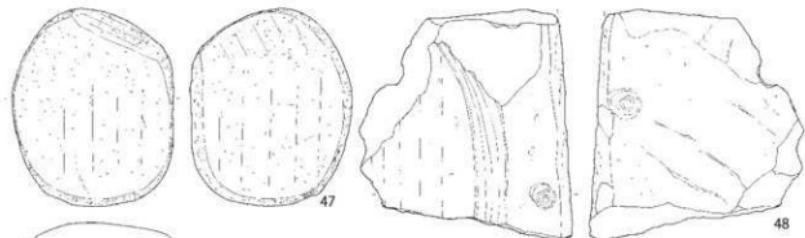
第25图 遗物包含层出土石器（1）



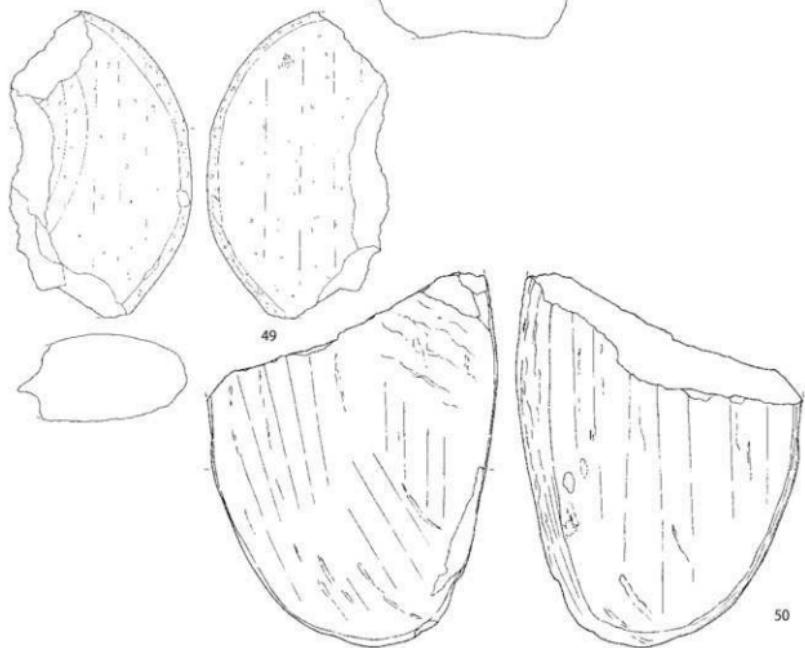
第26図 遺物包含層出土石器（2）



第27図 遺物包含層出土石器（3）



48

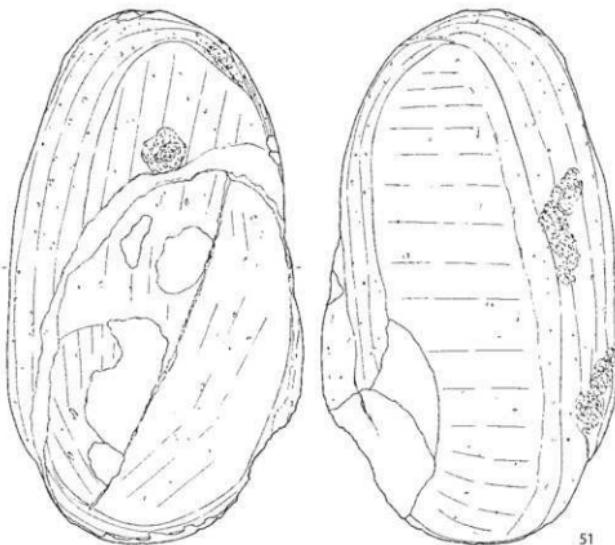


49

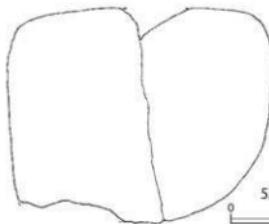
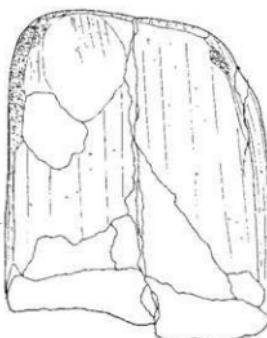
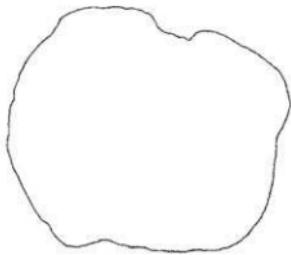
50



第28図 遺物包含層出土石器（4）



51



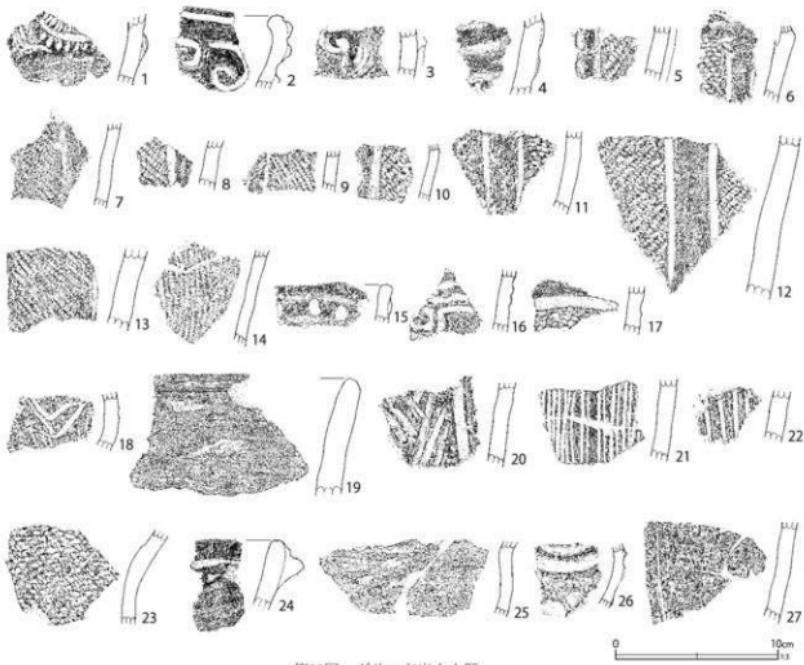
52

10cm

第29図 遺物包含層出土石器（5）

第6表 遺物包含層出土石器観察表（第25～29図）

番号	グリッド	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版
1	A-3	小型磨製石斧	緑色岩	[4.0]	2.5	0.6	10.1	被熱なし 第4次	16-1
2	B-3	磨製石斧	緑色岩	[6.4]	[5.7]	[1.4]	63.5	被熱なし 第4次	16-1
3	B-2	スクレイバー	ホルンフェルス	4.0	[6.3]	0.8	11.4	被熱なし 第4次	16-1
4	I-4	打製石斧	ホルンフェルス	14.0	5.2	2.4	215.9	被熱なし 第2次	16-1
5	I-4	打製石斧	砂岩	13.6	4.6	1.7	106.3	被熱なし 第2次	16-1
6	A-3	打製石斧	ホルンフェルス	[10.9]	5.8	1.7	94.5	被熱なし 第4次	16-1
7	B-3	打製石斧	ホルンフェルス	7.5	4.1	1.8	75.6	被熱なし 第4次	16-1
8	A-2	打製石斧	砂岩	[8.9]	4.6	1.8	81.5	被熱なし 第4次	16-1
9	A-2	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	3.7	1.3	49.2	被熱あり 第4次	16-1
10	I-4	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	4.1	1.4	67.8	被熱なし 第2次	16-1
11	B-2	打製石斧	頁岩	8.6	3.8	1.4	45.7	被熱なし 第5次	16-1
12	A-2	打製石斧	ホルンフェルス	8.1	4.0	1.3	55.1	被熱あり 第4次	16-1
13	I-4	打製石斧	砂岩	9.3	5.0	2.1	95.3	被熱あり 第2次	16-1
14	H-4	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	5.6	1.3	74.9	被熱なし 第2次	16-1
15	B-3	打製石斧	砂岩	[8.6]	[4.8]	1.7	72.6	被熱なし 第4次	16-1
16	B-3	打製石斧	ホルンフェルス	[8.3]	4.5	1.7	85.6	被熱なし 第4次	16-1
17	A-3	打製石斧	ホルンフェルス	[7.3]	4.2	1.1	37.8	被熱なし 第4次	16-1
18	B-2	打製石斧	ホルンフェルス	8.6	4.0	1.2	45.0	被熱なし 第5次	16-1
19	B-3	打製石斧	砂岩	[8.8]	4.2	1.5	60.8	被熱なし 第4次	16-2
20	B-3	打製石斧	砂岩	8.1	5.0	1.5	67.6	被熱なし 第4次	16-2
21	I-4	打製石斧	砂岩	[8.2]	4.5	1.5	64.2	被熱なし 第2次	16-2
22	B-2	打製石斧	ホルンフェルス	[7.9]	3.8	1.6	47.6	被熱なし 第5次	16-2
23	B-2	打製石斧	砂岩	[6.1]	3.7	1.3	32.6	被熱なし 第4次	16-2
24	A-2	打製石斧	ホルンフェルス	[6.2]	[3.9]	1.9	66.1	被熱あり 第4次	16-2
25	I-5	打製石斧	砂岩	[7.7]	[4.5]	1.7	54.7	被熱なし 第2次	16-2
26	B-3	縸器	砂岩	9.3	6.5	2.4	184.8	被熱なし 第4次	16-2
27	I-4	縸器	砂岩	8.1	6.6	2.0	148.2	被熱あり 第2次	16-2
28	B-2	スクランプ形石器	砂岩	8.8	6.4	3.6	257.1	被熱なし 第4次	16-2
29	H-4	砥石	緑色岩	6.7	4.0	1.5	69.1	被熱あり 第2次	16-2
30	B-2	砥石	砂岩	6.4	3.6	1.2	39.5	被熱なし 第5次	16-2
31	H-4	磨石	緑色岩	12.5	3.0	1.5	98.1	被熱あり 第2次	16-2
32	B-2	磨石	砂岩	13.9	4.8	3.5	289.5	被熱なし 第4次	16-2
33	I-4	磨石	砂岩	15.1	5.9	4.6	592.0	被熱なし 第2次	16-2
34	B-2	磨石	緑色岩	15.8	6.7	3.3	626.5	被熱なし 第4次	16-2
35	B-3	磨石	砂岩	14.1	7.2	2.9	413.0	被熱なし 第4次	16-3
36	H-4	磨石	砂岩	[12.0]	[6.6]	4.3	324.0	被熱あり 第2次	16-3
37	A-3	磨石	片岩(結晶)	[14.5]	8.2	2.8	556.2	被熱なし 第4次	16-3
38	A-2	磨石	砂岩	10.5	5.9	3.0	240.0	被熱あり 第4次	16-3
39	B-2	磨石	閃緑岩	7.2	3.8	2.4	104.8	被熱なし 第4次	16-3
40	A-3	磨石	閃緑岩	9.8	7.8	4.0	454.6	被熱あり 第4次	16-3
41	B-3	磨石	砂岩	10.0	6.9	2.6	255.9	被熱なし 第4次	16-3
42	A-3	磨石	閃緑岩	[9.7]	8.7	2.7	313.8	被熱なし 第5次	16-3
43	A-3	磨石	砂岩	9.2	6.6	3.3	270.1	被熱なし 第4次	16-3
44	I-4	磨石	安山岩	9.5	8.7	4.6	466.0	被熱あり 第2次	16-3
45	B-3	磨石	閃緑岩	[7.9]	7.9	3.1	240.8	被熱あり 第4次	16-3
46	B-2	磨石	閃緑岩	[7.7]	[5.1]	3.1	137.7	被熱あり 第4次	16-3
47	B-2	磨石	ホルンフェルス	12.2	10.0	5.0	903.6	被熱なし 第4次	17-2
48	H-3	石皿	砂岩	[14.2]	[13.3]	6.0	1089.7	被熱あり 第2次	17-2
49	H-4	石皿	閃緑岩	[18.9]	[11.2]	5.4	1421.9	被熱なし 第2次	17-2
50	B-2	台石	ホルンフェルス	[22.6]	17.6	9.9	4730.0	被熱なし 第4次	17-2
51	A-2	台石	安山岩	32.8	18.0	15.1	11810.0	被熱なし 第4次	17-3
52	A-2	台石	砂岩	[20.0]	16.1	13.1	5703.0	被熱あり 第4次	17-3



第30図 グリッド出土土器

(6) グリッド出土遺物

縄文時代の遺構や、遺物包含層に含まれない縄文時代の遺物を一括した。分類は、縄文時代遺物包含層出土土器に準ずる。

出土土器

第30図1～27は、出土した土器である。

1～26は第Ⅱ群土器である。

1は第1類土器で、勝坂式末葉の土器である。

2～14、19、23は第2類土器である。そのうち2～14、19は第1種である。2～14はキャリバー形の深鉢形土器で、胴部に磨消懸垂文が施されるものが主体を占める。15は口縁に狭い文様帶を持つ土器である。19は無文の口縁が開く器形である。23は地文のみが施されている。16～18は第2種の連弧文系の深鉢形土器である。20～22は第3種

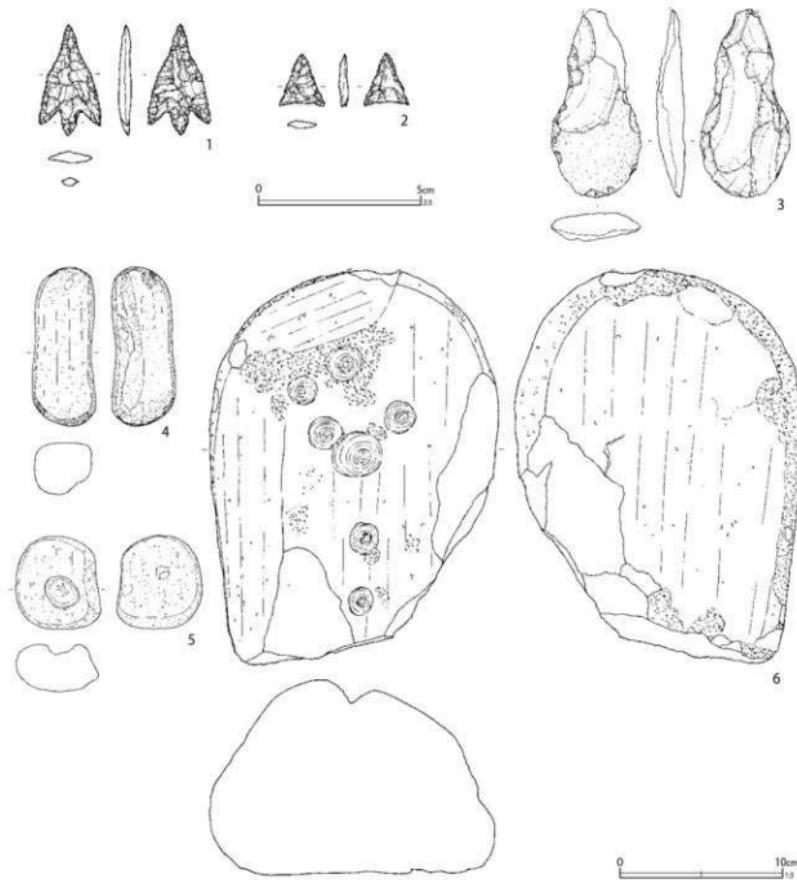
の曾利系の深鉢形土器である。24～26は第4種である。24は浅鉢形土器の口縁部破片、25は鉢形土器の胴部破片、26は壺形土器の胴部破片である。

27は第IV群土器で、後期前葉堀之内1式の深鉢形土器の胴部破片である。

出土石器

第31図1～6は出土した石器である。

1、2は石鏨である。1は大型の有茎石鏨で、有茎の基部には抉りが入る。いわゆる飛行機鏨である。2は無茎石鏨で、基部は曲線的に浅く内湾している。3は擦形の打製石斧である。4、5は磨石類である。5は表面の穴は、自然にあいたものと考えられる。6は台石である。表面には漏斗状の凹部が複数認められる。表裏面ともに、磨面としても使用され、敲打痕も残されている。



第31図 グリッド出土石器

第7表 グリッド出土石器観察表 (第31図)

番号	グリッド	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版
1	F-3	石鏃	チャート	2.4	1.9	0.4	1.6	被熱なし 第5次	17-4
2	E-3	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.25	0.3	被熱なし 第4次	17-4
3	D-2	打製石斧	砂岩	[11.5]	5.5	1.7	92.9	被熱なし 第4次	18-1
4	C-3	磨石	砂岩	9.8	3.9	3.3	187.5	被熱なし 第5次	18-1
5	C-3	磨石	安山岩	5.7	5.3	3.0	114.3	被熱あり 第2次	18-1
6	F-3	台石	砂岩	[23.9]	17.5	11.8	6260.0	被熱なし 第2次	18-2

2 中・近世の遺構と遺物

今回の調査で検出された中・近世の遺構は、掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、土壙12基、溝跡3条、ピット170基である。

このうち、第4・5次調査では、13世紀後半から14世紀前半と考えられる大型の掘立柱建物跡や井戸跡、土壙、溝跡が検出されている。

第4・5次調査区の中央に2間×7間の身舎に南側と東側に廂をもつ南北方向に長い第1号掘立柱建物跡と、それに重複して2間×3間の第2号掘立柱建物跡が、ほぼ軸を揃えて検出された。いずれの柱穴も長径30cm前後で、土壙断面に柱痕跡のみられるものもある。第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の新旧関係については明確でないが、建物の軸を揃えることから、連続して建て替えられたものと考えられる。このほか調査区北側に1間×2間の第3号掘立柱建物跡、調査区南側に2間×2間の東西棟で、東に廂をもつ第4号掘立柱建物跡が検出された。10m前後の間隔をもって、建物の軸方向を揃えて配置されている様から、一連の建物群として把握することができる。

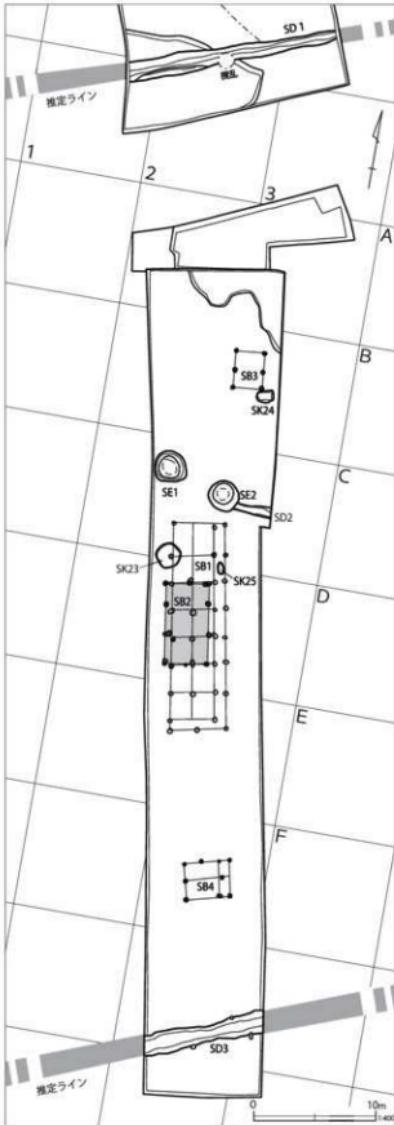
さらに、これらの建物群を挟み込むように、第2次調査区の第1号溝跡と、第4・5次調査区南端の第3号溝跡が、南北約80mの間隔で、東西に走行することが明らかになった。東西方向の広がりは不明であるが、方形に溝で囲まれた屋敷跡の一部である可能性が高い。

このほかに、この区画内からは大型の井戸跡2基と土壙3基もみつかっている。

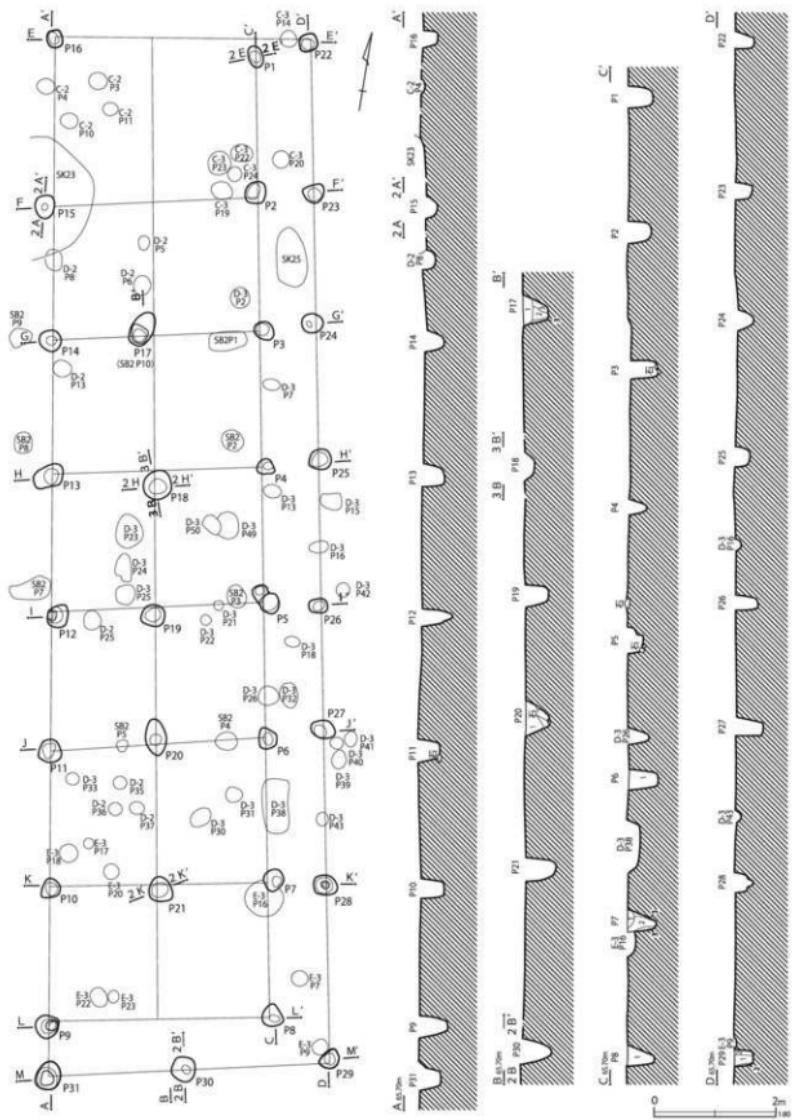
(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第33～35図）

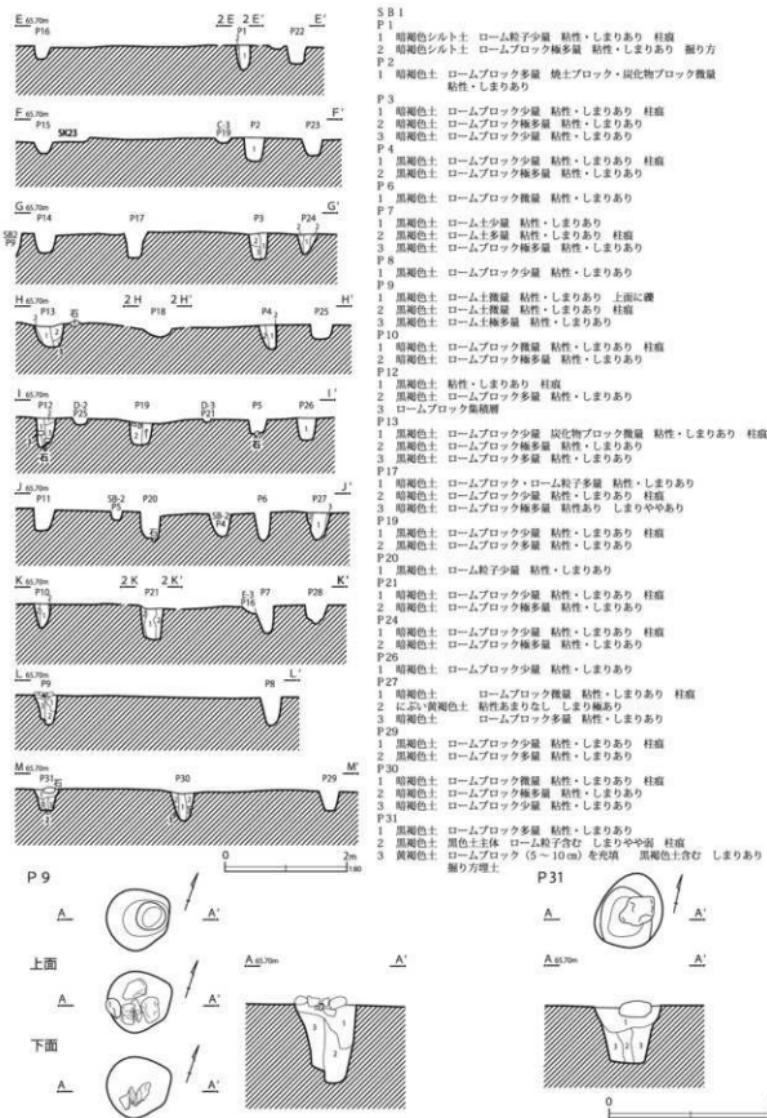
第4・5次調査区中央、C～E-2・3グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡と重複し、P17は第2号掘立柱建物跡のP10と共有している。また、第23号土壙をP15が壊している。さらに、西側は調査区域外となる。



第32図 中・近世の遺構分布図



第33図 第1号掘立柱建物跡（1）



第34図 第1号掘立柱建物跡（2）

形態は、桁行7間、梁行2間で東側と南側に廂を伴うと想定される。柱穴の検出状況から、P1～P21が桁行7間×梁行2間の総柱建物跡の身舎部分と考えられ、P22～P29は東側の廂、P29～P31は南側の廂である。身舎の南側と北側には中間柱を確認することができず、南側では1間、北側では2間の空間が存在し、入口や土間などの構造を想定することができる。

西側の調査区域外まで2m前後の間隔があるため、柱筋の延長部分の柱穴の有無を精查したが、現状では検出できなかった、身舎、あるいは廂が、さらに西側へのびる可能性は残されている。

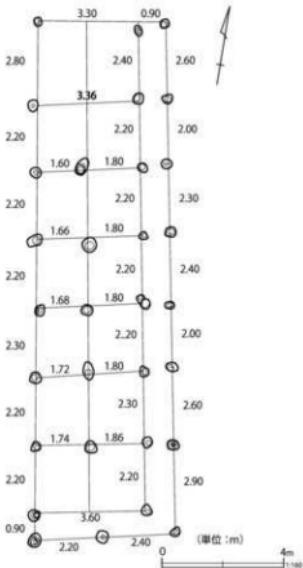
規模は、身舎のみの桁行15.8～16.1m、梁行3.3～3.6m、面積55.6m²である。廂を含めた桁行は16.8～17.0m、梁行4.2～4.6m、面積74.8m²である。主軸方位はN-10°-Wを指す。

柱間寸法の計測値は、第35図の模式図に示した。身舎の柱間寸法は桁行間で2.2～2.8m、梁行間で1.6～1.86mである。身舎と廂までの寸法は、東側で0.9m、南側で0.9mである。

柱穴はP1～P31の計31基である。平面形態は円形ないし梢円形である。規模は、長径50cm、深さ40cm前後のものが多く、ほかの掘立柱建物跡に比べ、一回り大きな柱穴によって占められている。覆土は、柱痕と考えられる暗褐色土、充填土の黒褐色土を基本とする。また、柱穴上面や柱穴内から円礫を出土したものとして、身舎の南西隅のP9と南側廂のP31がある。P9は、拳大の円礫が5個、列状に並べられていた。

確認面は、黄褐色のローム面で柱穴を検出した。ローム土の堆積層は10～20cmと薄く、部分的にローム層の下層にある疊層が確認面まで起伏する箇所もみられた。

遺物は出土していない。このため、遺構の時期は、周囲の遺構から出土した遺物などから、中世（13世紀後半から14世紀にかけて）と考えておきたい。



第35図 第1号掘立柱建物跡模式図

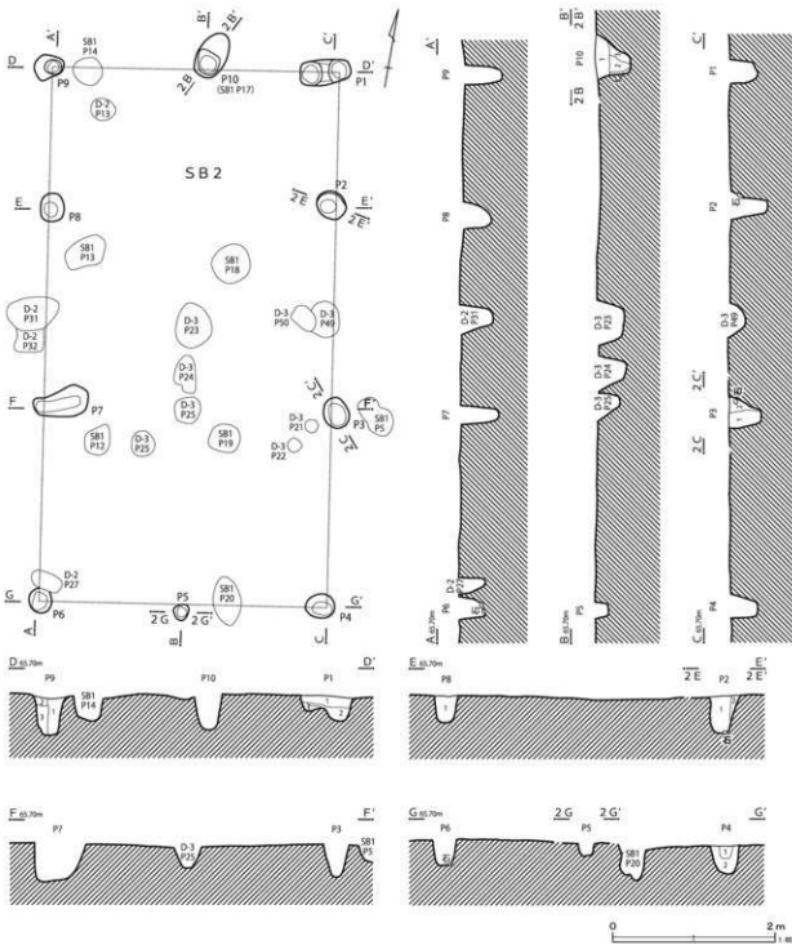
第2号掘立柱建物跡（第36・37図）

第4～5次調査区中央、D-2・3グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡とほぼ主軸を揃え、重複している。第1号掘立柱建物跡との先後関係については明確にし得ないが、第1号掘立柱建物跡と柱穴を共有するP10の配置をみると、本建物跡の方が柱筋にズレが少ないとから、本建物跡が先行する可能性が高い。

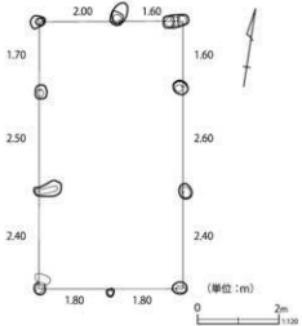
形態は、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。西側が調査区域外となるため、さらにのびる可能性もある。規模は、桁行6.6m、梁行3.6m、面積23.76m²である。南北棟で、主軸方位はN-8°-Wを指す。

柱間寸法の計測値は、第37図に示した。桁行間で1.6～2.6m、梁行間で1.6m～2.0mとやや不揃いである。

柱穴はP1～P10の計10基である。平面形態は



第36図 第2号掘立柱建物跡



第37図 第2号掘立柱建物跡模式図

円形ないし梢円形である。規模は、長径40cm、深さ40cm前後のものが多い。このうち梢円形平面を呈するP1、P7、P10は、柱の抜き取り穴の可能性もある。覆土は暗褐色土、黒褐色土の柱痕と、ロームブロックによる充填土がみられた。柱穴の上面に礫を置くものはなかったが、底面に礫が検出されたものがあった。

遺物は出土していない。このため、遺構の時期は、周囲の遺構から出土した遺物などから、中世（13世紀後半から14世紀にかけて）と考えておきたい。

第3号掘立柱建物跡（第38図）

第4・5次調査区の北側、B-3グリッドに位置する。南東隅のP3は、南側に第24号土壙が接し、建物跡の東側は調査区域外になる。

建物跡の平面形態は、桁行2間、梁行1間の側柱建物跡である。東側は調査区域境に近接しているため、さらに東側に柱筋がひび可能性もある。

規模は、桁行3.0m、梁行2.4m、面積7.2m²である。主軸方位はN-6°-Wを指す。

柱間寸法の計測値は、桁行間で1.5m等間、梁行間は2.4mである。

柱穴はP1～P6の計6基である。平面形態は円形ないし梢円形である。覆土は暗褐色土の柱痕とロームブロックを主体とする充填土を基本とする。また、柱穴上面や柱穴内からは、礫は検出されなかつた。

確認面は、黄褐色のローム面で柱穴を検出した。ローム土の堆積層は10～20cmと薄く、部分的にローム層の下層にある礫層が確認面まで起伏する箇所もみられた。

遺物は出土していない。このため、遺構の時期は、周囲の遺構から出土した遺物などから、中世（13世紀後半から14世紀にかけて）と考えておきたい。

第8表 第1号掘立柱建物跡ピット一覧表（第33、34図）

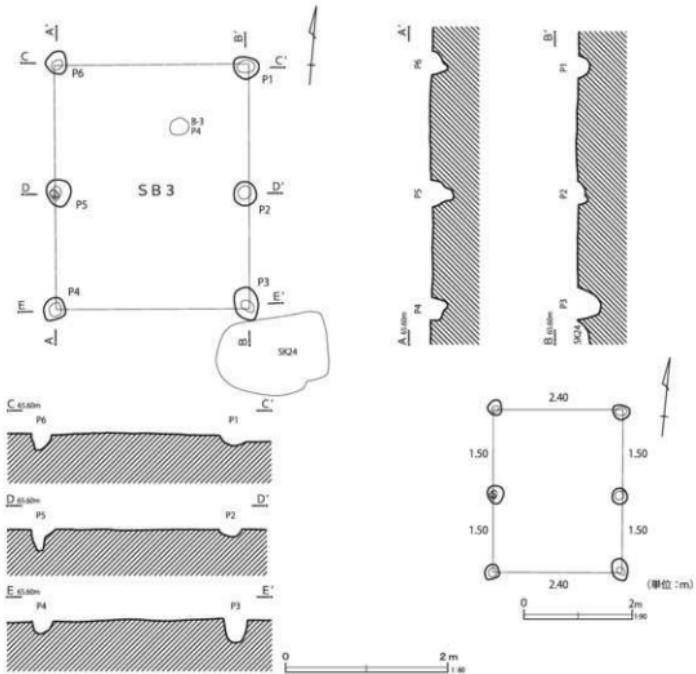
（単位：cm）

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
P1	36	24	42	C-3 P9	P12	40	32	5	D-2 P24	P23	35	30	32	C-3 P17
P2	38	34	39	C-3 P18	P13	53	35	51	D-2 P19	P24	36	32	33	D-3 P6
P3	34	29	45	D-3 P5	P14	36	34	33	D-2 P12	P25	38	35	26	D-3 P14
P4	26	25	41	D-3 P12	P15	38	32	19	D-2 P4	P26	32	24	26	D-3 P17
P5	53	33	30	D-3 P19	P16	29	25	19	C-2 P2	P27	42	31	46	D-3 P28
P6	36	29	49	D-3 P27	P17	59	37	43	D-3 P1 (SB2 P10)	P28	41	33	31	E-3 P44
P7	37	33	48	E-3 P45	P18	49	47	16	D-3 P10	P29	35	27	32	E-3 P10
P8	38	34	48	E-3 P8	P19	37	35	9	D-3 P52	P30	41	38	51	E-3 P26
P9	36	36	49	E-3 P38 上面に礫	P20	60	34	45	D-3 P51	P31	48	38	51	E-3 P25 上面に礫
P10	31	31	49	E-3 P19	P21	42	38	57	E-3 P21					
P11	38	38	38	D-2 P29	P22	30	28	32	C-3 P10					

第9表 第2号掘立柱建物跡ピット一覧表（第36図）

（単位：cm）

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
P1	62	32	34	D-3 P3	P5	19	18	17	D-3 P34	P9	36	32	49	D-2 P11
P2	38	33	45	D-3 P11	P6	29	29	33	D-2 P28	P10	59	37	43	D-3 P1 (SB1 P17)
P3	38	30	40	D-3 P20	P7	68	38	47	D-2 P23					
P4	37	30	34	D-3 P29	P8	34	29	34	D-2 P17					



第38図 第3号掘立柱建物跡

第10表 第3号掘立柱建物跡ピット一覧表（第38図）

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
P1	32	27	14	B-3 P3	P3	43	30	30	B-3 P14	P5	33	30	29	B-3 P5
P2	29	28	14	B-3 P6	P4	27	25	21	B-3 P13	P6	27	25	21	B-3 P2

第4号掘立柱建物跡（第39図）

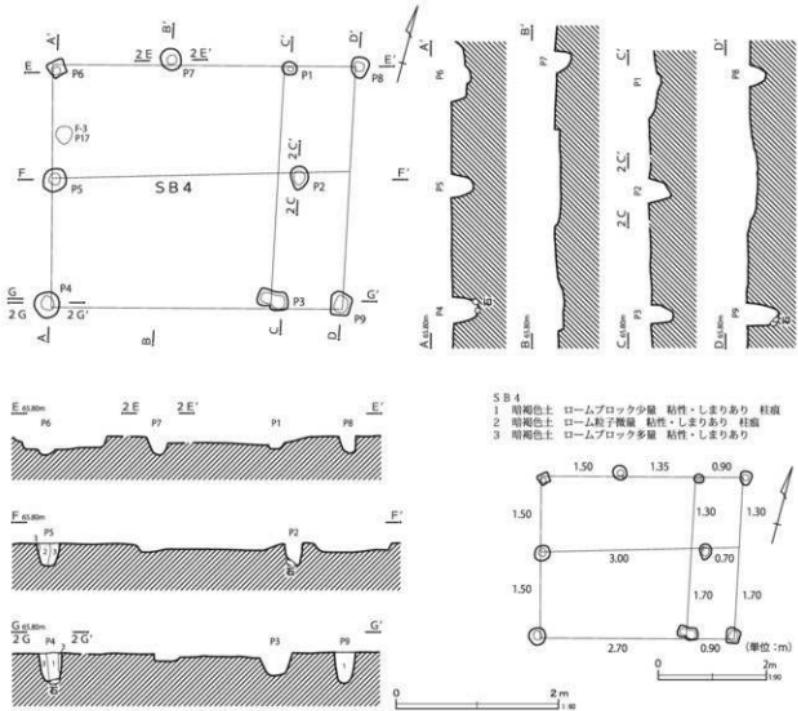
第4・5次調査区の南端、F-3グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡と第3号溝跡のほぼ中間に位置する東西棟である。

形態は、桁行2間、梁行2間の東側に廂をもつ側柱建物跡である。規模は、身舎のみの桁行2.70～2.85m、梁行3.00m、面積は8.325m²である。廂を含めた規模は、桁行3.60～3.75m、梁行3.0m、面積11.025m²である。桁行側にやや歪みがみられ、南側桁行の中間柱をもたないことから、こ

の部分が入口となる可能性も考えられる。主軸方位はN-74°-Eを指し、おおむね第3号溝跡に並行している。

柱間寸法の計測値は、桁行間で1.35～1.50m、梁行間は1.5m等間を基本とするが、東側は1.30m、1.70mと不揃いである。身舎と廂までの寸法は0.9mを基本とする。しかし、東側梁行の中間柱のP2は柱筋からのズレが大きい。

柱穴はP1～P9の計9基である。平面形態は円形ないし梢円形であるが、P6のみは方形に近



第39図 第4号掘立柱建物跡

第11表 第4号掘立柱建物跡ピット一覧表(第39図)

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
P1	19	16	4	F-3 P96 上部削平	P4	32	32	32	F-3 P28	P7	27	24	21	F-3 P45
P2	29	22	28	F-3 P12	P5	31	28	27	F-3 P18	P8	26	21	20	F-3 P47
P3	39	24	28	F-3 P30	P6	21	19	6	F-3 P55 上部削平	P9	29	25	38	F-3 P31

い。規模は、長径30cm、深さ20cm前後のものが多い。覆土は暗褐色土の柱痕とロームブロックを多量に含む充填土を基本とする。柱穴上面に礫を置くものはみられなかったが、底面に礫が検出されたものがあった。

遺物は出土していない。このため、遺構の時期は、周囲の遺構から出土した遺物などから、中世(13世紀後半から14世紀にかけて)と考えておきたい。

(2) 井戸跡

井戸跡は、第4・5次調査区の北寄りから東西に並んだ状態で2基検出された。両者とも直径2.5mを超える大型の井戸跡で、第1、2号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡の間に位置する。水みちを意識した占地状況を窺わせる。出土遺物は少なく、第2号井戸跡から陶器の片口鉢の破片が出土しただけである。時期は13世紀後半で、掘立柱建物跡の年代を決める手がかりでもある。

第1号井戸跡（第40図）

第4・5次調査区北寄り、C-2グリッドに位置する。南へ約3mに第1号掘立柱建物跡、南東へ約2mに第2号井戸跡がある。

形態は、平面形が円形で、断面形が漏斗状である。規模は、確認面で直径2.50m、深さ1.00m程度掘り下げた位置で長径1.20mと細くなり、そのまま円筒状に掘り込まれている。中段に平坦面をもつ逆円錐形の掘り方である。深さは1.30mまで掘り下げを行った。

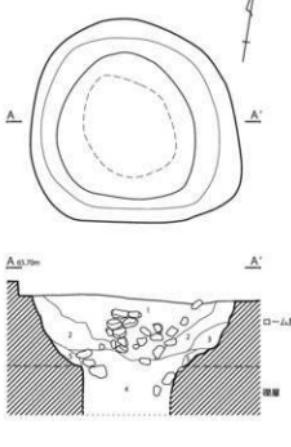
確認面は、黄褐色のローム面で、ローム土の堆積層は0.80m前後と薄く、ローム層の下層にある礫層を掘り抜いている。覆土の状況は、第1層の黒褐色土及び第2層の黄褐色土には大量の小石及

び礫が混在していた。おそらく、井戸枠の構築材として積まれていた石組みが、崩落したものと考えられる。

遺物は、第41図1の窪み石が埋土中から出土した。下半分を欠損する大型の円碟で、表面には部分的に敲打痕がみられる。正面の中央には卵大の丸い穴（窪み）があけられていたと推定される。窪み内は良く擦れて摩滅し、一部オーバーハングしている。裏面にも浅い窪みがみられる。板碑の基部を支える台石などの可能性も考えられるが、用途については不明である。

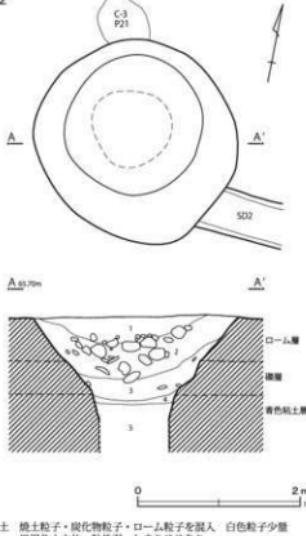
時期は、近接する第2号井戸跡と規模や形状、覆土の特徴が類似することから、中世（13世紀後半から14世紀にかけて）と推定される。

SE 1



- 1 黒褐色土 黒褐色土主体 黄色ロームブロック（1～2cm）・ローム粒子含む
礁土上プロック幾つか 小石・礫を多量に混在 粘性・しまり弱
- 2 黄褐色土 黄色ロームブロック（3～5cm）・ローム粒子多量
礁土上多量の小石・礫を多量に混在 粘性・しまり弱
- 3 黄褐色土 黄色ロームブロック（5～10cm） 主に 黑褐色土を混在
粘性・しまりあり
- 4 黄褐色土 黄色ロームブロック（1～2cm）・ローム粒子多量
黑褐色土を混在 小石・礫を混在 粘性・しまりややあり
- 5 噴褐色土 黄色ロームブロック（5～10cm） 主体 黑褐色土を混在
粘性・しまりあり

SE 2



- 1 黒褐色土 硫土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を混入 白色粒子少
黒褐色土主体 粘性強
しまりややあり
- 2 黑褐色土 小石・礫を多く混在
礁土上 多量の礁土・ローム粒子含む黒褐色土主体
粘性・しまりやや弱
- 3 黑褐色土 ロームブロック（2～5cm）・ローム粒子含む 黑褐色土を混在
粘性・しまりあり
- 4 黄褐色土 黄色粘土土体 黄色ロームブロック（2～3cm）を混在
粘性・しまりあり
- 5 灰褐色土 灰色粘土土体 黄褐色ロームブロック（1cm）・ローム粒子少
粘性・しまりあり

第40図 井戸跡

第2号井戸跡（第40図）

第4・5次調査区中央、C-3グリッドに位置し、北側のC-3グリッドP21を壊す。第2号溝跡は、井戸跡に付属する排水溝の可能性が高い。

本井戸跡は第1号井戸跡と形態や規模、覆土の状況などが類似する。形態は、平面形が円形で、断面形が漏斗状である。規模は、確認面で直径2.50m、深さ1.00m程掘り下げた位置で長径1.00mと細くなり、そのまま円筒状に掘り込まれている。中段に平坦面をもつ逆円錐形の掘り方である。深さは1.30mまで掘り下げを行った。

確認面は、黄褐色のローム面で、ローム土の堆積層は0.60m前後と薄く、下層にある礫層約0.40

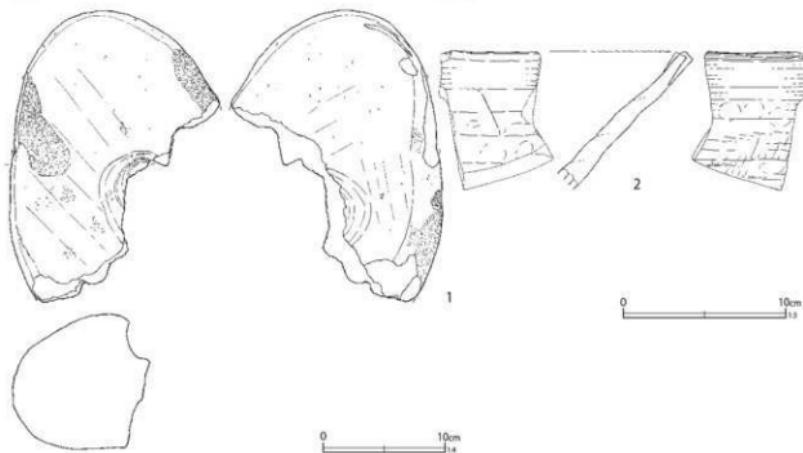
mを掘り抜いて青色粘土層に及んでいる。

覆土の状況は、第2層の黒褐色土中に多量の小石及び礫が混在していた。第5層の灰褐色土の埋土によって埋まり、その後、第3、4層の黒褐色土と黄灰色土が堆積し、井戸枠の構築材として積まれていた石組みが崩落したものと考えられる。

遺物は、上層の第2層中から常滑焼の陶器片口鉢の口縁部破片が出土しただけである。当遺跡における中世の遺構からの遺物の出土点数は、極めて少ないのが特徴といえる。こうした様相が、時代性や遺構群の性格を反映したものなのかは、明確にし得なかった。

第41図2は、口縁部は内外面ともに強くヨコナ

SE1



第41図 井戸跡出土遺物

第12表 第1号井戸跡出土石製品観察表（第41図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
1	石製品	産み石	[23.9]	17.5	11.2	4590.0	砂岩	SE1 板磚の台石の可能性あり	18-3

第13表 第2号井戸跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
2	陶器	片口鉢	—	[8.5]	—	D E K	10	良好	橙	SE2_Na1 常滑 外面ヘラナダ後ナダ消し 内面下位使用による磨耗 6b型式 13c後	18-4

デを施す。体部外面はハケ状のヘラナデ後、ナデ消しをする。内面下位は使用による摩耗が顕著である。酸化焰焼成で、色調は橙色、断面中心部のみ黒い。常滑窯製品編年の片口鉢II類6b型式に比定され、時期は13世紀後半であろう。

井戸跡の時期は、出土遺物から13世紀後半以降に廃棄されたものと考えられる。

(3) 土壙

土壙は、合計12基検出された。第2次調査では調査区北端に集中し、第2～6、8、11、14、15号土壙の9基、第4・5次調査では第23～25号土壙の3基である。

遺構の時期は、遺物が少なく明確ではないが、平面形状や覆土の性状から中・近世と判断した。

第2号土壙（第42図）

第2次調査区北端、B-2グリッドに位置する。平面形は円形と推定される。断面形は皿形で、中心部にピット状の掘り込みを伴う。南側半分を検出したが、北半分は調査区域外にのびる。長軸方位はN-87°-Wを指す。規模は長径1.05m、短径0.55m以上、深さ0.41mである。覆土は黒褐色土と暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第3号土壙（第42図）

第2次調査区北端、B-2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は皿形である。長軸方位はN-82°-Wを指す。規模は長径0.98m、短径0.84m、深さ0.20mである。覆土は黒褐色土と暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第4号土壙（第42図）

第2次調査区北端、B-2グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は皿形である。長軸方位はN-2°-Wを指す。規模は長径0.71m、短径0.62m、深さ0.15mである。覆土は黒褐色土と暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第5号土壙（第42図）

第2次調査区北端、B-2グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は浅い楕形である。規模は径0.51m、深さ0.17mである。覆土は黒褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第6号土壙（第42図）

第2次調査区北端、B-2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い楕形である。長軸方位はN-63°-Wを指す。規模は長径0.57m、短径0.42m、深さ0.21mである。覆土は暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第8号土壙（第42図）

第2次調査区北端、C-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い皿形である。長軸方位はN-78°-Eを指す。規模は長径0.76m、短径0.57m、深さ0.10mである。覆土は暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第11号土壙（第42図）

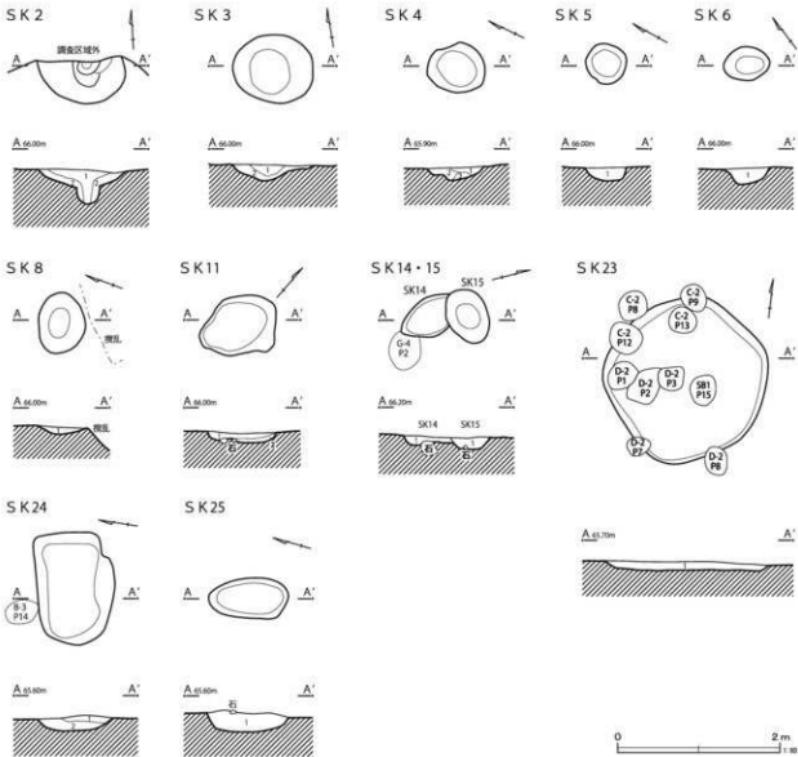
第2次調査区南側、G-3グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿形である。長軸方位はN-21°-Eを指す。規模は長径1.01m、短径0.72m、深さ0.13mである。覆土は暗褐色土と底面に明褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第14号土壙（第42図）

第2次調査区南側、G-4グリッドに位置する。北側の第15号土壙に壊され、南側の縄文時代のピットを壊している。平面形は楕円形で、断面形は浅い皿形である。長軸方位はN-8°-Wを指す。規模は長径0.73m以上、短径0.48m、深さ0.13mである。覆土は底面に黄褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。



SK 2

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 しまりあり
2 明褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック (5cm) 少量 しまりあり

SK 3

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量 しまりあり
2 明褐色土 ローム粒子 (3~5cm) 極多量

SK 4

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 しまりあり
2 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (3cm) 微量
3 明褐色土 ローム粒子多量 しまりあり

SK 5

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (3~5cm) 微量 しまりあり
2 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック (5cm) 少量

SK 6

- 1 明褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック (3~5cm) 微量 しまりなし
2 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (5~10cm) 主体 ローム粒子少量 粘性あり しまりやや弱

SK 11

- 1 明褐色土 ローム粒子 (1~2cm) 中量 粘性・しまりあり
2 明褐色土 ローム粒子 (1~2cm) 多量 粘性・しまりあり

SK 14 + 15

- 1 黒褐色土 小石 (1~2cm) 少量 粘性あり しまり強
2 黒褐色土 小石 (1~2cm) 中量 炭化物粒子少量 粘性あり しまりやや強
3 明褐色土 ロームブロック (5cm) 少量 しまりあり

SK 23

- 1 黒褐色土 黒褐色土主体 壤土粒子含む ローム粒子を混在 しまり細かい 小石少量 粘性・しまり弱
2 黄褐色土 ロームブロック (5~10cm) 主体 ローム粒子含む 粘性あり しまりやや弱

SK 24

- 1 黑褐色土 黑褐色土主体 ローム粒子を混在 しまり・粘性弱
2 黑褐色土 ロームブロック (5~10cm) 主体 ローム粒子含む 粘性あり しまりやや弱

SK 25

- 1 黑褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量 烧土ブロック微量 粘性・しまりあり

第42図 土壌

第14表 土壌一覧表（第42図）

第2次調査

遺構名	グリッド	平面形	方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	帰属時期	備考
SK 2	B-2	円形	N-87° -W	1.05	[0.55]	0.41	中・近世	
SK 3	B-2	楕円形	N-82° -W	0.98	0.84	0.20	中・近世	
SK 4	B-2	不整楕円形	N-2° -W	0.71	0.62	0.15	中・近世	
SK 5	B-2	円形	N-0°	0.51	0.51	0.17	中・近世	
SK 6	B-2	楕円形	N-63° -W	0.57	0.42	0.21	中・近世	
SK 8	C-3	楕円形	N-78° -E	0.76	0.57	0.10	中・近世	
SK11	G-3	不整楕円形	N-21° -E	1.01	0.72	0.13	中・近世	
SK14	G-4	楕円形	N-8° -W	[0.73]	0.48	0.13	中・近世	SK15より古 G-4 P2と重複
SK15	G-4	楕円形	N-79° -E	0.70	0.49	0.17	中・近世	SK14より新

第4・5次調査

遺構名	グリッド	平面形	方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	帰属時期	備考
SK23	C-D-2	円形	N-7° -E	2.09	1.99	0.10	中・近世	SBIP15 C-2 P8, 12, 13 D-2 P1 ~ 3, 7と重複 C-2 P9より古、D-2 P8より古
SK24	B-3	隅丸長方形	N-75° -E	1.39	0.82	0.19	中・近世	
SK25	C-D-3	楕円形	N-18° -W	0.98	0.49	0.28	中・近世	SB1の関連施設か

第15号土壌（第42図）

第2次調査区南側、G-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。長軸方位はN-79° -Eを指す。規模は長径0.70m、短径0.49m、深さ0.17mである。覆土は暗黄褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第23号土壌（第42図）

第4・5次調査区北寄り、C・D-2グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は浅い皿形である。長軸方位はN-7° -Eを指す。規模は長径2.09m、短径1.99m、深さ0.10mである。覆土は小石混じりの黒褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第24号土壌（第42図）

第4・5次調査区北端、B-3グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は浅い皿形である。長軸方位はN-75° -Eを指す。規模は長軸1.39m、短軸0.82m、深さ0.19mである。覆土は黒褐色土と黄褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第25号土壌（第42図）

第4・5次調査区北端、C・D-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は楕形であ

る。長軸方位はN-18° -Wを指す。規模は長径0.98m、短径0.49m、深さ0.28mである。覆土は焼土ブロック混じりのしまりのある黒褐色土が堆積していた。第1号掘立柱建物跡の北東コーナー部分で検出されていることから、建物跡と関連する構造の可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

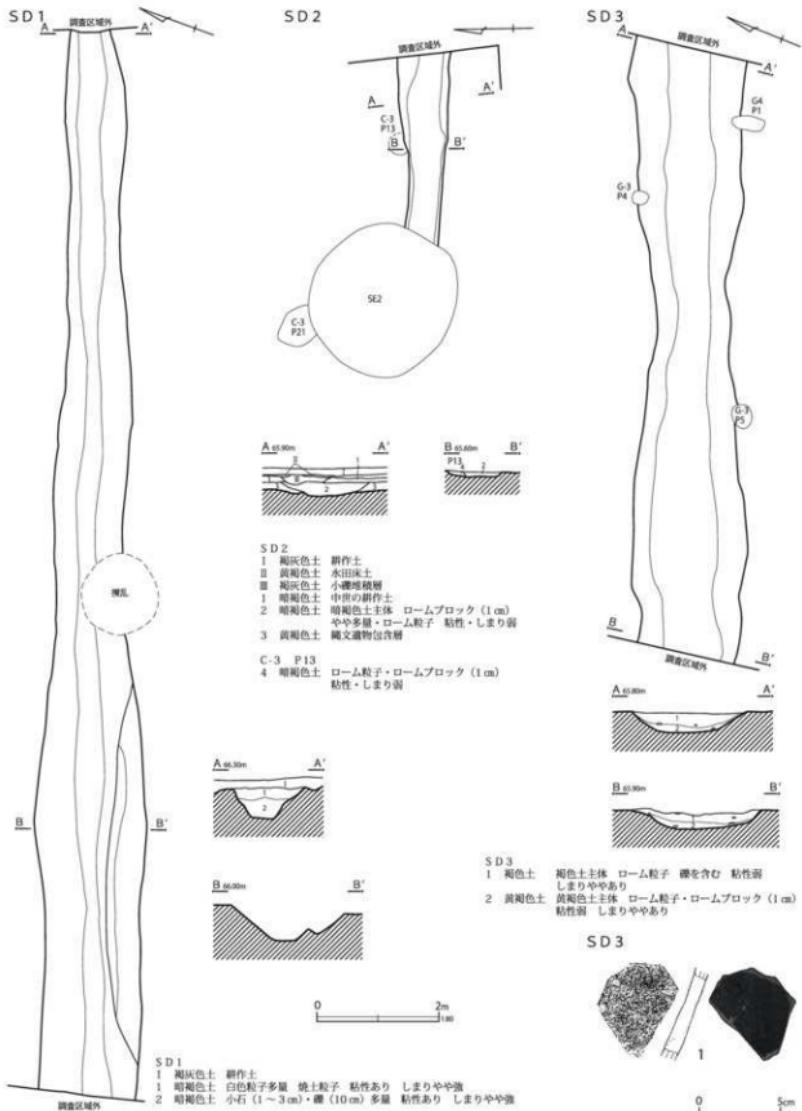
(4) 溝跡

溝跡は、合計3条検出された。第1号溝跡は第2次調査区の南側、第3号溝跡は第4・5次調査区の南側で検出された。両溝跡は、第4・5次調査区中央で検出された第1、2号掘立柱建物跡や第1、2号井戸跡などを挟んで対極的な位置にある。両溝の距離は約80m、第1号溝跡が確認された標高は65.65m、第3号溝跡が確認された標高は65.45mで、比高差は0.20mである。

このほかに第2号溝跡が検出されている。第2号井戸跡に伴う排水溝の可能性も考えられる。

第1号溝跡（第43図）

第2次調査区北側調査区の南端、G-4・5、H-3・4グリッドに位置する。約80mの距離を隔てた第4・5次調査区の南端で検出された第3号溝跡が並走する。走行方向はN-70° -Eを指



第43図 溝跡・出土遺物

し、直線的にのびている。

規模は、検出された長さ17.65m、西側の幅1.83m、東側の幅0.82m、深さ0.48~0.58mである。西側が幅広になっているのは、溝の掘り直しがあったと考えられ、断面形はB-B'で図示したように二重になっている。溝跡底面の標高は、西側で65.20m、東側で65.45m、東から西に向かって傾斜をもつ。断面形は逆台形である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、第2層には小石や礫が多く混在していた。

遺物は出土していない。

第2号溝跡（第43図）

第4・5次調査区北端、C-3グリッドに位置する。第2号井戸跡から東にのびる溝跡で、井戸跡に関連する施設として排水機能を考慮したのであろう。その場での洗い作業を想像させるものである。走行方向はN-87°-Wを指す。

規模は、検出された長さ3.14m、井戸側の幅0.56m、東側調査区域外寄りの幅0.84m、深さ0.08m~0.24mである。溝跡底面の標高は、西側で65.28m、東側で65.23m、西から東に向けてわずかな傾斜をもつ。断面形は皿形である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、縄文時代の遺物包含層（第3層）を切り込んで掘り込まれていた。

第15表 第3号溝跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	甕	—	[5.6]	—	H I K	5	良好	黄灰	SD3 常滑 外面自然釉	12~13c

（5）ピット

掘立柱建物跡を構成する柱穴を除く、中・近世のピットを170基検出した。

その内訳は、第2次調査区では北側調査区北端のB-2グリッドに9基、C-2グリッドに1基の計10基である。そして第4・5次調査区では、北からA-2グリッド4基、B-2グリッド12基、C-2グリッド12基、C-3グリッド18基、D-2グリッド21基、D-3グリッド31基、E-2グ

遺物は出土していない。

第3号溝跡（第43図）

第4・5次調査区南端、G-3・4、H-3グリッドに位置する。約80mの距離を隔てた第2次北側調査区南端から検出された第1号溝跡と並走し、掘立柱建物群を画する。走行方向はN-68°-Eを指し、直線的に調査区域外にのびている。

規模は、検出された長さ10.22m、東側の幅1.92m、西側の幅1.62m、深さ0.32~0.35mである。溝跡底面の標高は、西側で65.26m、東側で65.20m、西から東に向かってわずかな傾斜をもつ。断面形は皿形である。

本溝跡が検出された確認面は、ローム土の堆積がほとんどみられず、礫が露出する。溝跡はこの疊層を掘り込んで掘削されている。このため、溝跡の底面は礫によりゴツゴツした状況である。

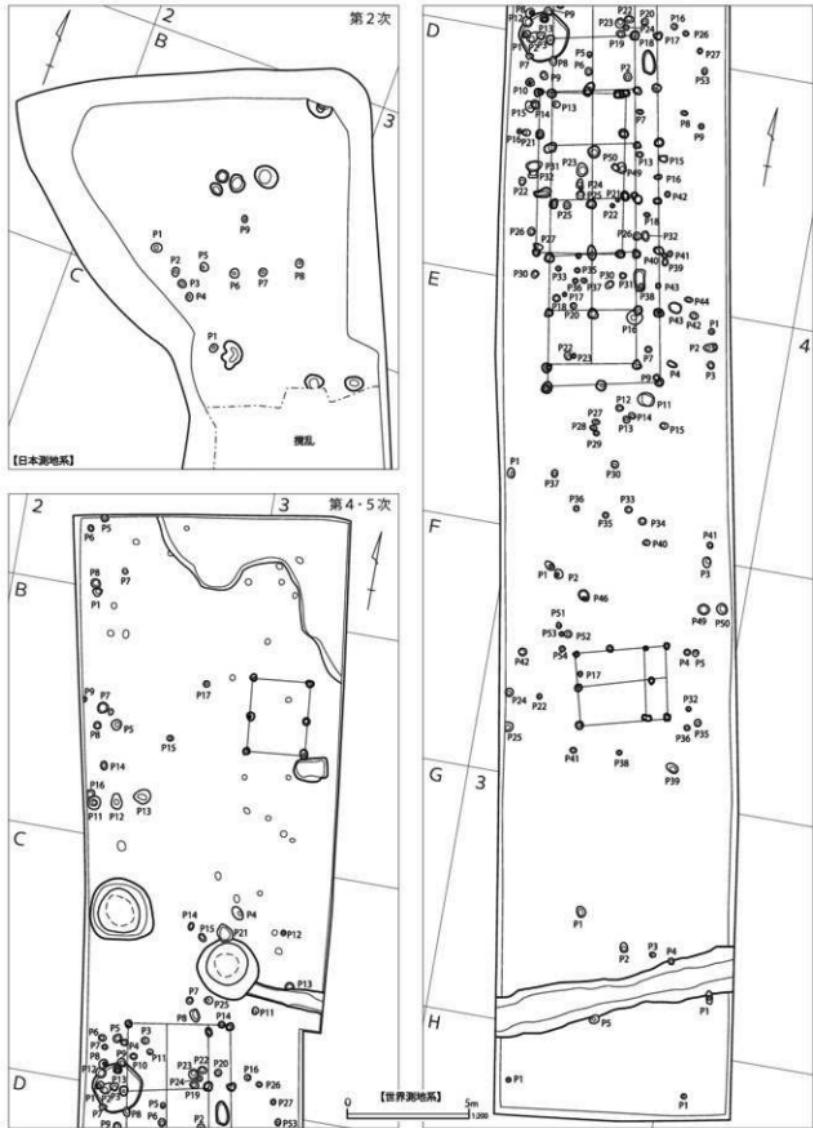
覆土は、褐色土を主体とし、小石や礫を混在し第2層は黄褐色土が堆積していた。

出土遺物は、覆土中から陶器甕の胴部破片が検出され、溝跡の時期は中世と考えられる。

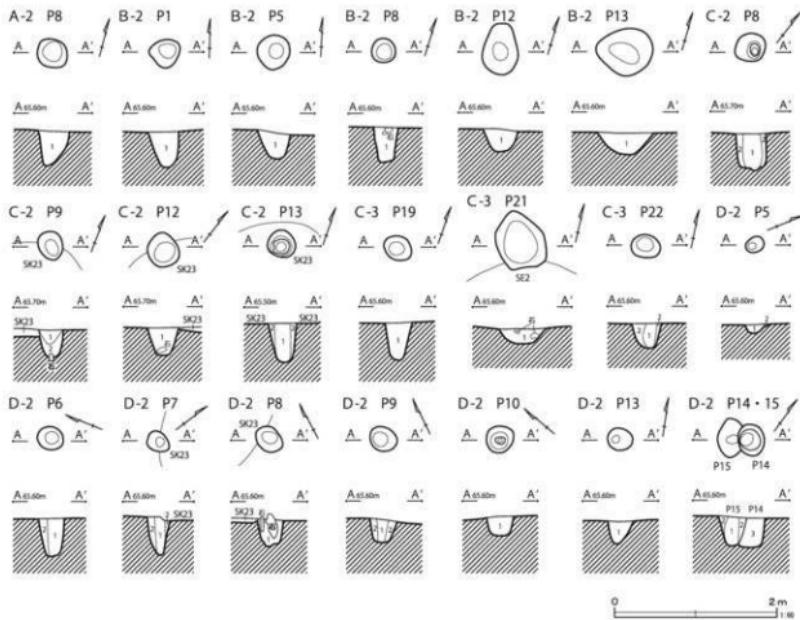
第43図1の陶器甕の胴部片が出土している。外面は自然釉が厚く掛かる。内面はナデを施す。還元焰焼成で、胎土は緻密である。常滑の製品で、時期は12~13世紀に位置づけられる。

リッド1基、E-3グリッド30基、F-3グリッド23基、G-3グリッド5基、G-4、H-3・4グリッドの各1基で、計160基を数える。

ピットの分布傾向は、調査区の大半が搅乱されていた第2次調査の北側調査区では、北側に偏った分布を示すことはしかたないものの、第4・5次調査区では第1・2号掘立柱建物跡周辺のC-2・3グリッド、D-2・3グリッド、E-3、F-3グリッドに多数近くのピットが集中してい



第44図 ピット分布図



A-2 P8

1 黒褐色土 ローム土主体 ロームブロック (1~3cm)・ローム粒子含む
粘性・しまり弱

B-2 P1

1 黒褐色土 ローム土主体 ロームブロック (1~3cm)・ローム粒子含む
粘性・しまり弱

B-2 P5

1 黒褐色土 ローム粒子多量

B-2 P8

1 黒褐色土 ロームブロック含む

B-2 P12

1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量

B-2 P13

1 黒褐色土 ロームブロック極少量

C-2 P8

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-2 P9

1 ロームブロック集積層

2 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-2 P12

1 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-2 P13

1 喻褐色シルト土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色シルト土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-2 P19

1 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-3 P21

1 喻褐色シルト土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

C-3 P22

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

D-2 P5

1 喻褐色土 ロームブロック微量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック微量 粘性・しまりあり

D-2 P6

1 喻褐色土 ロームブロック・炭化物ブロック微量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック多量 炭化物ブロック微量 粘性・しまりあり

D-2 P7

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック多量 炭化物粒子微量 粘性・しまりあり

D-2 P8

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり

2 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

D-2 P9

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロック多量 粘性・しまりあり

D-2 P10

1 喻褐色土 ロームブロック極少量 粘性・しまりあり

D-2 P13

1 喻褐色土 ロームブロック極多量 粘性・しまりあり

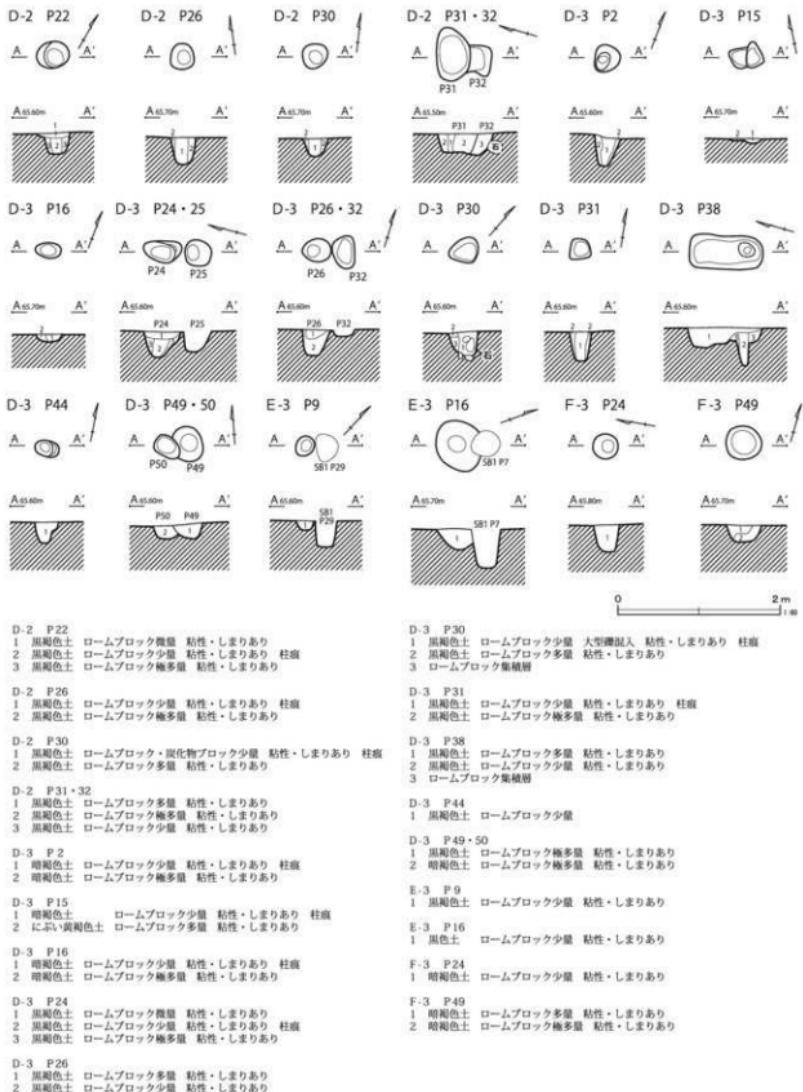
D-2 P14 + 15

1 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり 柱痕

2 喻褐色土 ロームブロックやや多量 粘性・しまりあり

3 喻褐色土 ロームブロック少量 粘性・しまりあり

第45図 ピット (1)



第46図 ピット (2)

第16表 ピット一覧表（第44～46図）

第2次調査

位置	番号	帰属時期	大きさ (cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
B-2	P1	中・近世	21	20	15	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P2	中・近世	21	18	11	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P3	中・近世	23	18	15	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P4	中・近世	20	18	15	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P5	中・近世	25	23	10	黒褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P6	中・近世	22	20	13	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P7	中・近世	19	17	7	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P8	中・近世	28	20	7	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
	P9	中・近世	20	19	8	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
C-2	P1	中・近世	23	20	11	暗褐色土	ローム粒・ブロック多量		
F-3	P1	SJ1 P5	60	[32]	28	褐色土	ローム粒	あり	あり
	P2	SJ1 P3	40	37	15	黄褐色土	黒色土・ブロック少量	あり	やや弱
G-3	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表
G-4	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表
I-4	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表

第4・5次調査

位置	番号	帰属時期	大きさ (cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
A-2	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P3	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P4	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P5	中・近世	28	25	13	にがい黄褐色土	ローム粒少量	あり	弱い
	P6	中・近世	24	18	13	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P7	中・近世	25	20	15	にがい黄褐色土	ローム粒少量	あり	強い
	P8	中・近世	40	35	45	第45図			
	P9	中・近世	38	33	45	第45図			
A-3	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P3	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P4	縄文	—	—	—				第14図、第5表
B-2	P1	中・近世	—	—	—				第14図、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P3	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P4	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P5	中・近世	42	41	36	第45図			
	P6	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P7	中・近世	44	41	13	黒褐色土	ローム粒多量	あり	なし
	P8	中・近世	30	29	44	第45図			上面に機
	P9	中・近世	[15]	23	19	黒褐色土	混入物なし	あり	あり
	P10	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P11	中・近世	51	50	57	第47図			上面に機 P16より古
	P12	中・近世	63	44	29	第45図			
	P13	中・近世	69	58	27	第45図			人為的な理土
	P14	中・近世	35	26	9	暗褐色土	混入物なし	あり	極強
	P15	中・近世	21	18	13	—			
	P16	中・近世	[34]	32	7	第47図			P11より新
	P17	中・近世	25	23	27	黒褐色土	ロームブロック・炭化物粒少量	あり	あり 陶器片口鉢 第47図 1
B-3	P1	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P2	SB3 P6	—	—	—	黒褐色土	ローム粒多量・ブロック少量	あり	弱い 第38図
	P3	SB3 P1	—	—	—	黒褐色土	ローム粒多量・ブロック少量		第38図
	P4	縄文	—	—	—				第14図、第5表
	P5	SB3 P5	—	—	—	暗褐色土	ロームブロック多量	あり	あり 第38図
	P6	SB3 P2	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	弱い 第38図

位置	番号	帰属時期	大きさ (cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
B-3	P7	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P8	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P9	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P10	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P11	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P12	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P13	SB3 P4	—	—	—				第38回
	P14	SB3 P3	—	—	—				第38回
	P1	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P2	SB1 P16	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり 第33、34回
C-2	P3	中・近世	28	25	20	暗褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P4	中・近世	31	25	19	黒褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P5	中・近世	35	31	28	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P6	中・近世	31	25	30	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P7	中・近世	23	20	10	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり
	P8	中・近世	40	35	47	第45回			柱痕
	P9	中・近世	35	30	33	第45回			SK23より新
	P10	中・近世	27	23	11	暗褐色土	ローム粒微量	あり	あり
	P11	中・近世	25	20	24	黒褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P12	中・近世	42	36	34	第45回			底面に櫻 SK23と重複
	P13	中・近世	35	32	48	第45回			柱痕 SK23と重複
	P14	中・近世	29	18	10	褐色土	混入物なし	あり	あり
C-3	P1	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P2	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P3	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P4	中・近世	57	33	26	黒褐色土	ローム粒多量	あり	弱い
	P5	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P6	縄文	—	—	—				第14回、第5表
	P7	中・近世	25	24	12	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P8	中・近世	48	31	18	黒褐色土	ローム粒多量	あり	あり
	P9	SB1 P1	—	—	—	第33、34回			柱痕
	P10	SB1 P22	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり 第33、34回
	P11	中・近世	32	25	14	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P12	中・近世	21	19	14	暗褐色土	ローム・黒褐色ブロック少量	あり	あり
	P13	中・近世	[30]	[15]	9	第43回			SD2より古
	P14	中・近世	28	24	7	—			
	P15	中・近世	34	25	10	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P16	中・近世	26	21	29	黒褐色土	混入物なし	あり	あり
	P17	SB1 P23	—	—	—				柱痕 第33、34回
	P18	SB1 P2	—	—	—	第33、34回			柱痕
D-2	P19	中・近世	37	30	49	第45回			柱痕
	P20	中・近世	27	27	22	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P21	中・近世	[66]	59	19	第45回			SE2と重複
	P22	中・近世	37	28	31	第45回			柱痕
	P23	中・近世	39	36	17	にぶい 黒褐色土	ロームブロック少量	あり	極強 P24より新
	P24	中・近世	24	23	10	にぶい 黑褐色土	混入物なし	あり	あり P23より古
	P25	中・近世	30	26	18	にぶい 黑褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P26	中・近世	22	22	13	にぶい 黑褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P27	中・近世	23	20	5	にぶい 黑褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P1	中・近世	39	[31]	23	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり
D-2	P2	中・近世	53	34	12	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり P3より古
	P3	中・近世	32	29	20	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり P2より新
	P4	SB1 P15	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり 第33、34回
	P5	中・近世	24	18	11	第45回			柱痕
	P6	中・近世	33	28	48	第45回			柱痕
	P7	中・近世	30	24	46	第45回			柱痕 SK23と重複
	P8	中・近世	35	28	35	第45回			柱痕 SK23より新
	P9	中・近世	34	29	31	第45回			柱痕

位置	番号	帰属時期	大きさ (cm)			土層説明				備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	しまり	
D-2	P10	中・近世	35	33	25	第45図				
	P11	SB2 P9	—	—	—	第36図				柱痕
	P12	SB1 P14	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり	第33、34図
	P13	中・近世	31	27	28	第45図				
	P14	中・近世	40	32	36	第45図				P15より古
	P15	中・近世	48	[25]	38	第45図				柱痕、P14より新
	P16	中・近世	18	17	8	—				柱痕
	P17	SB2 P8	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり	柱痕 第36図
	P18	欠番								
	P19	SB1 P13	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P20	欠番								
	P21	中・近世	31	27	40	にぶい黄褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり	
	P22	中・近世	31	28	36	第46図				柱痕
	P23	SB2 P7	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり	第36図
	P24	SB1 P12	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P25	中・近世	32	28	12	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	あり	柱痕
	P26	中・近世	32	29	35	第46図				柱痕
	P27	中・近世	39	21	33	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり	SB2 P6と重複
	P28	SB2 P6	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり	P27と重複 第36図
	P29	SB1 P11	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量・炭化物粒	あり	あり	第33、34図
	P30	中・近世	33	29	23	第46図				柱痕
	P31	中・近世	65	41	41	第46図				柱痕 P32より新
	P32	中・近世	[26]	37	27	第46図				柱痕 P31より古
D-3	P1	SB1 P17・SB2 P10共有			第33、34図					柱痕
	P2	中・近世	35	32	41	第46図				柱痕
	P3	SB2 P1	—	—	—	第36図				
	P4	欠番								
	P5	SB1 P3	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P6	SB1 P24	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P7	中・近世	23	17	13	黒褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり	
	P8	中・近世	23	17	26	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	あり	
	P9	中・近世	24	21	16	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	あり	
	P10	SB1 P18	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化物粒	あり	あり	第33、34図
	P11	SB2 P2	—	—	—	第36図				柱痕
	P12	SB1 P4	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P13	中・近世	27	20	19	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	あり	
	P14	SB1 P25	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化物粒	あり	あり	第33、34図
	P15	中・近世	36	29	9	第46図				柱痕
	P16	中・近世	30	19	9	第46図				柱痕
	P17	SB1 P26	—	—	—	第33、34図				
	P18	中・近世	20	15	8	黒褐色土	ローム粒多量	あり	あり	
	P19	SB1 P5	—	—	—	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり	第33、34図
	P20	SB2 P3	—	—	—	第36図				柱痕
	P21	中・近世	16	16	12	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり	
	P22	中・近世	17	15	8	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり	
	P23	中・近世	55	45	33	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化物粒	あり	あり	
	P24	中・近世	46	26	35	第46図				柱痕
	P25	中・近世	33	32	26	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化物粒	あり	あり	
	P26	中・近世	37	28	34	第46図				
	P27	SB1 P6	—	—	—	第33、34図				
	P28	SB1 P27	—	—	—	第33、34図				柱痕
	P29	SB2 P4	—	—	—	第36図				柱痕
	P30	中・近世	38	31	31	第46図				柱痕 覆土に縫を含む
	P31	中・近世	25	24	36	第46図				柱痕
	P32	中・近世	40	28	9	にぶい黄褐色土	混入物なし	あり	極強	
	P33	中・近世	19	17	8	にぶい黄褐色土	マンガン斑多量	あり	極強	
	P34	SB2 P5	—	—	—	にぶい黄褐色土	マンガン斑多量	あり	極強	第36図
	P35	中・近世	20	17	14	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	極強	

位置	番号	層属時期	大きさ (cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
B-3	P36	中・近世	18	11	6	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	極強 P37と重複
	P37	中・近世	21	20	13	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	あり	あり P36と重複
	P38	中・近世	90	42	47	第46図			柱痕
	P39	中・近世	32	21	16	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P40	中・近世	18	16	11	にぶい黄褐色土	ロームブロック微量	あり	極強 P41より古
	P41	中・近世	26	20	8	黒褐色土	ロームブロック微量	あり	あり P40より新
	P42	中・近世	22	18	15	にぶい黄褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P43	中・近世	21	19	8	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり
	P44	中・近世	29	19	26	第46図			
	P45	欠番							
	P46	欠番							
	P47	欠番							
	P48	欠番							
	P49	中・近世	44	[32]	22	第46図			P50より新
	P50	中・近世	33	23	20	第46図			P49より古
	P51	SB1 P20	—	—	—	第33、34図			
	P52	SB1 P19	—	—	—	第33、34図			柱痕
	P53	中・近世	25	18	14	—			
E-2	P1	中・近世	43	27	13	暗褐色	ロームブロック少量	あり	あり
E-3	P1	中・近世	21	18	8	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P2	中・近世	55	33	20	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P3	中・近世	31	27	31	黒褐色土	ローム粒少量・炭化物粒微量	あり	あり
	P4	中・近世	43	24	12	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P5	欠番							
	P6	欠番							
	P7	中・近世	26	25	14	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	SB1 P8	—	—	—	—	第33、34図			
	P9	中・近世	26	23	14	第46図			
	P10	SB1 P29	—	—	—	第33、34図			柱痕
	P11	中・近世	67	53	14	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P12	中・近世	31	24	14	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P13	中・近世	27	20	11	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P14	中・近世	31	20	19	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P15	中・近世	31	23	21	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P16	中・近世	66	58	23	第46図			柱痕 SB1 P7より古
	P17	中・近世	13	12	17	黒褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P18	中・近世	28	26	15	暗褐色土	ローム粒少量	あり	あり
	P19	SB1 P10	—	—	—	第33、34図			柱痕
	P20	中・近世	24	21	24	黒褐色土	ローム粒少量	あり	あり
	P21	SB1 P21	—	—	—	第33、34図			柱痕
	P22	中・近世	34	22	8	褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P23	中・近世	18	15	5	褐色土	混入物なし	あり	あり
	P24	欠番							
	P25	SB1 P31	—	—	—	第33、34図			柱痕 上面に繩
	P26	SB1 P30	—	—	—	第33、34図			柱痕
	P27	中・近世	26	20	11	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P28	中・近世	22	17	8	褐色土	混入物なし	あり	あり
	P29	中・近世	22	18	10	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P30	中・近世	28	25	28	暗褐色土	砂質 混入物なし	なし	あり
	P31	欠番							
	P32	欠番							
	P33	中・近世	28	25	18	暗褐色土	砂質 混入物なし	あり	あり
	P34	中・近世	32	27	18	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P35	中・近世	22	20	15	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P36	中・近世	22	22	25	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P37	中・近世	31	25	29	暗褐色土	砂質 混入物なし	なし	あり
	SB1 P9	—	—	—	—	第33、34図			柱痕 上面に繩
	P39	欠番							

位置	番号	揭露時期	大きさ (cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
E-3	P40	中・近世	27	21	15	灰黄褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P41	中・近世	27	22	28	暗褐色土	炭化物粒微量	あり	あり
	P42	中・近世	28	26	24	—			
	P43	中・近世	51	44	13	—			
	P44	SB1 P28	—	—	—				第33、34図
	P45	SB1 P7	—	—	—				柱底 P16より新
F-3	P1	中・近世	42	26	14	にぶい黄褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P2	中・近世	37	33	24	暗褐色土	ロームブロック微量	あり	あり 上面に雜
	P3	中・近世	43	31	36	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P4	中・近世	23	23	14	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P5	中・近世	29	25	36	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P6	欠番							
	P7	欠番							
	P8	欠番							
	P9	欠番							
	P10	欠番							
	P11	欠番							
	P12	SB4 P2	—	—	—	黒褐色土	ローム粒・焼土粒微量	あり	あり 第39図
	P13	欠番							
	P14	欠番							
	P15	欠番							
	P16	欠番							
	P17	中・近世	22	20	10	黒褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P18	SB4 P5	—	—	—	第39図			柱底
	P19	欠番							
	P20	欠番							
	P21	欠番							
	P22	中・近世	18	17	12	暗褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P23	欠番							
	P24	中・近世	31	31	33	第46図			
	P25	中・近世	44	35	12	—			
	P26	欠番							
	P27	欠番							
	P28	SB4 P4	—	—	—	第39図			柱底
	P29	欠番							
	P30	SB4 P3	—	—	—	暗褐色土	ロームブロック多量	あり	あり 第39図
	P31	SB4 P9	—	—	—	第39図			
	P32	中・近世	18	16	15	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり 浅間A軽石を含む
	P33	欠番							
	P34	欠番							
	P35	中・近世	29	26	29	暗褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P36	中・近世	22	20	15	暗褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P37	欠番							
	P38	中・近世	19	19	13	暗褐色土	ロームブロック微量	あり	あり
	P39	中・近世	51	31	15	暗褐色土	ロームブロック極多量	あり	あり
	P40	欠番							
	P41	中・近世	24	21	18	黒褐色土	ロームブロックや多量	あり	あり
	P42	中・近世	31	28	25	黒褐色土	ロームブロック少量	あり	あり
	P43	欠番							
	P44	欠番							
	P45	SB4 P7	—	—	—	暗褐色土	ロームブロック微量	あり	あり 第39図
	P46	中・近世	51	35	16	—			
	P47	SB4 P8	—	—	—	暗褐色土	ロームブロック・炭化物粒少量	あり	あり 第39図
	P48	欠番							
	P49	中・近世	44	41	21	第46図			
	P50	中・近世	48	36	30	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり
	P51	中・近世	25	16	18	黒褐色土	ローム粒微量	あり	あり
	P52	中・近世	28	27	24	黒褐色土	ロームブロック多量	あり	あり

位置	番号	帰属時期	大きさ(cm)			土層説明			備考
			長径	短径	深さ	色調	混入物	粘性	
F-3	P53	中・近世	18	16	9	—			
	P54	中・近世	22	20	12	—			
	P55	SB4 P6	—	—	—	黒褐色土	炭化物粒少量	あり	あり 第39回
	P56	SB4 P1	—	—	—	灰黄褐色土	ロームブロック微量	あり	あり 第39回
G-3	P1	中・近世	44	35	17	黄褐色土	繊多量・ローム粒	なし	なし
	P2	中・近世	37	28	14	黄褐色土	繊多量・ローム粒	なし	なし
	P3	中・近世	21	17	21	褐色土	ローム粒	なし	なし
	P4	中・近世	28	21	15	褐色土	ローム粒	なし	なし SD3と重複
	P5	中・近世	41	33	17	黄褐色土	繊・ローム粒	なし	なし SD3と重複
G-4	P1	中・近世	52	24	13	褐色土	ロームブロック・ローム粒	なし	なし SD3と重複
H-3	P1	中・近世	18	15	9	褐色土	ローム粒	なし	なし
H-4	P1	中・近世	19	17	13	褐色土	ローム粒	なし	なし

る点は留意されよう。調査区の制約もあり、4棟の建物跡しか認定、判別できなかったが、このほかにも建物跡や柵列などが周辺に存在していた可能性は大きい。調査区全体を俯瞰すれば、第1号溝跡と第3号溝跡に挟まれた、南北約80mの範囲に、ピットの分布が限定されているともいえよう。このことからも今回の調査地点が屋敷跡の中心的な空間であったことがうなづけるであろう。

このほかに第2号井戸跡の周囲にもピットの集中がみられ、井戸の上屋や跳ね釣瓶などの関連施設が存在していたことを推測させるが、認定することはできなかった。一方で、第3号溝跡と第4号掘立柱建物跡の間には空闊地が広がっており、園地などとして利用されていた可能性もある。

ピットの平面形は、円形もしくは楕円形のものが大半を占めているが、中には方形、長方形のものなどもある。規模は、径13~90cmと幅が大きく、平均は32cmで、大半は径30~40cmである。同様に、深さも5~57cmと幅が大きく、平均は21cmで、深さ30~40cmのものが多い。

ピットの覆土は、にぶい黄褐色土、黄褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土と多様である。混入物にはロームブロックやローム粒子を混入するものが多く、中には炭化物粒子、焼土粒子を少量含むものがみられた。

土層断面の観察では、柱痕が確認されるものも多く、中にはピットの上面に拳大の円蹕を並べたもの（B-2グリッドP11）や底面に大型の蹕を

据えたものなどもみられた。ただし、地山のローム層中にも円蹕が含まれ、かつローム層の下層の蹕層も浅いため、明確でないものも多い。

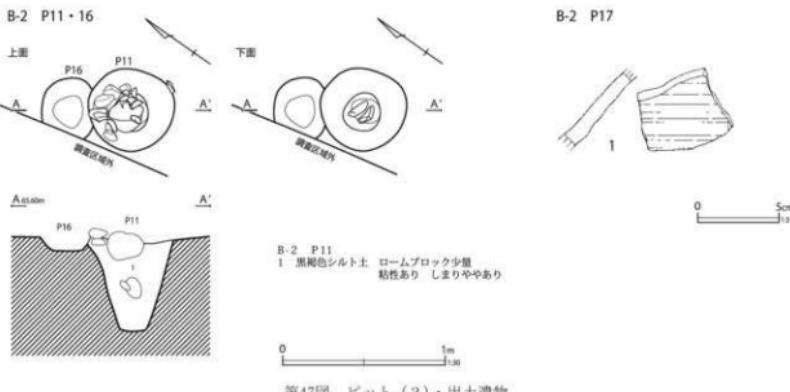
とりわけ、第4・5次調査区北西側のB-2グリッドP11は、直径約50cmで、深さも50cmを超える規模の大きなピットで、上面の真ん中に直径20cmの大形の円蹕を据え、そのままわりに拳大の円蹕が並べられ、礎石状になっていた。さらに埋土の中にも拳大の円蹕が含まれ、入念な埋め戻しもみられた（第47回）。東側には同規模のP12、P13が一列に並んでいるが、調査区の制約もあり、建物跡や柵列を明確にすることはできなかった。

ピットからの出土遺物は少なく、わずかに第4・5次調査区北側のB-2グリッドP17から陶器片口鉢の破片が出土した。

第47回1は陶器片口鉢の体部片である。外面はロクロナデを消している。内面にはわずかに降灰がみられ、内面の摩耗は下側が顕著である。胎土に長石、石英などの粒子を含み、焼成は良好で、色調は白味の強い灰白色を呈する。常滑の片口鉢I類に分類され、時期は12世紀から13世紀に位置づけられる。

ピットの時期については、出土遺物が少なく、特定することは難しい状況にある。しかし、近世陶磁器の破片などが、ほとんどみられないことを考え合わせると、中世まで遡るものも多いものと考えられる。

ただし、覆土中に天明3年（1783）に噴火した



第47図 ピット(3)・出土遺物

第17表 ピット出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	片口鉢	—	[5.0]	—	D E I K	5	良好	灰白	4次 B-2 P17 常滑 12~13c	18-5

浅間A軽石粒子(F-3グリッドP32)や水田床土粒子なども含まれているものもみられることがある。すべてを中世に帰属するものと断定することはできない。

(6) グリッド出土遺物

表土の掘削時や遺構確認時に出土した遺構の帰属が明らかでない遺物を第48図に掲載した。

1、2は、陶器天目茶碗の破片である。瀬戸美濃系の製品で、鉄軸を施釉する。1は口唇部を欠損し、体部最大径の下側が少し回んでいる。釉調はやや褐色味をもつ漆黒である。2は底部の破片で、内面に鉄軸を掛ける。底部は回転ヘラケズリが施される。釉調は黒褐色である。

1は第2次調査の南側調査区から、2は第4・5次調査区北端のA-2グリッドから出土した。

比較的近接した地点からの出土であることから、同一個体の可能性が高い。形態的特徴から大窯第4段階に比定され、時期は16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

このほかに図示しなかったが、第2次調査区から17世紀後半から18世紀前半の肥前系磁器の皿と丹波系陶器の擂鉢片が出土している。

なお、中・近世の出土遺物は、グリッド出土遺物を含めて極めて少ない。これは当遺跡で検出された遺構群の性格や時代性を反映したもののか、大きな特徴である。



第48図 グリッド出土遺物

第18表 グリッド出土遺物観察表(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	天目茶碗	—	[3.0]	—	HK	5	良好	淡黄	2次南側調査区 瀬戸美濃系 内外面鉄軸 16c末~17c初	18-5
2	陶器	天目茶碗	—	[1.5]	(4.4)	HK	5	良好	淡黄	4次 A-2 №174 瀬戸美濃系 内面鉄軸 16c末~17c初 1と同一個体か	18-5

V 調査のまとめ

沢口遺跡は、櫛挽台地南縁における縄文時代中期を代表する遺跡のひとつとして知られていた。しかし、今回の調査によって新たに南北を溝跡によって画された中に2間×7間の長大な掘立柱建物を主屋とする建物群や、井戸跡などを計画的に配置した中世前半期（13世紀後半から14世紀

1 縄文時代の様相について

今回調査を実施した第2次調査区は、第1次調査区の西隣にあたるため、第1次調査で検出された微高地上に展開する中期後半の集落跡が続いていることを想定し、調査に着手した。

しかし、調査区の大半が後世の搅乱によって削平を受けていたため、検出された遺構はわずかであった。埋甕炉をもつ加曾利E II式期の住居跡1軒と数基の土壙のほか、浅い埋没谷に堆積した暗褐色土中から中期末葉の加曾利E III式土器を主体とする遺物包含層がみつかり、その下層から加曾利E III式期の集石土壙1基と土壙が検出されただけであった。その後、南側に隣接する第4・5次調査区でも、遺物包含層の続きが調査され、南北約32mの範囲に広がっていることが判明した。

遺構からは、第1号住居跡のピットから小型のキャリバー形深鉢形土器、第1号集石土壙からは曾利系深鉢形土器のほか、加曾利E III式土器が出土した。また、遺物包含層からは、前期後葉の諸礎式土器から後期前葉の堀之内1式土器までの破片が出土しているが、主体は中期末葉の加曾利E III式土器で、それに中期後葉の加曾利E II式土器が一定量含まれていた。

石器は、第1号集石土壙から被熱を受けた磨石、ピットから溝状の使用痕をもつ砥石が出土した。遺物包含層からは、小型磨製石斧をはじめ、つまみ部を有するスクレイバー、撥形を主体とする打製石斧、礎器、スタンプ形石器、磨石、石皿、台

前半）の屋敷跡と想定される遺構群の存在が明らかになった。在地領主の屋敷なのか、役所なのか、その性格を明らかにすることは現状では難しい。

今後は多角的な視点から、これらを地域史の中に位置づけ、評価していかなければならない。ここでは、各時代の様相を概観し、まとめとしたい。

石などが出土した。

このように今回の調査では、第1次調査で検出された中期後半の集落跡に属すると考えられる住居跡が調査されたほか、遺物包含層からは大量の土器や石器などが出土し、集落の様相がより鮮明になった。これにより集落の時期は、加曾利E II式期から加曾利E III式期を主体に、遺物包含層から出土した土器なども考え合わせると、加曾利E IV式期に集落が終焉したものと考えられる。

沢口遺跡の縄文時代中期の集落景観を復元すると、第1次調査における北地区と南地区の間には遺構、遺物のほとんどない埋没谷が広がり、その北側の狭長な微高地上には20軒前後の住居跡が連なり、埋没谷の南側の低位面にも住居跡群が対峙する様相が明らかになった。未調査部分も多く、集落全体の景観復元は今後の課題であるが、微地形に制約されながらも、住居跡群が多様な方を示している様相が窺われる。

櫛挽台地における縄文時代中期の集落の様相を俯瞰すると、荒川に近い河岸段丘面上には寄居町塚屋遺跡や北塚屋遺跡をはじめ、深谷市台耕地遺跡、下南原遺跡などのような大規模集落が形成されている。それとは対照的に、水利に乏しい台地縁辺部には、沢口遺跡や亥ノ堀遺跡、長在家上遺跡などのように、埋没谷に沿って小規模な集落が列状に分布する景観が特徴的であることが、周辺の調査で明らかになってきた（村松1999）。

2 中世の様相について

中世前半期の屋敷跡

今回の調査において、溝跡によって区画された中から掘立柱建物跡4棟と井戸跡2基、土壙3基からなる中世前半期に造営された屋敷跡の一部が検出された。しかし、断片的な調査であるため、その実態に関しては不明な点も多い。

ここでは検出された遺構、遺物について瞥見し、その性格の一端を明らかにしたい。

4棟の掘立柱建物跡について占有面積を基準に分類すると、

- 1 70m²以上の大型建物（第1号掘立柱建物）
- 2 20m²前後の中型建物（第2号掘立柱建物）
- 3 10m²前後の小型建物（第3、4号掘立柱建物）

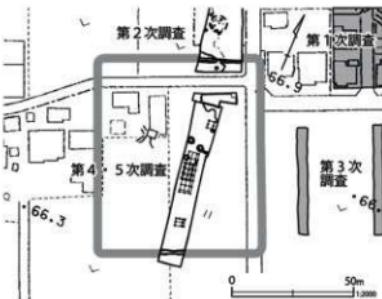
に区分することができる。

第1号掘立柱建物跡は、その規模の優位性からみて主屋的な建物として位置づけられる。2間×7間の総柱の身舎の南と東の二面に廂をもつ南北長17mの長大な建物である。

とりわけ、柱穴の上面に礎石状に円礎を並べたものや、柱穴内部や底面に円礎を置いた礎板石状の構造が注目される。県内では、本庄市大久保山遺跡、老丁田遺跡、神川町安保氏館跡、熊谷市三ヶ尻遺跡、羽生市米の宮遺跡、坂戸市金井B遺跡などで、同様の構造の柱穴に伴う礎石や礎板石が検出され、一般的な掘立柱建物跡よりも上位の上屋構造をもつ建物跡の可能性が指摘されている。

建物群の配置は、4棟とも概ね軸を揃え、第1号掘立柱建物跡の東側廂の延長線上、南に約10.8mの距離を隔て、第4号掘立柱建物跡の東側廂が位置しており、計画的な配置が窺われる。また、第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の2棟は、同じ場所で立て替えられていることから、少なくとも2段階の変遷過程が想定される。ただし、存続期間は比較的短期間であったようである。

遺物は、全体で常滑の甕や片口鉢の破片が数点のみで、出土量が極端に少ない。



第49図 星敷跡想定図

屋敷跡の範囲については、地籍図や米軍による空中写真などを参考に復元を試みた。調査区を南北に二分する道と調査区の東側を南北に走る道は、古道を踏襲している可能性が高いことから、東西約70m、南北約80mの方形居館を想定した。その当否は、今後の調査の進展に委ねるほかない。

中世前半期から後半期への歴史的動向

平安時代末期以降には、畠山氏、岡部氏、権沢氏、人見氏などの武士團が登場してくる。とりわけ畠山重忠は、鎌倉幕府の成立に多くの貢献を果たしたことでも有名で、智仁勇に秀でた「坂東武士の鑑」とうたわれる有力御家人である。また、源平合戦の際には、権沢六郎成清、岡部六弥太忠澄、本田次郎頼常、新開荒次郎実重などとともに活躍したことが『吾妻鏡』や『源平盛衰記』に記されている。そして執権北条氏が幕府の実権を握るようになると、比企氏などの有力御家人たちが排斥されるなか、畠山重忠も元久2年（1205）に二俣川（神奈川県横浜市旭区）で討死に至る。

重忠の死後、遺領は北条時政の娘であった妻に継承されたようであるが、詳らかではない。ただ、この地に重忠を誅殺した北条得宗家の影響力が直接及ぶようになったことは否定できない。

その後、南北朝の対立から室町幕府の成立期にかけて、上野国の新田氏が児玉党の武士を味方に

して鎌倉に攻め込んでいる。それぞれの武士団も北朝の足利氏、南朝についた新田氏に分かれて戦乱が繰り返される。応安3年（建徳元年 1370）2月、荒川の対岸の舟山付近を戦場とした本田合戦は有名である。南北朝の騒乱が収まても、鎌倉公方足利氏と管領上杉氏との争いの中、応永23年（1416）に起こった上杉禪秀の乱では、別府氏、玉井氏、甕尻氏、瀬山氏などの近隣の有力武士団が衰退していく。こうした歴史的動向の中に、名字の地の伝承をもたない屋敷跡（居館）を位置づけていくことが、今後の課題である。

交通の要衝としての沢口遺跡

鎌倉と各地を結ぶ大動脈である鎌倉街道上道は、寄居町赤浜から荒川を渡河し、そのまま北上して、本庄方面に通じる「榛沢瀬・本庄道ルート」と、荒川に沿って西に進み、旧花園町小前田付近で北上し、現在の県道小前田・児玉線沿いに藤岡方面に通じる「八幡山ルート」に分岐し、後者が上道の本道であったされている（埼玉県立歴史資料館 1983）。沢口遺跡に目を向けると、遺跡の南を荒

川に沿って東西にのびる秩父往還の「釣刀比羅池」から北に向かう古道は、対岸の畠山氏の本領から荒川の名勝「鶯の瀬」を渡り、「榛沢瀬・本庄道ルート」を結ぶ、最短ルートにあたることから、当遺跡周辺は荒川の水運と陸路の交差する交通の要衝として、政治的・軍事的にも重要な位置を占めていたと考えられる点も、屋敷跡成立の大きな要因と考えておきたい。

上原経塚と經筒について

昭和6年、字田向の塚から、総高12cmの金色に鍍金された享禄3年（1530）銘をもつ八角宝幢形經筒が出土した。六十六部回国納經に関わる遺品である。出土した場所は、今回の調査地点の南西約400mにあたる（第4図）。

出土遺物から13世紀後半から14世紀前半の造営と推定される沢口遺跡の屋敷跡の時期よりも後の時代であるが、秩父往還を見下ろす崖線上の高所を選んで經塚が造られており、当時、この地が宗教的な空間としても重要視されていたことを物語っている（新井1982、林1982）。

3 近世の様相について

天正18年（1590）、徳川家康の関東入国後、この地は萱刈庄藤田郷深谷領の原村に属し、旗本の間宮信伊に124石を宛行い、幕末まで知行され、明治初年には上原村と改称されている。

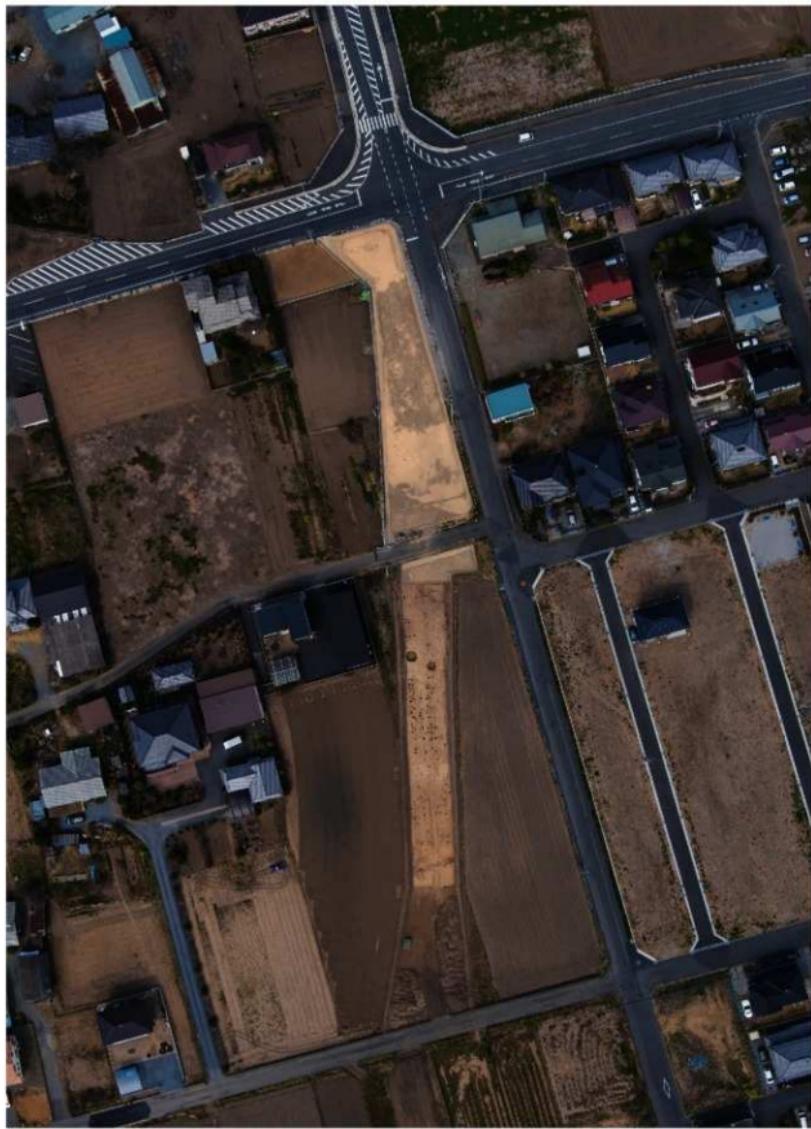
今回の調査では、近世に帰属することが明確な遺構、遺物は検出されていない。しかし、第4・5次調査で検出されたピット（F-3 グリッドP 32）の中には、覆土に浅間A軽石粒子を含むもの

もみられた。遺跡周辺の近世以降の土地利用については、『新編武藏風土記稿』や『武藏國郡村誌』などによると、当地の地味は「其色赤黒砂礫を混す小麦蕎麦桑に適せり水利不便時々旱に苦しむ」と記し、水田は少なく、畑地がほとんどで、麦・大豆・アズキ・アワ・ヒエ・ソバ・ダイコンなどが作付されていた。畑の周囲には桑が植えられ、養蚕も盛んであったことが知られている。

引用・参考文献

- 浅野晴樹 2018 「考古学からみた武藏武士の本拠」『多摩のあゆみ』第172号 たましん地域文化財団
新井栄作 1982 「川本町上原経塚と經筒」『埼玉史談』第29巻第2号 埼玉県郡土文化会
川本町遺跡調査会 1993 「沢口遺跡」川本町遺跡調査会報告書第2集
埼玉県立歴史資料館 1983 『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
林 宏一 1982 「上原経塚出土八角宝幢形經筒」『川本町文化財資料』第5巻 川本町郷土を知る会
村松 篤 1999 「縄文時代の埋没谷発掘調査と自然科学分析について」『埼玉考古』第34号 埼玉考古学会

写真図版



1 調査区全景（合成：上が北）

図版 2



1 遺跡遠景（第2次調査：北東から）



2 遺跡遠景（第4・5次調査：南から）



1 第2次調査区全景（東から）



2 第4・5次調査区全景（北から）

図版4



1 第2次調査区全景（北から）



2 第2次調査区全景（南から）



3 第2次南側調査区全景（東から）



4 第2次南側調査区全景（西から）



5 第4・5次調査区全景（北から）



6 第4・5次調査区全景（南から）



1 第1号住居跡炉跡



5 第1号土壤



2 第1号住居跡炉跡土層断面



6 第7号土壤



3 第1号集石土壤遺物出土状況



7 第9号土壤



4 第1号集石土壤



8 第12号土壤

图版 6



1 第 17 号土壤



5 北侧遗物包含层遗物出土状况（1）



2 第 18·19 号土壤



6 北侧遗物包含层遗物出土状况（2）



3 第 20 号土壤



7 南侧遗物包含层遗物出土状况（1）



4 第 21 号土壤



8 南侧遗物包含层遗物出土状况（2）



1 南側遺物包含層遺物出土状況（3）



2 グリッドピット（縄文時代）



5 第1号掘立柱建物跡（北から）



3 基本土層（トレンチ1）



6 第2号掘立柱建物跡（北から）



4 基本土層（トレンチ3）



7 第3号掘立柱建物跡（西から）

図版 8



1 第4号掘立柱建物跡（南から）



5 第2号井戸跡検出状況



2 第1号井戸跡検出状況



6 第2号井戸跡



3 第1号井戸跡



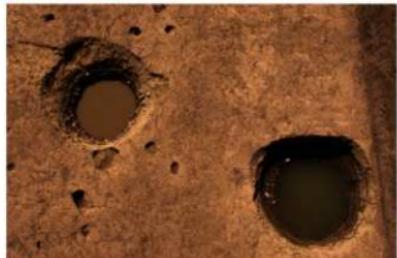
7 第2号井戸跡土層断面



4 第1号井戸跡土層断面



8 第2号井戸跡遺物出土状況



1 第1・2号井戸跡



5 第14・15号土壤



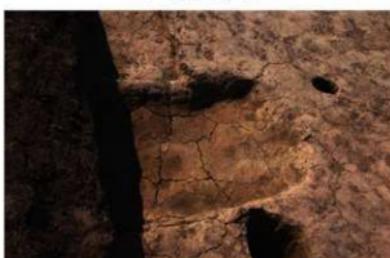
2 第2号土壤



6 第23号土壤



3 第3号土壤



7 第24号土壤



4 第11号土壤



8 第25号土壤

図版 10



1 第1号溝跡（東から）



5 第3号溝跡（東から）



2 第1号溝跡（西から）



6 第3号溝跡土層断面（西壁面）



3 第2号溝跡（西から）



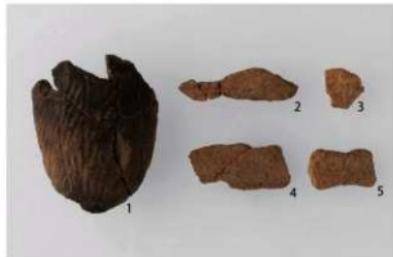
7 B-2 グリッド ピット 11 環検出状況



4 第2号溝跡土層断面（東壁面）



8 第1号掘立柱建物跡 ピット 9 環検出状況



1 第1号住居跡出土遺物（第8図）



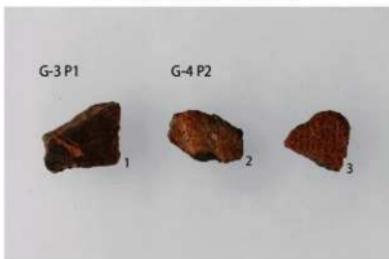
4 第1号集石土壙出土遺物（2）（第11図）



2 第1号集石土壙（第11図1）



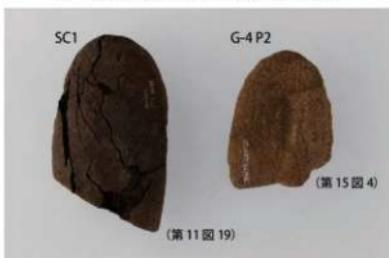
5 土壤出土遺物（第13図）



6 グリッドピット出土遺物（第15図）



3 第1号集石土壙出土遺物（1）（第11図）



7 第1号集石土壙・グリッドピット出土石器
（第11・15図）

図版 12



1 遺物包含層出土土器（1）
(第18図)



2 遺物包含層出土土器（2）
(第18図)



3 遺物包含層出土土器（3）
(第18図)



1 遺物包含層出土土器（4）
(第 19 図)



2 遺物包含層出土土器（5）
(第 20 図)



3 遺物包含層出土土器（6）
(第 20 図)

図版 14





1 遺物包含層出土土器 (10)
(第 22 図)



2 遺物包含層出土土器 (11)
(第 23 図)



3 遺物包含層出土土器 (12)
(第 23 図)

図版 16



1 遺物包含層出土石器（1）
(第25図)



2 遺物包含層出土石器（2）
(第26図)



3 遺物包含層出土石器（3）
(第27図)



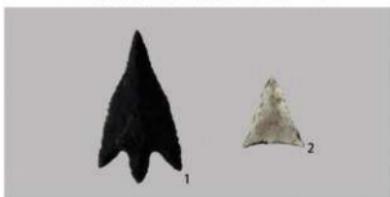
1 遺物包含層出土土器 (13) (第 24 図)



3 遺物包含層出土石器 (5) (第 29 図)



2 遺物包含層出土石器 (4) (第 28 図)



4 グリッド出土石器 (1) (第 31 図)



5 グリッド出土土器 (第 30 図)

図版 18



1 グリッド出土石器（2）
(第31図)



2 グリッド出土石器（3）(第31図6)



3 第1号井戸跡出土石製品（第41図1）



4 第2号井戸跡出土擂鉢（第41図2）



5 中世陶器（第43・47・48図）

報告書抄録

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第469集

沢口遺跡

令和2年度

ボトルネック解消推進（改築）工事

主要地方道深谷嵐山線／深谷市田中地内

埋蔵文化財発掘調査報告

令和3年3月12日 印刷

令和3年3月23日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒 369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493 (39) 3955

<https://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社